

---

# ええじゃないか それに

とりえなし

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ええじゃないか そのに

### 【Zコード】

Z2590E

### 【作者名】

とりえなし

### 【あらすじ】

ええじゃないかの続編です。前作の内容（変人達の集まる高校での日常）に加え、ラブコメ的要素が追加。一日一話毎日更新。文章量が少なめなので、物足りなかつたら前作も読んでね！

## 一度目のはじめ（前書き）

ええじゃ ないかの続編です。登場人物等は前作を読んでくれるとわかります。わからなくてなんとかなる小説なので、面倒な人はそのままどうぞ。

## 一度目のぶらぶら

「……あー、旦那。夏休みも終わりだな」「そうだな。何か楽しかったことはあったか、義人？部活がなかつたお盆のことだが」「ミケ行つたな、イッシーと」「……ミケとやらが何なのかは聞かないでおく。嫌な予感がするし。他には？」

「三時に起きて」「待て。まずその前提がおかしい」「ちやんねる見て」「いつも通りだな」「ゲームやつて」「頼むから法には抵触しない範囲でやつてくれ」「七時に寝る」「……お前の将来が本当に心配だ。一ノトになるなよ？」「それはともかく、旦那。なんでうちの高校は、一学期の開始が八月二十五日なんだ？」

「進学校だからだろ。一応」「普通、始業式は九月一日だろ。おかしくね？」「文句は校長に言え。あの無能校長は実績上げるために必死になつてるからな。俺たちの都合なんて知つたこっちゃないだろ」「さりげなくひどいこと言つてるぞ、旦那」「夏休みが終わつたら、三週間後に学園祭か……忙しくなるな」「それが終われば新人戦だ。九月はイベントが多いな」「まずは課題テストから始まるわけだが、義人は夏休みの課題終わつたか？」「……今日は夏休み最後の部活だしな！全力で泳ごう！」「今の間から察するに、つまり終わつてないわけだな」

「夏休みに宿題なんて出すんじゃねーよ!」

「きれんな。キレイやすい十代」

「あんな量終わんねーよ! うわあああん!」

「泣くな。みっともないゆとり世代」

「変な俗称をつけないで頂けませんか! -?」

「気にするな」

「気にするわ!」

「まあ明日から新学期だし、気を引き締めてこいつ」

「唐突にまとめるなよ! -?」

この物語は、変人率が異常値にある北高での愛と笑いに満ちた物語（一部誇称あつ）になる予定である。

校長の長話（ほとんどの生徒が聞いていないのによくしゃべる）が大半を占めた始業式も終わり、俺たちのクラスは教室に集まつて、わいわいがやがやと雑談をしていた。本来ならホームルームが始まつてもいい時間帯なのだが、担任の健三さん（文の才能に満ち溢れているのに、その才能を有効活用する気がない駄目人間。反面教師という言葉がしつくりくる変人の代表格）が例によつて遅刻している（チャイムが鳴つてからしか職員室を出ようとしない）ためである。……この状況になってしまった俺たちは敗北者なのだろうか。

「はい、席についてくださいね」

などと考へてゐるうちに健三さんがやつてきた。遅いですよ。

「センセー、ここにいるつてことはサマージャンボは駄目だつたんですか？」

「そういえば夏休み前に夢見がちなことを言つてたな。

「つるさいです黙りなさい！」

大人げねえ！

「今日は別の可哀想な人に分け与えたんです

「何を？」

「高額賞金の当選権をです」

要は外れたんだな。妥当なところだつ、うん。

「今日は皆さんに新しいお友達を紹介します

ここは小学校ですか。

「面倒ですので本人に出てきてもうつて自己紹介してもらいましょう。どうぞ」

前置き短つーそこはせめて、ざわつきが収まるまで待とつよ！

ガラガラと教室のドアを開けて現れたのは、女子だつた。清水を筆頭に一部の男子から歓声が上がる。

「親の仕事の都合で転校してきました、石川辰美と言います  
ん?どこかで聞いたような……?」

「趣味は繁華街をぶらぶらすることです。豊橋市とよはしには知り合いが少

ないので仲良くしてくださいね!」

「するぞー!美少女は大歓迎じゃー!…もうこつそむしろ健全な関

係でいいんで付き合つてくださいー!」

「つるさいぞ清水、黙つてくれ。俺は今、大切なことを思い出して  
いる気がするんだ。つていうか「でいいんで」つてどうこうことだ。  
本来はどんな関係を望んでたんだお前。

「何か質問はありますか?」

「こう言つのつて普通教師が言つものだと思つんだが、……健二さん  
に司会進行を期待しても無駄か。さつそく読書中(草莽枯れ行く)  
で自己紹介を無視してるし。最低だな、あの教師。英とともにと興  
味を持てよ。……それはともかく、名前だ、名前……。」

「出身地はどこ?」

「神奈川県茅ヶ崎市です」

……茅ヶ崎?

「知り合いが少ないって言つてたけど、少しほいりつてこと?」  
……まさか。

「います。深い関係の人が一人、しかもこのクラスに  
この発言にクラス全体がざわつく。

「どうした旦那、顔が真っ青だぞ?悪いものでも食つたか?」

「……義人セカチユ、助けてください」

「世界の中心で愛を叫ぶくか」

「誰?誰?」

「俺か!?」

「落ち着いてください。その人の名前は」

案の定、転校生石川辰美は俺の方を見てこいつ言ひやがつた。

「なおくんこと三井直樹、私の幼なじみです!」

## 第一話 飯事

自己紹介は終わったものの、放課後になつてもクラスのざわつきは収まらなかつた。今は俺の周りに義人しかいない（転校生、石川辰美にクラスの大部分が群がつてゐるため）が、監視されているため部活に行くことすらできない。そんな状況で一人先に部活に行かないでいてくれる義人はいいやつだと思う。俺の不幸を間近で楽しんでいる可能性も否定できないが。

「しかし旦那に女子の幼なじみとはな……そんなベタなものが実在したのか？」

「……義人は知つてゐるだろ。俺がガキの頃に引っ越してきたの」「ああ。その後は俺とほとんど一緒に過ごしてきたから、旦那と女子との交流が少ないのも知つてる」

「数が少ないのでその前からだ。なんか知らんが女子に避けられたいたからな」

「そこら辺は俺と旦那の認識が違うから置いておくとして……その数少ない女子の知り合いがあの子と保護者ちやんなわけか」

「……そうだな」

「で、その幼なじみと再会して表情が曇つてるつてか絶望感に満ち溢れてるのはどういう理由だ？」

「……お前にはないだろ。ままで生のじやがいも（皮剥かず、芽も取つてないやつ。ちなみにじやがいの芽には毒がある）を食わされて三日ほど寝込んだ経験が」

「ドンマイ、旦那」

あ、目から水が。

「……お前にはないだろ。ままで泥団子を食わされ（前回の教訓から断つたのに無理やり）、腹を下した経験が」

「ファイト、旦那」

あ、やばい。目から出てる水の量が増えてきた。

「……お前にはないだろ？ 引っ越す日今までままで」と付き合われ、薔薇（茎つき）を食われて口の中が血だらけになつた状態で車で移動した経験が

「薔薇は食用にされることもあるぞ。でも頑張れ、田那……声出して泣きたくなつてきた。

「さあ懺悔の時間だ、三井」

「清水は懺悔の意味を知つてゐるか？ 懺悔とは罪悪を自覺し、これを告白し悔い改めることをいうんだ。俺は罪悪を感じていなければ無関係だな」

主に悲運を感じてゐるが。

「何気に可愛い知り合いが多い理由について弁明を聞いつか

「俺つて運が悪いこと心の底から思つていい

「はあ？」

いや事実だし。

「もうすぐ女子の質問攻めも終わるよつた。そつしたらお前にも質

問がいくだろ？ から、正直に答える」

「どこにそんな義務がある」

「義務はないが、答えない限り帰ることはできません」

「脅迫か」

「クラスの総意だ。恨むなら多数決の民主主義国家を恨め」

なんてクラスだ。そして民主主義国家はなんてことを考案したんだ全く。ふんふん。

「……田那、気持ち悪いぞ」

俺も自覚してゐる。ただ心に、もはやそれを気にする余裕がないだけだ。

## 第三話 質問会

俺と幼なじみの転校生、石川辰美は並んで椅子に座らされていた。  
……少しばかり詳しく述べ、俺に関しては後ろ手に椅子に括り付けられていた。何これ？今から俺は死刑執行でもされるのですか？清水の様子を見るとあながち冗談でもなさそうだから困る。

「るーるる、るるる、るーるる、るるるるるるるーるーるー」

「では公開合同質問会を始めます」

「なぜに公開合同質問会のバックミュージックが、徹子の部屋く！」

？

「……ははは、変わった高校だね……」

「変わってるとかい、うレベルじゃない！まず俺を縛つて、この紐をほどけ！」

「被告人、三井は黙りなさい」

「やつぱり俺は被告人なのか！？そんな扱いなのか！？弁護士を呼んでくれ！」

「僕が弁護士代りになつてあげるよー」

「石井、お前……さすがは俺の親友の一人なだけあるよ……」

「じゃあ聞くけどー、石川さんと一緒に寝たつていう情報があるんだけどー、事実だよねー？」

「訂正だー！お前なんて仲間じやない！」

「だからその情報を手に入れた！？火に油を注ぐな！四面楚歌にもほどがある！クラスの男子が殺氣立つからー、清水なんてあれ、殺し屋の田つきだろ！？嫉妬で人を殺せるレベルだよあれはー！」

「石川さん、答えてください」

「事実だよ？」

「三井、死ね」

「司会（夏目）このクラスのホームルーム会長を務める。健二さんには仕事を押し付けられたせいで仕事の処理能力等が格段に上昇した

苦労人。最近彼女に振られ、今は独り者（ひとりじこ）！感情的になるな！そんな会じやないだろ質問会は！？

「でも事実だよね、なおくん？」

「なおくんって何だ？曰（い）那（な）？」

「義人、一（い）ヤ二（に）ヤしながら聞く（き）んじゃねえ！それと石（いし）川（かわ）さん、なおくん言う（い）うなー恥（はず）かしいからー！」

「昔はそう呼んでたじ（じ）やん」

「昔は昔！一緒に寝たのも、幼稚園児（おとこ）のお泊（と）り会（あ）みたいなもんだからー！」

「えー、お互（たが）いの家で一人（ひとり）きりでも……」

「黙（だ）らつ（だ）らつしゃ（しゃ）い！あと石（いし）井（いの）！覚（お）えてろよー！？」

「えー、事（こと）実（じつ）だつたじ（じ）やんー」

「言い（い）方（かた）つてものがあるだ（だ）らつー！？」

「えー、では別の質（しつ）問（もん）に移（い）ります」

「もう終（し）わりにしない？」

「はー、深谷（ふかや）君（くん）」

「俺（わ）の意見（いん）は無視（むし）ですかー！？」

「あの司（くみ）会（わい）、都（みやこ）合（あつ）の悪い（わる）いことばと（ことばと）ん却（しりぞ）下（おろ）する（う）じー。

「三（さん）井（い）は石（いし）川（かわ）さん（さん）の（の）ことを（こと）なんて呼（よ）んでた（た）んだ？」

「ノーノーメント」

「タツミ（たつみ）ちゃん、かな」

「言（い）わなく（な）くていいからー！？」

「なんて恥（はず）かしい。おのれ、過去（かくじゆ）の俺（わ）は何（なに）をやつ（ひ）いていた（いた）んだ。石（いし）川（かわ）さん（さん）って呼（よ）んどけよ。馬鹿（ばか）野（の）郎（ろう）」

「それではこれから、一人（ひとり）はお互（たが）いに「（ひ）なおくん（くん）」、「タツミ（たつみ）ちゃん（ちゃん）」と呼（よ）ぶよ（う）こ」

「横（よこ）暴（ぬけ）だー！」

「なぜ司（くみ）会（わい）に（に）そんな権（ごん）限（げん）がー！？」

「いいよ。そつちの（の）方が（が）呼び慣（なま）れてた（た）し」

「ではよろしい（よろしく）ですね」

「よろしくないよ！俺の話聞いてた！？」

「……私もその方がいいな」

「よろしいですね」

「……せめてタシミで勘弁してください」

「よろしい」

怖えよ、夏目。女子に甘いよ。そして人の不幸を<sub>もてあわせ</sub>遊び過ぎたよ。

「では質問を続けます」

「……勝手にしてくれ」

「どうせ止めても無駄なら早く終わらせよう。いつ終わるか見当もつかんけど。」

「質問のある人、挙手!」

「「「はい!」」

「……多いなー。そのやる気を授業の時にでもまわしたらー?」

「では、加藤さん」

「二人の関係は、ただの幼なじみなの?」

「ただの幼なじみ。もしくはそれ以下。俺が引っ越しして以来、会つてなかつたし」

年賀状を数年ほど出して、それ以来は手紙での交流も無くなつたからな。

「次、伊藤さん」

「石川さんはどうしてすぐこのクラスに三井君がいるつてわかつたの?」

「この高校になおくんがいるつてことは知つてたから。同じクラスになつたのは偶然だけど」

「それならどうして同じ高校に転校してきたの?」

「まず、うちと直君のお父さんの会社が同じでね、そのお父さんが同じ工場に転勤になつたの。それでこの高校が、豊橋で一番の進学校だから編入試験受けたら受かつたつてわけ。親同士の交流はあつたから、それでなおくんもこの高校だつて知つたわけ

「つまり全くの偶然だな」

「僕としてはー、三井にはなぜ知らされてなかつたかの方が気になるなー」

「もう交流していないから、親が知らせる必要がないと判断したんだ

る」

最近母さんが妙に嬉しそうにしてたのはこれが。納得。まあ本来、知らされる必要もなかつたしな。奴があんな自己紹介しなかつたなら。

「どうしたの、なおくん」

「……今更ながら、お前がすべての元凶だと理解したよ」

「…………？」

「次の質問は？……兼子」

「石川さん、恋愛経験は？」

「男子と付き合つたりした」とはないかな」

「次、岡田さん」

「部活は何やつてた？それでどこに入るつもり？」

「水泳部だつたし、ここでも水泳部があれば入るうつと思つたけど  
……もしかしてプールない？」

「いや、あるぞ。校舎から歩いて五分から十分のところに

「それは遠いね……」

「ちなみに、このクラスには四人水泳部がいるよー」

「そうなの？」

「うんー、県大会入賞の浜ちゃんにー、その杉田と僕ー、それと  
三井も水泳部だよー」

「そうなの！？」

「…………ああ」

「なら入る！」「

知り合いがいるなら入るのか。現金なもんだ。別にいいけど。

「他に質問は？」

「三井君は彼女いるんですか？」

「転校生と関係ねえ！」

「いないよー」

「石井！勝手に答えんでいい！」

「いないけどー」

「 そうなの！？ おくんにはてっきりもういるかと……」

「 悪いか！？ どうせ俺なんて十六年生きてきて彼女いねえよー。」

なんで転校生の質問会で、こんな泣きそうになってるんだろうか、

俺。

「 三井君つて杉田君と石井君との三角関係なんですよね？」

「 なぜそんな展開にー！？」

「 そうなのー！？」

「 タツミも信じるな！ そんなわけないだろうが！」

「 三井君が攻めと見せかけて受けなんですよねー！？」

「 話を聞け腐女子！ 義人と石井も言ってやれ！」

こういうのは本人たちで否定するのが一番だ！ 義人、石井、さあ  
大きな声で！

「 …… 黙秘します」

「 …… 僕からは何も言えなくてー」

「 なぜ！？ 默秘する意味がわからないー！ 否定しろよー！ 貴様らやつ  
ぱり俺の敵だ！ 畜生！」

「 直君がそんな道に走つてたなんて……」

「 俺の言葉に説得力というものはないのか！？」

喧噪の中、質問会は終了したのだった。そしてこれを機に、俺の  
変な評判も広がることに……。

登校拒否したい。

「でもよかつた。なおくんが非倫理的な道に走つてなくて……」「十年ぶりに会つたとはい、一瞬信じかけたお前の神経を疑う」今俺たちは、プールまでタツミを案内している。もともと今日も部活はあるため、案内はついでなのだが。……すっかり行くのが送れてしまつたので、小倉さんがどうしているかが心配なところだ。

「遠いね、プール」

「そうだねー。校舎から歩いて五分強でー、駐輪場からだと十分は余裕でかかる距離にあるからねー」

「そんなに広いんだ……」

「なにしろ公立普通高校では、日本で一番広さらしいからな」「すごいねー。緑もきれいで……うん、いい学校かも。面白い人も多いみたいだし」

……面白い人？奇人変人の間違いだろ。

「ところで、水泳部の人たちのことを教えてくれない？」

「構わんぞ」

「じゃあまずそこの人！」

「そこの人……義人か。

「こいつの名前は」

「名前は杉田義人だよー。二次元オタクにして運動、勉強のレベルは上の下ー。彼女は生涯一度もできたことがないけどー、告白されたことが中学の時に一回ー。男女問わず話しかけて仲良くなるしー、面倒見もいいから結構もててたみたいだねー。ただし付き合つたりしたことはないみたいだねー。理由は二次元に彼女がいるからだつてー。この辺は僕と同じだねー。それとー、小さい頃から家事全般を親に叩き込まれてているからー、すぐのでも一人暮らしができるほどに能力値が高いよー。血液型はB型で星座は乙女座ー。三井の最も親しい友人だねー」

「詳しい！俺について詳しそうなソイツシーパライバシーという概念が君には欠如しているのかな！？」

「……ははは、変わった人だね……」

「どつちがだ。どつちもか。（自己完結）

「ちなみにこのプライバシーを無視している男が、石井。色々と人の噂や裏話をよく知っているから、味方にすれば心強いが敵にまわしたらこれほど厄介なやつもない。基本的にはいいやつで、運動神経もいいし頭もいい」

「血液型はB型でー、星座は蟹座だよー。それともちるん＝井の親友ー」

「その情報に需要はあるのか」

「血液型と星座で。占星術にでも使うのか。

「でも、親友のところを否定はしないんだね、なおくん

「……まあな」

「間違いない」の二人は親友だ。そこはどりしても否定できない。恥ずいけど。

「あとうちのクラスにはもう一人、浜ちゃんっていう速い奴もいる」「今はもうプールに行っちゃったけどねー」

今頃は小倉さんの地獄の特訓を受けていることだろう。『愁傷様。

「見えるか？ あそこがプールだ」

「みんなは泳いでいくの？」

「そりゃ水泳部だし」

「毎日毎日、四キロも五キロも泳ぎたいとは思わんが。

「見学していい？」

「そうでなければ何のためにきていたんだよ」

「うーんと、十年ぶりに再開した幼なじみと話すうと思つたから？」

「そつか」

「あれ？ 反応薄いね」

「十年も離れてたら、もつ性格も変わって別人になつてるだろ」

「そういうものかな？」

「そうだろ」

人は変わるものだ。俺もタツミも思い出の中のきれいなままではないだろ？。……そもそも思い出の中でもきれいかどうか微妙だが。

「でも旦那は昔からこんななんだつたよ？な……」

「こんななんつてどんなんだよ」

「突つ込み気質で、厄介事に巻き込まれやすい体质」

「……」

ノーロメントにしておこう。……決して悲しくて言葉が出なくなつたわけではない。きっと。たぶん。おそらく。

## 第六話 遭遇

「「」が水泳部の部室？」

「ああ。更衣室とかシャワーは中にある」

「もちろん二十五メートルプールだよー」

「部員は何人くらいいるの？」

「今は十二人だったかな。内、一年は八人だ」

「女子の人数は？」

「先輩に一人と一年に一人の二人。二人とも地区では入賞レベルで、石川さんが入れば三人になるよ」

「へー。少数精鋭なんだね」

「やつぱりー、女子だと高校になつてまで水着姿になるのは恥ずかしいみたいだねー」

「それだけじゃないんだけどね、女子は」

「何が？」

「つうん、何でもない」

話を打ち切つてタツミが部室の扉を開けようとすると、制止する。

「一つ忠告を忘れていた」

「何？」

「……顧問の先生が怖いから、心しておくよ」「」

「怖い？暴力をふるうとか？」

「いや、そんなことはないが……とにかく怖いから気をつけり

「……？まあいいや」

よくわかっていない表情で、再び扉を開けるタツミ。まあ会えればわかるだろう。一応忠告はしたし。

「失礼します」

練習はすでに始まつており、選手は泳ぎ、顧問とその他一 名はプールサイドで指示を出していた。

。

「あつ先輩！！遅かつたですね！！」

「……なぜ夏休みが終わつたにもかかわらず貴様がいるんだ……」

その他一名こと保護者（今年受験生の後輩。夏休みには見学がら、水泳部のマネージャーの仕事をしてくれて）が寄ってきた。小倉さんは浜ちゃん（すでにグロッキー状態）の指導でひりに気づいていないようだ。

「まだ中学校は夏休みですよ。八月<sup>一</sup>十五日に始業式なのはこの学校くらいじゃないですか？」

「おう、そうだった」

まだ八月だったのをすっかり忘れていた。始業式早すぎだろ。決定した校長なんて水虫になればいいのに。

「そんなことより……」

「ん？ どうした？」

「誰ですかその女」

……途端に保護者の声のトーンが下がり、周辺の空気が急速に冷える。な、何なんだこの空気は？ 八月だというのに冷汗が出始めた……？

「て、転校生だ」

なんでどもつてるんだ、俺。先輩の威厳を見せつけないといかん。

「そんなことどうしてお前に関係が

「いいから答えてください」

「……ハイ

「おおつと田那、保護者ちゃんに押し切られたーっ！…」

「ええー、こ<sup>レ</sup>は女子には弱い三井の特徴がよく出でますねー」

「ひるさいよそこ二人。何実況してんだお前ら。

「で、先輩。どなたですって？」

「転校生のタツミだ」

「田那が心中でツツツ<sup>ツツツ</sup>を入れたことで、平静を取り戻したようですね」

「やはりー、天性の突つ込み氣質と言つたところでしうかー」

「ですね」

「うつさいお前ら。わつわと着替えて泳げ。

「フルネームは？」

「石川辰美だ」

「……どうしてあつたばかりの転校生を名前で呼んでるんですか……？」

「保護者、怖いよ。小倉さん（ヤクザ顔で筋骨隆々）並みのプレッシャーだよ。

「……いや、タツミとは幼なじみで」

「始めてまして。私、なおくんの幼なじみで石川辰美といいます」  
「ナイスカットインだ、タツミ。あと少しで立つてすりこられなくなるところだつた。わが後輩ながら恐ろしい女よ。

「……なおくん……？馴れ馴れしい……」

「また冷氣が！？」

## 第七話 細胞

現在、局地的に地球寒冷化現象進行中。

「昔、直君って呼んでたから。今日のクラス会議で承認もされたし」「誰ですか」

「クラスみんなと直君に」

「私は承認してません！」

「そりやお前はうちのクラスじゃないし、関係ないな。」

「ところで、あなたの名前は？」

「……話を逸らさないでください」

「名前くらい教えてもいいだろ」

「先輩は黙つっていてください」

「ハイ」

イエスマントは今の俺のようなものをこいつのだらう。武部元幹事長のことを、俺はもう一度と笑えない。

「旦那弱い！一撃必殺効果絶大！」

「女子になにかトラウマでもあるんでしょうかー」

「……あるよ。悪いか。

「古木です。今、中学三年の受験生です」

「へー、受験生かあ。私もつい最近編入試験受けたから、受験の辛さはよくわかるよ」

俺が一人に内心で突っ込んでいた間に、保護者の自己紹介が済んだようだ。

「それで、先輩とはどういったご関係で？」

「ただの幼なじみだつて。ところであ」

「一呼吸おいて、タツミが尋ねる。

「なおくんのこと、好きななの？」

「……な、何を言つているんですか！？」

「そうだぞ、保護者が俺のことを好きなわけがないだらう（失笑）。

むしろ先輩なのに侮られてるくらいだからな。嫌われてぐさやあ！

？」

「……先輩のそういうところは大嫌いです」

否定しないのなら、足の小指を思い切りよく踏みつけないでくれるかな！？小指の細胞、70%が死滅（残り30%の大半は痛みを感じる細胞。つまり痛みは最大級で持続中）したんじゃないか、これ！？涙が止まらない！！

「旦那は愉快だな」

「そうだねー」

そんなこと言つてる暇があるなら助けたまえ！！痛くて声すら出ない状態だから察しろ！！

「……ん？何か旦那がメッセージを送つてるぞ」

さすが義人！俺の危機を察してくれるのはお前だけだ！

「なになに？「ハンバーグの合挽きは7：3に限る」？俺もそう思うぞ」

そんなメッセージ送つてねえ！！俺は合挽きにそんな情熱を抱いてないから！！

つていうか小指やばいから！早く氣づいて！お願いします神様仏様！！（涙目）

「……んー？三井がまたメッセージを送つてるみたいだねー」

さすが石井！お前の情報収集能力なら、これくらいわけないと信じたよ！

「なになにー？「この前撮つた健三さんの水着姿の写真（惱殺ボズ入り）を分けてくれ」ー？いいよー」

そんなメッセージ送つてねえ！！そんな写真撮つたのー？ちょっと見たい！小指が無事なまま、生きてこの場を切り抜けられたならだけだー！！

「あはは……。古木さん、心配しなくても大丈夫だよ」

「……何がですか」

「私、今はおくんにそういう感情を抱いてないから

「……そうですか」

……おお、小指から重さが減った。助かつたよタツ!!、ありがと  
う。

「さあ、ほんたうにねえ、おれからくどいがるがにれがんないに  
どね」

23

「……ん。おい三井、そこの女子は誰だようやく小倉さんが、いつしか起っている現状に気付いたらしい。

「小倉さん、」ひかり、転入生で、一年の、石川さんで、入部希望、です

「どうした？言葉が途切れ途切れになつたが。涙田のよつだが、怪我でもしたか」

その通りです。しかも現在進行形で怪我が酷くなつてゐるんですが。もう小指の細胞の90%が立ち直れない傷を負つたに違ひない。だから早く足じけてください保護者さん。

「……顧問の先生ですか？」

おおびじつてゐるびじつてゐる。小倉さんもあまりプレッシャーを貰えてやらないでください。素人ですから。一般人ですから。

「ああ、小倉とう。体育教師をやつとる。兼、水泳部顧問だな」「よろしくお願ひします」

「ああよろしく。そこに掛けてくれ。入部は決定でいいのか」

「はい」

「それなら入部届けに記入してもらつ

「わかりました」

小倉さんに気押されず、しっかりと答えるタシミ。あんたは立派だよ。そして保護者。黙つて立つてないで練習を見に行つてやれ、俺の足を踏むのを止めて。土下座で止めていただけるのであればいくらでも、むしろ喜んでさせて頂きますのでどうかご検討くださいお願いします。

「古木、浜口たちのメニュー続けさせな。手を抜くようなら最初からやり直しだと云えとけ」

それを聞くと、保護者はしづしづ足をビク、プールサイドへと去

つていった。若干しちらを気にしながら。

……そ・れ・に・し・て・も。

神だ！小倉さん神だよあなた！俺を救つてくれたのは、キリストでもブツダでもなく小倉さんといつ名の神だった！

「……お三三井。何をやつとる」

「土下座です」

有言実行は俺のポリシーだ。今なら喜んで小倉さんの靴の底を舐めることができるだろう。それほどまでに足の痛みはやばかったのである。今もまだ痛いけど。

「……何があったのかは知らんが、不気味だから止める。それとさつさと着替えて泳いで来い。遅刻したから時間もないだろう」

「仰せのままに」

なんだつてやりましょ。ただし、キックが打てるか自信ないので恥しからず。理由を聞かれても正直に答えられないのが痛い。保護者に報復されそつだし。……告げ口はよくないよね！そういう理由にしておこう！

「三井が壊れてるねー」

「旦那は体と心に多大なダメージを受けていたみたいだからな。この数分でかなりへたれてしまつたようだ」

「やーいへたれへたれー」

やかましい。お前らもさつさと着替えんかい。実況用のそこの机と椅子も片付ける。どれだけ用意よかつたんだお前らは。

「浜口信也だ。自慢じゃないが、中学ではインターハイにも出場した。同じクラスだし、うまくやつていこう」

「タツミ、浜ちゃんの身体能力は異常だ。見る、あの胸の筋肉。下手な女子よりあるぞ。鳩の生まれ変わりじゃないかと俺は睨んでる」「みつちゃん、何か俺に恨みもあるのか」

「恨みなどない。事実と俺の私見を言わせてもらつてるだけだ。

「片山です。個人メドレーで大会には出てるから、しきて言うなら背泳ぎが得意かな。よろしくね」

「マサは甘いマスクに高い身体能力。女子の人気も高いらしい（石井調べ）。好きになるなら修羅場の一つや二つ、覚悟しておくことだ」

「人聞きの悪いこと言わないでよ。彼女いるし」

「そうだったか。

「……田村。大会登録種目は個人メドレー。以上」

「田村は水泳部の一年で、石井と一、一を争つほど頭がいい。だから勉強のことは奴に聞け」

「どうして僕じゃ駄目なのー？」

「そういうなら見返りを求めるな」

教えてもらった代償に、噂話の実態を確かめさせるとかどんな拷問だよ。俺はそんな訓練受けてない。

「俺は松田。種目は平泳ぎだ。よろしくな、石川さん」

「松ちゃんは常識人と見せかけて、すぐに悪ノリするからな。気を付ける」

物事を面白い方向にもつていこうとするのは、この学校の大半の生徒の習性であるのだが。

「……高城です。女子は少ないから、仲良くやつていきましょう」

「高城さん。高城さん。高城さんの速さも化け物クラスだ……とは思つけど口にしない。」

女子にはできるだけ関わらないのが、旦々を穏やかに運営するための鉄則だ。

「あまりにひどいと旦那は突っ込むけどな。女子にも」

「なおくんってそういうポジションなんだね」

「あとは、顧問の先生が小倉さんだ。あんな怖い顔して筋トレマニアだが、水泳連盟では結構なお偉いさんらしい。高校球児だったのに」

その情報を石井に知らされた時は、野球部顧問の先生が急激に憎くなつたよ。いや、小倉さんはいい先生だけね？ いかんせんメンバーがきつすぎるんだよ。

「……とまあ、メンバー紹介はこんな感じだな」

「せつかくだからー、親睦を深めるためにあれしそうかー」「あれつてなに？」

「そうか、石川さんは知らんよな」

「旦那、教えてやれ」

「ああ、そうだな。」

「タツミ、今からみんなで遊ぶんだが、お前もやるか？」

「うん。なにで遊ぶの？」

「へエロ大魔王くだ」

「…………」

「…………はつー？違つぞー？そんないかがわしいゲームじゃないからなー？」

俺から距離をとるタツミにそつ言葉を投げかけるも、泣きそうな目で俺を見つめてくるだけだった。ジーザスー！この単語を使つべきではなかつた！！

「旦那、気でも触れたか？」

「みつちゃんがセクハラをしようとするとはな……」

「へーんたーー」

「……嫌がらせも大概にすべき」

「先輩、最低ですね。石川先輩は先輩から離れた方がいいですよ。触れられたら、妊娠させられます」

「お前らそんなに俺が嫌いか！？ フォローしようよーしてくれよー！」

いつもみんなでやつてるゲーム（大富豪の発展版。詳しく述べ前作を読んでください）なのに裏切るなよーっていつか息ぴったりだな  
おいー！

その後、皆の妨害工作を受けながらも、距離の空いたタツミに事の次第を説明したのだった。

……お前ひ、こつかいの田舎は返してやる。

## 第十話 権利

「先輩、私との約束覚えてますか

タツミが他の部員から質問攻めになつてゐる中（工口大魔王は俺が鬱になつたため中止。タツミには一応ルールを説明した）、突然保護者が話を切り出してきた。

「約束？ ナンノコトカナ？」

「……先輩、わかつていて言つてゐるでしょう、お菓子作り勝負の件です」

「ああ、わかつてたよ。お菓子作り勝負での景品の、俺一日使用権（提案者石井）だる。……あの直後は何をさせられるのか怖くて、いつそ忘れてくれないかなーとか思いながら過ごしていたくらいだからな……。お盆休みになつても何も言わないから、しめた、保護者あの約束を忘れてるとか、でも約束は守るべきなのかとか葛藤してここ数日も過ごしていいたしな。ある意味では保護者が覚えていてよかつたよ。別の意味ではものすごく鬱だけじ。

「……で、いつ、どこで何をすればいい？」

手短なので頼む。……といつても、一日、使用権だし、無駄な抵抗だらう。

「では、発表します！」

「テンション高いな」

「高くもなりますよ！ ずっと貯め込んでおいたんですから！」

「なぜその貯め込んでおいた使用権を今になつて使うんだ？」

「……本来、もつと特別な日に使う予定だったんですけどね……」

「特別な日？」

「そこはスルーしてください」

「ならなぜ予定が狂つたんだ」

「……嫌な予感がするんですよ、石川先輩には

「……なんだつて？」

声が小さくて聞きとれん。ワンモアブリーズ。

「なんでもないです。杞憂かもしれませんし……」

「そんなことはどうでもいいんです！それより明日一・駅西口一・十時

に集合です！いいですね！」

「気合入ってるな。何をさせるつもりか知らんけど。

「もし予定があると言つたり？」「

「キャンセルしてください！」

「わー、即答ですよ。さらば俺の予定（図書館で、藤沢周平著「用心棒」シリーズ全てを読み返す計画）。こんなことなら儲りとけば

よかつた。

「……それで、明日は何をするつもりだ」「肉体労働は勘弁願いたい。拒否権ないけど。

「……そうですね」「

なんだその間は。」「明日教えます！」「

もしかして考えてないのか。だとしたら、なんて場当たり的な権利の使用だ。もつたいない。……使用される側の感想じゃないな、これ。

「旦那、帰る」

「ん？ ああ」

すでにみんなは帰り支度を済ませていた。俺としたことが迂闊だつた。

「保護者ちゃんと何を話してたんだ？」

「あの件だよ。お菓子作りの」

「……そうだった。旦那一日使用权、使ってなかつたな「地雷踏んだ！こいつ、忘れてたのに！迂闊すぎるぞ俺！」「とりあえず考えとくから、忘れてたら、また言つてくれ」

そのまま忘れてくれ。義人なら別にいいから。



## 第十一話 嫌

下校途中。

「旦那、イッキー、しつとつじょひが」

「構わんぞ」

「いいよー」

「よし、しりとつのゝつゝからだな」

「待て、旦那。普通のしりとつじや面白くないだろ」

「そうだねー」

「だつたらどうするんだ?」

「ゝあつたら嫌なもののしりとつゝにひ」

「……意味がわからん」

「文字通りあつたら嫌なもののみ使用できるしつとつだ」

「よくわからんな」

「じゃあ、俺、イッキー、旦那の順でやるから、俺たち一人のを聞いて理解してくれ

「おつけー」

「わかつた」

「しりとつのゝつゝから……」

「西津勘吉殺害」

「あつたら嫌だ!こち亀の終わり方がそれだつたら暴動起きるわー!」

「次は僕だねー。」

「医療事故」

「そうこうのにしどけよ義人!」

「」

「小島よしお都知事」

「」

「上司がカエル」

「文章かよ!何でもありか」のしりとつはー?」

「」

「ルパン百四十五世」

「どんだけ未来!?

「」

「医師免許剥奪」

「」

「鶴の仕返し」

そんな童話嫌だ！！

「>清水VSプレデター＜」

もはや清水は人外扱い！？

「た……>たらい回し＜」

「>清水VSプレデター2＜」

シリーズ化！？

「>津波＜」

「み……>未来予知＜」

あつたら人生つまらなくなるといふことで。

「>朝鮮帝国＜……ああ、これは北朝鮮が同じようなものだから駄目か」

「危険な発言はやめい！」

「じゃあ>痴漢冤罪＜で」

「>一万年と二千年前からあがいてる＜」

あがきすぎだよ！あきらめろ！

「る……>ルール無断変更＜」

「>ウツチャンのウリ！＜」

逆はあつたけどね！

「>リングゴとくさやのソテー、納豆ソースかけ＜」

聞いただけで気持ち悪くなりそうだ！

「……>健三さんセミヌード写真集＜ノワイキキ＜」

あつたらちょっと見てみたいけど、実在したら引くこと間違いな

し。

「>気 がいに刃物＜」

「だから危険な発言は禁止！」

危ないだろうが！色々と！

「>のび太君東大合格＜」

不正だ！絶対ドラえもんの道具使つてるよ！

「……なあ、切りないからそろそろ止めるか」

「じゃあ三井の負けだね！」

別にいいが。

「旦那は罰ゲームとして健二が言ことつたことをものまねして言いたまえ」

難しこな。

「……」

「旦那、準備はいいか」

「ああ

「三、一、一、はい！」

「生きるのも面倒くさいです。でも死ぬのも面倒くさいので向もじません」

「三井一、それ健二さんの新任時代よく使つてたセリフだよー」

マジでー?

## 第十一話 嫌（後書き）

最近ギャグパートが少ないですよね……申し訳ないです。

## 第十一話 破壊

保護者に付き合わされる」となった土曜日、俺は待ち合わせ場所に向かっていた。ここからならあと五分でつく距離で、待ち合わせ時間まであと十分だから、五分前にはつく計算になる。やはり人として五分前行動を心掛けたいよな、うん。ガキっぽい? ほつとけ。  
「……しかし何をさせられるのか未だにわからんからな……」  
できれば、一日バイトさせられて稼いだ金は全額没収などという展開は「免じ」むりたい。拒否権なんてないけど。

「先輩! さあ行きましょう!」

「……その前に何か言つことはないのか貴様は」

「少し遅れましたか?」

「三十分は少しとは言わん」

なんだこの罰ゲーム? 駅でぼーっと突っ立ってる高校生がいたら、普通注目受けるだろ。同世代の奴らがこいつを見て、くすくす笑つてやがつたぞ。あれは馬鹿にされてたな、間違いなく。  
「別にいいじゃないですか」

「時間くらい守れ。お前が決めた時間だ」

「そんなことはどうでもいいんです」

それをどうでもいいか判断するのは待たされた俺だ。しかし今日は奴隸的身分のため自粛する。

「先輩? どうかしましたか?」

「……いや、自分で奴隸的身分とか思つてしまつた俺つて一体……」

「先輩が私の奴隸……」

「よくよく考えたら何の拘束力もない、ただの約束事なんだよな」

「……」

「そんなわけで、優しい保護者は変な命令は出さないよな?」

「…………」

「保護者？」

「…………」

何この沈黙？俺の嫌な予感センサー（的中率に定評あり）に反応があるんですけど？

「決めました」

「…………何を？」

「先輩は今日一日、私のことを崇めて呼んでください――！何その無茶振り！？」

「…………保護者様？」

「喧嘩売ってるんですか」

まあ確かにこの呼び方じや崇めてるとは言い難いな。P-T-Aへの手紙じやあるまいし。

「なら具体的にはどう呼べばいいんだよ…………」

「仕方ないですね。具体例をいくつかあげてあげますから、その中から選んでください」

「よしきた」

「まず、>瑠璃お嬢様く」

「質問いいか？」

「なんですか？」

「お嬢様はわかるとして、瑠璃つてどういう意味？」

「先輩は可愛い後輩の名前すら覚えてないんですか死ねばいいのに」

「語尾に罵倒がついてるぞ！？」

「死ねばいいのに先輩は可愛い後輩の名前すら覚えてないんですか」

「俺が問題にしたいのは、罵倒の言葉の位置についてじゃないから」

「前に着いたら俺の名前が>死ねばいいのにくみたいじゃん！」

「私の名前は古木瑠璃です。脳裏に刻み込んで永遠に忘れないでく

ださい」

「大げさな」

「で、どうぞ」

「？」

「だから、瑠璃お嬢様と呼んでください。執事風ならなおいいです」

「……崇めつつ？」

「その通りです」

……やるしかないのか。やるかひひベストをぬぐへず、これ常識。といつわけで保護者の顔をじっと見つめ、言ひ放つた。今の俺なら執事喫茶のバイトも余裕でこなせる……はず。

「瑠璃お嬢様」

「…………！」

「どうかなさいましたか瑠璃お嬢様？」

「ちよ、ちよっと待つてください先輩！」

「顔が赤いですよ。熱でもあるんじゃないでしょうか、おでこを出してください」

「なー？」

「どれどれ……ふむ、熱はないようですね」

「はふう……」

機能が停止でもしたか？動かなくなつた。

「瑠璃お嬢様？」

「…………！」

返事がない。ただの抜け殻のようだ。

「保護者。このままなら俺帰るぞ」

「……先輩、やっぱり執事キャラはやめです。破壊力ありすぎです」  
破壊力つて何がだ。確かに俺の尊厳とか、大切なものが色々と破壊された気もするが。

「なら呼び方はいつも通り保護者で」

「第一案にします」

……まだ案があるのか、呼び方一つに。

## 第十二話 主人

「では第一案です」  
「……そうか」  
「もうどうとでもすればいい。」  
「第一案は↗ハニ↙です！」  
「また変な要求を……」  
「ではどうや！」  
「はにー」  
「もつと気持ちをこめてくださいー！」  
「はにー」  
「もつとー」  
「ハニー」  
トースト。  
「……何か別のこと考えてませんか？」  
「甘つたるいパンを想像して、食いたいという気持ちをフルに籠めていた」  
「またふざけてるんですか」  
失敬な。俺は基本、真面目なのに。今はふざけていたことは事実だが。  
「そもそも、どんな気持ちを込めればいいんだよ」  
「そ、それは……その……」  
「どうかしたか」  
何か気に障ることでも言つたか、俺？  
「第三案です！」  
強引に変えやがった！  
「第三案、↗瑠璃↙です！」  
「それでいいのか？」  
「まんまぢやないか。

「それでもういいです…さあ、行きましょう…」

「…どこにだよ」

行き先すら知られてないんだが。

「まずは映画館です！」

…？なぜ？

「なあ保護者」

「…」

「保護者」

「…」

「保護者 瑞璃」

「…」

「なぜに俺は映画鑑賞をしているんだ？」

しかも恋愛映画を。

「映画館の中では静かにしろって、テロップが流れていたじゃないですか」

それはその通りなんだが。

「…俺が連れてこられる意味はないよな…」

わざわざ一日使用権まで使って一緒に来る理由がわからない。

「友達いないのか？」

「…はい？」

「俺と来るくらいだからな。一人で映画に行くのは嫌だけど、一緒に行く相手もいないってところか」

「先輩じゃあるまいし、友達の百人や二百人いますよ」

スケールでかつ…！」

「ならどうしてだ」

「…いいじゃないですか。なんとなくです」

…？府には落ちんが、でもませつかく来たんだ。料金（一人分俺が支払った）ももつたいたいし見よう。

「先輩……」

「もう離さない……」

「……好きです」

「……俺もだよ」

そしてキスシーンへ。もちろん映画の話だよ。間違えちゃいかん。いいシーンだな、うん。

「せ、先輩……」

「ほ……瑠璃、どうかしたのか？」

手なんか握つて。

「じ、実は私……」

「わかった。トイレにでも行きたいんだなぎゃあ！？手が！手がああああ！？！」

「……先輩はムードつていうものを知らないんですか」

「何が！？何が間違つてたんだ！？」

「もういいです。次いきましょう

「え？ 映画まだ終わつてない……」

「行きますよ」

なんだかんだで結構真面目に見てたのに！

「あと三十分はある！一番いい場面！」

「この映画は色々ありながらも一人がくつついて終わりです  
ネタばれされた！てか君、何しに来たんだよ！？」

「うるさいです。先輩が口無しにするのが悪い。自業自得です」  
「何が！？」

映画館を出た俺たちは、近くにあるアクセサリーショップに來ていた。今まで一度も來たことがないことに加え、こいつた店は女性客が圧倒的に多いため居づらいことこの上ない。おまけに数少ない男性客も、カップルで来ている客のようで俺の気まずさを助長している。俺だけこの店で浮いているんじゃないか？

「……ということで店から出でていてもいいか？待つててやるから」「恥ずかしいんですか？」「恥ずかしいんですか？」

「恥ずかしいな。俺の心臓はノミ並みに小さいんだ。知らなかつたか？」

「堂々と開き直らないでください。このチキン野郎」

チキン野郎！？

「……チキンでもポークでもいいから、この店から出でさせてくれ。こういった店は、女性とかカップルとかが来る場所であつて、俺みたいな独り身かつ非モテ男がいるべき場所ではないんだ。だから店から出させてくれ、な？」

「非モテ男ときましたか、この鈍感ＫＹ屑男が」

鈍感ＫＹ屑男！？

「……でもつまり、ここにいてもおかしくない状況になればいいんですね？」

「そんなことができればいてやつても構わんが、実際不可能だろ？だから早く外に出させてくれ」

俺の羞恥心メーカーが今にも振りきれそなんだが。

「無理じやないですよ」

「……保護者、何なんだそのにやついた顔は？いかにも「私いっこ」と考え方いました！」みたいでひどく不吉。物凄く不吉

「いや無理。だから外に……うわつ！？」

「これで、先輩がここにいても不自然じやないでしょう？」

満開の笑みを顔に張りつかせた保護者は、自分の腕を俺の腕に絡ませてきた！

「お、お前何やってんだ！？」

「うふふー、腕組んでるんです

「そんなことはわかつとる！

「は、恥ずかしくないのか！？」

「先輩は恥ずかしいんですか？」

「恥ずい！やめれ！」

「ふふー、絶対にやめません」

「こ、こうこうことは恋人同士がやることであつてだな、 そう簡単

にやるものではないだろう！？」

「そこですよ！」

「はあ！？」

「こうしていれば恋人同士に見えて、先輩がここにここにあっておかしく

ないでしょ？」

「それはそうかもしけんが、別の意味で恥ずかしくて死ぬわ！」

「先輩は純情ですね」

「初戦俺はチキン野郎だからな！だから止めい！」

「いちいち言つたことを根に持たないでくださいこよ。絶対にやめませんよ。命令です」

「なんて傍若無人な！？」

「つるさくしてると余計に目立ちますよ」

「……お前は俺を窮地に追い込むのが巧すぎるだろ……」

「後輩に苛められる俺つて一体……。

## 第十五話 買物

「先輩、私たち他人から見たらカッフルに見えますよね？」

「……お前がそう見えるように仕向けてるんだろ？……。嫌ならとつとと止めて俺を外に出せばいい」

「嫌じゃないですよ！！」

うわつ驚いた。急に大声出すな。注目されるだろ。手遅れの感がないでもないけど。

「そうだよな、お前は俺への嫌がらせを日々の糧にしてるくらいだ。俺の羞恥を存分に見ることができるのは時間が嫌なわけがない」

「……先輩は私をそんな風に見てたんですか……」

「違うのか？」

今まであれだけ俺を恥ずかしがらせることに頼着してきたんだから、この予想は九割方当たっていると思つてたんだが。

「……鈍感」

「ん？」

「なんでもないです」

「先輩、この店のアクセサリーはどうもいとっこません？」

「俺、アクセサリーに興味ないし」

「いいとりますよね！」

強制かよ。

「まあいいんじゃないの？よくわからんけど」

それでも同意してしまう俺は弱い人間だ。イエスマン三井と呼ばいいじゃない。

「そ、それでですね！」

「どうした？」「

「一、ここにあるアクセサリーと一緒につけられる関係になりたい

と思いませんか！？」

「はあ？」

「すまん、話がよく見えん」

「だからですねー」このを、お揃いで、買いませんか！？」

「つまり。

「俺に首輪をつけて所有者にでもなるつもりか！？」

「……どうしてそういう結論になるのか、頭を切り開いて確認して

あげましょうか？」

「怖つ……」

「だつてここペット用のコーナーじゃん！」

「……気が付かなかつたですね」

「気づけよーお前何しにここに来てるんだ！？瞑想か！？  
でもせつかくだから買いましょう、大型犬用のやつ」

「結局買うのか！」

「使用方法が気になるが、怖くて聞けん！」

「……あのですね」

「うん？」

「あの指輪、お揃いで買いませんか？」

「恥ずかしいから止めてくれ」

「……そう、ですか……」

「うむ？なんか落ち込んでるな。罪悪感を感じる……。

「そんなに欲しかったのか、その指輪」

「指輪自体が欲しかったわけじゃなくてですね、その……」

「ん？」

「「」この店のが欲しかっただけです！」

「この店の商品が……女子間ではやつてるのか？」

「そんなところです！」

「そんな気合いを入れて言わなくともよからぬ。

「……仕方がない、そのミサンガぐらこなら買つてやるわ」

「……え？」

「なんだ? いらんのか?」

「せ、先輩は買つんですか?」

「一見の密と思われるのもあれだし、ミサンガなら安いしな。買つ」

「ならお揃いですね! ?」

「いやにお揃いにこだわるんだな。」

「まあ、買つならそつなる。で、どうする?」

「いただきます!」

嬉しそうな様子からして、保護者の機嫌は直つたようだ。よかつたよかつた。

「……先輩? どうして三つ買つたんですか?」

「あ? いや、転校祝いでタシミにもやろうつと思つてな」

神奈川土産（崎陽軒の肉まん）もむりつたことだし、お礼せんといかん。

「……」

「あれ? どうしたほ……瑠璃? 顔が怖いぞ?」

あと変なオーラがほとばしっているよつこも見えるのは気のせいか?

「せ……」

「せ?」

「先輩のバカ——ツ! ……」

「ひでぶ! ?」

男の急所を蹴り上げた保護者は、大声で叫んで駆けていった。……ミサンガを持っていつたところを見ると、氣に入ったよつなのになぜ……。理不尽な……。

俺は泣く泣く前かがみになりつつ帰路に就くのであった。

## 第十五話 買物（後書き）

とりあえずラブコメパートいつたん終了です。次回からはコメディー中心。ラブコメ部分が上手くいっているか作者にはわからないため、意見を送ってください。よろしくお願ひします。

## 第十六話 犬猿

土日が明けて月曜日の朝。

「ぐつもーにん、皆さん」

おはようございます、健三さん。相も変わらず重役出勤とは流石です。もう次の授業の先生が廊下で待っているのに無視するとは、常識人の俺からしたら考えられません。……あ、次の授業は現代文（担当は健三さんと犬猿の仲、藤田先生）だからわざとか？

「実は始業式の日に言っておかなくてはいけなかつたんですが、忘れてました。まあ別にいいですね、そんなこと」

教師として反省すべきことが山ほどあると思つんですが。……まあ健三さんだから仕方ない。

「皆さんも知つての通り、三週間後には文化祭、体育祭を続けて行うゝ北高祭くわいじがあります……が、説明は面倒なので省きます」

おい教師。

「知りたければ次の授業で藤田先生にでも聞いてください」  
流石健三さん。授業の開始を伸ばすだけでなく、質問まで丸投げするつもりですか。ただでさえ切れかけてる藤田先生が大変になりますよ。……あ、睨んでる睨んでる。

「ですから、適当に文化祭の出し物を考えておいてください。それと文化祭、体育祭実行委員も決めます。今日の最後の特別授業で決定しますので。ではまた後で」

それだけ言つて、健三さんは去つていつた。一限目の授業時間は大分経つており、藤田先生が歯を食いしばりながら何か言つたそうにしているが、堂々の無視。藤田先生もあんまり怒ると血圧上がりますよ。健三さんに常識を求めようとしても無駄なんですから。

「……では随分遅くなりましたが、授業を始めます」

藤田先生、怖いですよ。リラックスリラックス。

「先ほど、非常識な反面教師が質問を促すようなことを言つていま

したが、質問はありませんよね？」

「ありませんよね？」と言つ口調には妙にドスが利いている。チョーグまで手に持つて、授業を開始する気満々じゃないですか。質問を許可するつもりあるんですか？ないですよね。この状況じゃ誰も質問なんてできるわけが

「あのー、藤田先生。北高祭ってどんな感じになつてるんですか？」

「空氣読め！！

「…………」

「つおーい！藤田先生が般若の形相だよ！チョーク握りつぶしたよー！」

「…………それは健三さんに聞けあのバカ」

「ついにバカ呼ばわり！？」

「いや、健三さん……山本先生が眞面目に答えてくれると思います？」

「思わないけど！」

「なら別の奴に聞け。兎に角、私の授業を妨害するな」

「…………高説ごもつともだけど、言い方が怖いですよ。…………藤田先生も苦労人だな…………。色々と教師にあるまじき態度も見え隠れするけど。」

「はーいはいはい、楽しい古典の授業が始まりますよー」  
三限目、健三さんが妙なテンションで教室に入ってきた。いつも  
ながらこの人の習性がわからん。いや別に機嫌がいいのはいいこと  
なんだが。

「早速ですが、今日は小テストをします」

抜き打ちテストか。田代の勉強量が試されるな。……義人が真  
っ白に燃え尽きていく様子が窺えるが、無視。国語系の大半を苦手  
とする奴にとつて、抜き打ちテストで結果がどう転ぶかなど火を見  
るよりも明らかなのだろう。ドンマイ。同情はしないけど。

「では配るので、一番前の席の人、取りに来てください」  
動じつよ、健三さん。どれだけ面倒くさがりなんですか、あんた  
は。

「配り終わりましたか？では始めてください。私は寝るので、三十  
分後に起こしてください。頼みましたよ、夏目」

教師失格だと思うのは俺だけだろうか。むしろ人としても失格か  
もしれん。

……なんというか、カオスなテストだつた。つていうか、古典じ  
やないのかよ！アンケートだよこれ！

「今会つてみたい芸能人……」レイモンドですか、変わつてます  
ね。九十点」

誰だレイモンド書いたの！？ちくしょう！無茶苦茶会いたくなつ  
たじやねえか！ちなみに知らない人のために解説すると、レイモン  
ドとは昔のおはスターで山ちゃんと一緒に司会をしていた人物である。  
今何してるんだ！？それと健三さん、よく知ってるな！点数も高い

よー。

「今やりたい」と……「ねむがいへ、あ、朝起きて勝手にやつてください。十点」

だから誰だこの答案提出したのー?『點数厳しすぎ』ー。レイモンドと同じ違うんだ!採点基準、謎すぎるだろー。あと健三ちゃん、ねむス夕に詳しそぎー。

「好きな本……ハーフンペースですか。古典の授業のテストに漫画の名前を書くとは度胸です。八十点」

「点数高いー。いい度胸つて本当にいい意味で言つてこたのかよー。まあここまでの問題は、私が楽しむためだけのものなのでじつでもいいんですけどね」

「どうでもいいのかよー。俺たちの三十分間を返せー!」

「文化祭で出したいもの……やけにメイド喫茶が多いですね」

「どうなってるんだこのクラスは!? 義人も石井も「当然じゃね?みたいな顔してんじゃねえよ!」

「しかしありきたりで多いものはやりたくないので、却下します。もつと頭をひねつて珍しいものを考えてください。私が楽しめる」とが前提ですが」

「自由中もここに極まつたよー。メイド喫茶反対は納得だけどー。」

「もちろん私は口だけ出して手伝いませんので。頑張ってください。ファイト!」

「最低だー。もちろん言つなー!」

「残りの時間は自由に相談して構いません。私は寝ます」

「今、古典の授業ですよねー? 寝るなよ担当教員!」

## 第十七話 小テ（後書き）

ストックしてあった話がなぜか消えてしまった……。理由がわから  
ないだけに不安です。

「それで皆さん、面白い案を考えてきましたか？」

「自由すぎるぜ健三さん。やる気のあるのはいいことだが、授業にもそれくらいの熱意を示してくれ。

「この時間では、文化祭及び体育祭実行委員を決めるとともに、文化祭の出し物を決めてもらいます。司会は夏田、お願いします」健三さんはそう言って、椅子に腰かけた。この時間のために朝から力を蓄えていたのではないだろうな？ いつになくテンションが高い。ローテンションかつ無気力状態がデフォルトの健三さんにとつて、珍しい状態だと言えるだろう。

「えー、では実行委員をやりたいという殊勝な心がけの人はいるか？ いないな」

自己完結しちゃったよ！ まあこの「」時間にわざわざ面倒くさっことをやろうなんて人いるわけないか。

「皆さんやる気がありませんねえ。そんなんじゃ立派な大人になれませんよ？」

あんたが言うな！

「先生は手伝ってくれるんですか？」

「まさか」

即答！？

「面倒なことを進んでやる馬鹿がどこにいますか」

「先ほどのあなた」「自身の言葉を覚えてますか！？」

「ならどうしてそんなにハイテンションなんですか？」

「この学校では自主性を重んじるという建前のおかげで、文化祭、体育祭の期間は教師の仕事が極端に少ないんですよ！」

本音を堂々と言えるのは立派ですが、その態度はどうかと。

「まあ授業をするのは趣味なんで別にいいんですが、職員会議とかがこの時期は楽なんですよね。校長がいることが多いですし」

あいせつ回りに言つてゐるらしいからな。「ぜひ北高祭に来てください」とついていく。

「おまけに生徒が私のために楽しそうと必死になつてくれる。  
完璧じやないですか」

断じてあなたためではない。

「それで、実行委員になりたい人、いないか?ぐじになるぞ」

それで当たつたりするのは嫌だな。誰かいないか、誰か。

「よし、俺たちがやる」

「やりますー」

義人に石井?わざわざ立候補するとは……まあ義人は祭り好きだし、石井もイベント好きそうだし順当と言えば順当か。

「二人とも文化祭の実行委員か?」

「いや、俺と旦那が文化祭。イッキーは体育祭

「つて俺も含まれてるのかよ!?」

「あとは体育祭実行委員が一人だな」

「おい夏田!本人が否定してゐるのにやらせようとばかりにうことだ!

!?

「はいはい、あとでチロルチョ」「おもつてやるから」

「わーいありがとう……じゃねえよ!安いよ!俺の価値低すぎ!暴落しとる!」

「それで、本当に誰かやる人おらん?なんなら三井もつけるけど」

「おまけ扱い!文化祭兼体育祭実行委員つて重労働すぎるだろ!?

?

「なら私もやろうかな……」

「はい決定」

「タツミ!お前は俺を手伝わせようなんて思つてないよな!?

「よろしくね、なおくんに石井君

「終わった

!?!?

「何これ!?なんて罰ゲーム!勞働基準法違反じやね!?

「それじゃ、あと同会頼んだぞ、一人とも」

「夏目のバー！バー！」

「旦那、悲しさの余り幼児退行化しとるぞ  
したくもなるわい！」

## 第十九話 議論

「……何か意見はあるか……」

「三井ー！やる気出せよ！辛気臭いぞ！」

やかましい。全国不幸ランキンギングがあつたら上位入賞確定の俺に、  
追い打ちをかけるな。

「はいはーい！」

「菅原さん、どうぞ」

「執事喫茶で！」

「何か意見はあるか？」

「旦那、何も聞かなかつたことに対するには少々無理がある」

「執事喫茶というのは、男子と格好いい女子が執事となつて、各自

でサービスをする喫茶店です！」

誰も求めてないのに説明してるとあの人！

「いい！」

「賛成！」

「むしろ決定で！」

……求めてる人いたよ。賛同してるし……。

「この案はどうですか健三さん？」

義人、いちいち健三さんに確認取らんといかんのか？

「………………」

あれだけ煽つておいて健三さん寝てるよ……駄目だこの人！

「……朝ですか？」

もう夕方だよ！曲がりなりにも授業中なんだから寝ないでください

い！

「執事喫茶？……別にいいんじやないですか？どうでも」

起きたばかりでローテンションだ！……やる気ねえ！！

健三さんの目が覚めるまで、色々な意見を出し合おうじやないか

「……異議なし！」

」の状態の方がいつも通りではないかと思つるのは俺だけなのか？

「まあいい。他に意見のある奴いるか？」

「アーケード風にしたらどうだ？」

「小規模なゲームをいくつかやるのか。定番と言えば定番だな。

「具体的にはどんなゲームがある？」

「的当てなんかどうだ？」

「ふむ。しかし在り来たり過ぎはしないか？」

「いや、特別の的当てなんだ」

「ほう。

「球が野球の硬球」

「危険すぎるわ！！」

「さらに的は三井」

「鬼畜すぎるわ！！俺に何か恨みでもあんのか！？」

「腹部は五点。顔は十点。金的は九十点」

「鬼！悪魔！外道！却下だ却下！！！」

「俺の命がいくつあつても足りんわ！」

「そこまでして俺を追い詰めようとする理由は何だ！？」

「いや、清水が「三井は可愛い後輩を弄ぶだけでは飽き足らず、幼なじみの転入生まで手玉に取ろうとしている。ハーレム帝国を築こうとする悪の親玉だ」と聞いたから。違うのか？」

「根も葉もないデマだ！清水ちょっとこっちこいや！－！」

「手玉に取つてなんかねえし！むしろ弄ばれとるわ！－！」

「魔が差してやつた。反省するつもりはない

「清々しいほどに最低だなお前！－！」

「嫉妬しちゃいかんのか！？」

「キレるな！俺はそういう関係の女子などおいらん！今まで一度も－！」

「俺だつていたことねえよ！－！」

「不毛な言い争いになつてしまつた。

「旦那、次いつていいか？」

「……この状況で冷静なお前に脱帽したよ

## 第一十話 一致

「もうこいつそ休憩所にして出し物はなし、つてのは駄目か?」

「旦那、消極的だと人生損するぞ」

「この場合の消極的というのは実行委員を断りきれなかつたことを指すのかな?」

「さあ他に意見は?」

「都合の悪いことはスルーか。どこの政治家だ貴様」

「すべて秘書の計画したことです」

「石井?」

「記憶にございませんー」

「政府高官かお前は」

「そのネタはわからん人が多すぎるだろ。自重しぃ。

「あとタツミ。俺を巻き込んでおいて何か言つことはないのか」

「一緒に頑張ろうね、なおくん」

「こちやついてんじやねえよ司会ー!」

「タツミ、その流れで言つ言葉じやないだろ?。清水は涙をこぼしながらはやしたてようとするな。哀れだ」

「同情するな!」

「……で、意見出せ」

「言われたとおり、同情しないことにする。清水はさうに落ち込んでこる様子だが、無視。

「迷路はどうだ」

「迷路?」

「北高の外れにある森を舞台とした企画で、^勇者のキノコ^を手に入れて帰つてくるものだ」

「……^勇者のキノコ^って露の季節に生えてて、消えたかと思つたら最近また各地で発生してこるあのキノコか」

「ああ」

「なぜ勇者？」

「見事持つて帰つてこれたものには、勇者のキノコスープ、勇者のキノコ焼き込みご飯、勇者のキノコソテーをプレゼント」

「腹下すわ！過去にそんな人いた氣もするけど……」

「あの森つてー、昔は墓地だつたらしいよー」

「そんな不気味な情報今はいらんからー」

「お化け屋敷に変更しよつ」

「屋敷じゃねえだろ」

「お化け森林じゃ格好つかんな」

「お化け墓地だと偽装になつてしまつしな」

「この案も駄目だな」

「こんな理由で止めるのか。いいけど。

「つーん、しかしいい案はないものかな」

「考え込むものの、これ以上の案は出ないよつだ。となると……。

「今まで出てきた案でよそうなのは？」

「執事喫茶だな……」

「一番受けがよかつたのがこの案だ。悲しいことだ。」

「一応多数決をとるか……執事喫茶でいいと思つて満場一致！？」

「北朝鮮の軍隊かと思つほどビシッと手をのばすクラスの面々。タシミも手を上げていてことに切なさを感じながら、決定を告げる。

「……うちのクラスの出し物は、執事喫茶に決めたいと思います……」

「……」

歓声を上げるクラスメイトを見ながら、今日何度目とも知れないため息をつく俺なのだつた。

「旦那、ため息つくと幸福が逃げるぞ」

「今までに幸福が溜まつたことなんてねえよ」

## 第一十一話 自業

「では次の議題、体育祭の選手決めを始めます」

「司会進行は僕とー、石川さんとー、引き続き三井がやるよー」

「この理不尽を許すこのクラスはどうかしてるんじゃなかろうか。……どうかしてる奴らの集まりか、ここは」

「山本先生。種目の説明をお願いします」

「面倒ですね、プリントがそこにあるから適当に進めてください」

「……わかりました」

タツミが健二さんの洗礼を受けている。そして人は大人になっていくのだよ。

「えーっと……種目は男子900メートルリレーに女子600メートルリレー、スウェーデンリレーと障害物競走、トライアスロン、二人三脚競争、ムカデ競走、全員参加の大縄跳びと応援合戦ですね」

「それでは前に出てきてー、やりたい種目に名前を書いていってねー」

ガヤガヤと相談しながら種目を決めていくクラスメイト達。しかし、選んだ種目にどうしても納得できない人物が一人いたので呼びとめる。

「……浜ちゃん？君がどうしてトライアスロンに参加しないのかな？」

泳ぐのがこの学校で一番速い浜ちゃんなら、トライアスロンはかなり有利だろう。走るのも決して遅い部類ではないし。

「疲れるから当然嫌に決まっているだろう」

「嫌なことをやるのは君だけじゃないんだ。つべこべ言わずにトライアスロンに参加しろや、な？」

「みつちゃん、目が笑ってないぞ」

「笑うつもりもないからな、浜ちゃんトライアスロン確定つと」

「理不尽なー」

「その理不尽さに最初に泣かされたのは俺だということを理解して  
おけ」

俺だけ不幸だなんて許せん。クラスメイト全員で不幸を分かち合  
うべきだ。

「……では、各自この種目で登録、ということでしょうか？」

「いいでーす！」

「この小学生だお前ら。……ん？ 待てよ？」

「俺書いてない気がするんだが」

「問題ない。旦那はもう決まってる」

「……何度も言うが、俺書いてない気がするんだが」

「三井は一人三脚だよー」

「勝手に決めるなよ！？」

「相手が見つからなかつたから、余つてた旦那は自動的に移動した」

「相談しろよ！ 相手はどこのどいつだ！？」

「……よろしくな、三井……」

清水かよ！

「当然の如く女子と組もうとして」とく失敗、男子運動部集団  
はリレーに流れて相方が見つからず、清水孤立。しかし人数を数え  
た結果足りない人物がいることがわかり、旦那と判明。旦那ならそ  
こそこ足も速いから、清水のパワーも受けきれるだろうと判断

「清水君のを三井君が受ける！？」

やけに興奮した女子の声が響く。意味を取り違えるなよ腐女子！

「なんやかんやで現在に至る」

「貧乏くじだな俺！」

「みつちゃん、理不尽でもやれよ」

「ここでさつき言つた言葉が致命的になるとはな！

……口は災いのもとつて本当だったのか……。

## 第一十一話 旗

文化祭の出し物、体育祭の出場種目ともに決め終わり、さて部活だと準備をしていると健三さんに呼び止められた。なんですか、健三さん。

「ああ、実行委員は今日会議がありますから、残つてください」とうの遅いよ健三さん！

「なぜ今になつて？間に合つたからいいようなものの、会議つて結構大事じゃないんですか？」

「大事ですねえ」

「ならどうして」

「忘れてたからです」

「……義人、会議行くぞ」

健三さんだから仕方ない。あそこまできつぱり言われるとなお手上げだ。どうしようもなかろう。

「……といふことと、文化祭では模擬店を出すクラスが多すぎるため、くじ引きで出せるクラスを制限させていただきます」

まあ当然の判断だな。ほとんどのクラスが金儲けに突っ走つてゐるからなあ……。メイド喫茶が多いのも田を引くが。この学校はおかしいと思う。常識的に考えて。

「フフフ、いふこつ時のための旦那だ」

「何の話だ？」

「旦那は執事喫茶に反対だらう？」

「そりやそうだ。客商売なんて柄じゃない。まして執事つてことはスーツ着るんだろ？服が汚れるのも遠慮しておきたい」

「旦那ならそう考へていると思つたよ。さあ、くじ引きに行くんだ！」

「お前、やりたくない奴が引いてどうするよ、負のエネルギーで出店不許可を呼び寄せるぞ」

「旦那なら大丈夫。その有り余る不幸オーラで、自分に不都合な展開にもつていくんだ！」

なんて嫌な信頼だ。

「そう都合のいい展開になるわけないだろ。外れくじでも引いて来てやるから、涙を流す準備でもしておけ」

そう、いくらなんでもそんなベタな展開になるはずが

「旦那、流石だ。旦那の不幸属性は世界を平和に導くこと請け合いだ」

……話しかけるな。落ち込んでいるのがわからないのか。  
「あそこまでー、フラグを立ててしまつたら狙つてるとしか思えないよねー」

「フラグ？」

「執事喫茶やりたくないとかー、出店不許可を呼び寄せるとかー。もうこれは外れくじを引くのなんて不可能でしょー」

「結果見事に当たりくじを引いてきたからな。当たりなのに血の気が引いてる旦那は見て面白かったぞ」

「待て。なぜ当然のように石井は会議時の俺たちの会話を知つてゐるんだ」

石井は体育祭実行委員の会議に行つていたはず。

「んー、盗聴ー？」

「犯罪！」

「別にいいじゃねえかー。減るもんじゃなしにー」

「頼むから将来、夕方のニュースとかで現れないでくれよ

「大丈夫ー。キャスターになるつもりはないからー」

「そっちじゃねえよ！」

「まあまあ旦那、落ち着け。それで結果が変わるわけでもない」

「……裏方に回ればいいか」

仕込みしたり買い出し行つたり料理作つたり、パシリでも喜んでやろうじゃないか。

「それは色々と許されないとと思うよー」

「なぜ」

「執事喫茶だからー」

……意味がわからん。

## 第一二三話 悲

「おーーーもつとゆっくり歩けよーーー」

「そんなんじや勝てねーだろーーー！」

「バカ、転んだら負け確定なんだから慎重になれーーー！」

「練習で慎重になつてどうするよーーー！」

「それもそつかーーー！」

「「「はははははははは」」

……楽しそうだな、ムカデ競走の練習。それに比べて……。

「……清水、テンション上げろよーーー！」

「……三井こじそ……」

男「一人でやる一人三脚（しかもそこまで仲のいいわけでもない相手）の練習のなんと惨めなことか。いや、女子とやりたいとかそういう話じやないよ？そんなことになつたら逃亡すること間違いないだろーし。俺が言いたいのは、今の状況が途轍もなく虚しいということ、ただそれだけだ。

「……これだけ練習すれば十分だろーーー部活行つていいか

「……奇遇だな……俺もラグビー部の練習が恋しくなつてきたところだ……いつもはきつくて苦しい、だけなのにどうしてだらうな……」

「……俺も小倉さんのドジなメニューだつて、今の状況から抜け出せるなら受けて立とうではないか

二人の利害が一致したようだ。それならそもそも練習なんかするなと思うかもしれないが、クラスの雰囲気にのまれてやりざるを得なかつたのだよ。世の中つて難しい。

さて部活に参上した俺なのだが、皆も体育祭の練習をやつしている

のか、文化祭の出し物の準備に追われているのか集まりが悪かつた。うぬ、部員がない。小倉さんも生徒指導部長の肩書のおかげで仕事があるらしく来ていないし、こんなので新人戦は大丈夫なのだろうか。

「先輩、いい加減私を無視するのやめません?」  
「なぜいるんだ貴様は」  
「あと三日は休みですよ、本来」  
「ふん、休みの日に遊びに行つたりしないのか、さみしい奴め」  
「先輩に言われたくないです」  
「今日は監督する先生がいないから泳ぐこともできん。だから帰れ」  
「先輩のクラスは文化祭何やるんですか?」  
「話聞いてる?」  
「でもまあ教えてくれなくともいいです。当曰行きますから」  
「自己完結するとは」  
「でも先輩、ミサンガつけてるんですね」  
「強引に話を変えるな」  
「私もつけてるんですよ。ほらほら」  
「思いだした。貴様つい先日あのような仕打ちをしておいてよくもまあ、おめおめと俺の前に姿を現したものだな」  
「今の今まで忘れてたんですか?鳥頭ですか先輩は」  
「あまりに不幸が続きすぎて、肉体的な痛みは大して傷にならなくなっているようだ」  
「うわー、なんて情けない自己分析」  
「やかましい」  
「つまりは精神的な痛みが傷になつてるってわけでしょう?可哀想な人生ですね」  
「人生单位で否定とされるとは思わんかった。……しかし俺の不幸さがここ数日で増している気がするんだ。一体何の陰謀だ?」  
「なおくん!」  
「な、何だ!?」

「……そこまで驚かなくてもいいじゃない」  
「驚かせるな、心臓が止まるかと思つたぞ」

「……石川先輩、こんこちは」

……なぜ険悪になるのだ。最近の保護者の思考がよくわからん。  
別にタシミは険悪でもないから、喧嘩ではなさそうだし。

「……ミサンガ、先輩からのプレゼントですか」

「わうだけど、なんで知つてるの？」

「……」（無言で腕を上げる）

「古木さんもなおくんにもらつたの？」

「……私はお礼ではないんですけどね」

だからなぜ険悪になる。

「……石川先輩、監視役の先生がいなくて今日は泳げないみたいですから、帰つたらどうですか？」

今日、初めてここでのプールで泳ぐつもりだったのだろう。水着入れらしい荷物を持っているタツミだが、規則のため教師がいないとプールでは泳げない。こんな規則無駄だとは思うが、校長がわかりもしないのに、部活に関して口出ししてくるから仕方がない。無能どころか害になるのだから、早く引退して天下りでもしておけばいいのに。規制が甘い今のうちに。

「そんなことないみたいだよ。ほら」

タツミが振り向いた先には、健三さんの姿があった。

「ぐつどあふたぬーんえぶりわん」

エブリワンで三人しかいませんけどね。

「毎度おなじみ小倉さんの代行で見に来てあげましたよ」

本当に見るだけですけどね。まあ水泳部員なら、両足攣つると上半身だけで泳いで帰つてこれるだろ？が。実際みんな足攣つっても助けないで、本人だけで解決してるし。

「メニューはないみたいですから適当に泳いでください。さあ、れつついみんぐ！」

それだけ言って、健三さんは持ち込んである椅子に腰かけて寝たのだった。いる意味ないですね、本当に。あとあなたは一日何時間寝るつもりですか。小学生じゃないんだから少しは我慢をしてください。

「じゃあ私、着替えてくるね。なおくん、覗かないでよ？」

「アホか」

「なぜそんなことをせんといかん。

「先輩、覗いたら私がこの手で殺します」

「覗くわけないだろ？がー？」

そりや覗きは女の敵かもしけんが、してもないのにビリして保護者の殺気が駄々漏れなんだよ！？怖いよ！

「……俺も着替えてくる。保護者、覗くなよ？」

「の、覗きなんかしてませんよ！？」

なぜそこで動搖する。

そして着替え終わり、プールサイドで準備運動。

「……先輩、マッサージ手伝いましょうか？」

「そうだな、よろしく頼む」

恥ずかしいが、断つた場句に怪我したり、足をつったりするのも馬鹿馬鹿しい。ここは素直に手伝つてもらおう。幸いにも、見られている相手はいないし（健三さん爆睡中）。

「……先輩つて、意外といいからだしてますよね……肩幅も広いし

……」

「水泳部はたいていそんなものだな」

むしろ俺は筋肉がない方だと思つ。浜ちゃんとか人とは思えない体のバランスしてゐるし。逆三角形の見本だよな、あれ。

「……でも、確実に中学の頃よりもたくましくなつてます……はつはつてなんだ。人の背中押しながら何をやつてるんだお前。

## 第一十五話 大小

だらだらとストレッチを続いていると、背後から声をかけられた。

「おまたせ！ なおくん！」

いや別に待つてないから。水泳は個人種目だろ。リレー以外。

「……別に待つてませんよ、石川先輩」

また険悪ムードに……。どうした保護者。

「マッサージしてもらつてるの？」

ストレッチだ。マッサージとはまた違う。

「古木さん、私も次にしてもらつていい？」

「仕方がないですね……。…………！」

振りむいた保護者が固まつたようだ。どうした？ ショックな出来事でもあつたか？

「……まさか……」んなに……差が……卑怯な……」

言葉を失う保護者。余程のことがあつたのだろう。

「どうした？ 後ろで何が起こってるんだってぎや あああ

目が！ 目がああああ！！！」

「……！ 先輩は見ないでください！ みんなのおかしいです！ 石川先

輩！ 何か詰めてるでしょ！」

声が悲痛だ。しかし俺の視界と思考力、判断力が保護者の眼つぶしによつて奪われている今、現状を把握することは不可能。一体俺が何をした。

「お、落ち着いて古木さん！」

「落ち着いてなんかいられないです！ 人類みな平等だなんて嘘です

！ 差が！ こここの肉にどうしてこんなに差ができるんですか！？」

「別に胸が大きくてもいいことなんてないよ？ 肩こるし、運動もやりづらいし」

「自慢ですか！ ？ あえて口に出さなかつた」胸くといつ単語を出すあたり余裕ですね！ ？ 大きい人にはわかりませんよね！ 胸で好きな

人にアピールできない悔しさが……

「落ち着きなつてば」

「IJの前だつて腕組んでたのに！胸も押し付けてたのに！腕を組むとこ‘う点以外に反応を示されなかつたんですから！差別です！こんなのが！神は無常です！！いや、神様なんていない！頼れるのは所詮、自分自身だけなんです！」

「だから落ち着きなつて！」

「人がどたどたと暴れながら言い争つてゐるようだ。残念ながら俺のHPが点滅してるので内容はわからない。てか攻撃された意味もわからない。わけもわからず死の危機に瀕してゐる俺つて……。理不尽。あまりにも理不尽だ。

「どうせ先輩だつて大きい方が好きなんです！小さい胸なんて胸じゃないとかいう人なんです……！」

「男の人つてそつなの？やつぱり大きい方がいいのかな？そうだといいんだけど……」

「そこは否定してくださいよ！うわああん……」

「IJ、ごめん！古木さんだつて可愛いよ」

「強者の余裕ですか！？小さくて可愛いガキんちよのようだとそう言いたいんですか！？」

「どうすればいいの！？」

……目が痛いよう。

## 第一十六話 過保護

……ようやく視界と思考力が回復してきた。未だに田には変な光が見えるものの、物の輪郭くらいは判別できる程度なので、まあいいだろ？……よくないよな、絶対。

「保護者、ちょっとこいや」

「……」

ん？反応がないな。いつもなら軽口の一いやーひ、返してくれるはずなのに。一体どに消えたんだ？

「なおくん」

「……タツミか？」

「なんで疑問形？」

「こちらにも色々と都合があるんだ」

保護者が理不尽に作った都合だが。

「それで……どうかな？」

「すごいな」

「もう！なおくん恥ずかしいよー？」

「うわ痛つ！叩くなタツミーどうして恥ずかしいんだよー？」

「だつてすごいって……ヒッチ

「なぜ！？」

保護者（らしき人影）が何をとち狂ったのか重そうな棒を振り回しているから、率直な感想を述べただけなのだが。

「大きい人なんてみんな絶滅すればいいんです」

「！」

よく見たらあれ、筋トレ用のシャフト（バーべルの持つところ）じゃね？しかも片手で持つてどんな筋肉の付け方してんだ。保護者には基本逆らわないようにしよう。目をつぶされかけたことといい、危険すぎる。そんなに背の高い人が憎いのか。よかつた、平均的身長で。あれで殴られたら生死にかかる。

「でもなおくん……体格いいね」

「保護者にも言われたぞ、それ。実感はない。上には上がいるものだ」

「だからってむやみに自分を卑下するのもよくないと黙つて」

「卑下はしないだろ」

「だったら自分に自信を持ちなよ」

「……もてる場所がないから苦労してる」

頭のよさ、運動神経、その他どれをとつたとしても、水泳部内ですら一番にはなれないだろう。上には上がいる。この言葉は深い。「人と比べても無駄でしょ？世界で一番にならない限り上がいるってことなんだから。人と比べて悲観しても、状況は好転しないよ。もつとポジティブにならなきゃ」

「……俺もそうは思うが……性格だから仕方ないな」

だからこそ俺は義人、石井といった前向きな思考をもつやつを尊敬する。奴らのよつな性格になれたらどんなにいいかとも思つが、俺はそうはなれない。義人の前向きさに引っ張つてもらつてようやく人並みになれる、情けない人間　　それが俺だ。

「だからそういうして後ろ向きに考えるかなあ、なおくんはー」

「別によからう」

「よくない！」

そういうえば昔も「うやつてタツ！」とは叱られていたなあ……。

「こんなんじや駄目だよ？」

「はいはい」

「もう……生返事だなあ。よし決めたー」

「何をだ。」

「私が常にそばにいて、なおくんの性格を矯正してあげるー」

「はあー？」

「おま……何言つてるんだー？」

「だから、私がなおくんと一緒にいて、プラス思考になるよう指示してあげるってこと」

「そんなの駄目ですーーー！」

保護者、いつの間にいたんだ？息をき切つて……いるのはやつをの振り回してたせいか。

「四六時中一緒にいるつもりですか！？」

「学校ではどうせ一緒にだし」

「意味が違つてきます！」

「大丈夫だつて。なおくんに変な気は起こしてないから……今のと

」「うう

「それが不気味なんです！」

「お前ら何の話に変わつてるんだ？」

「先輩は黙つていてください」

……俺、威厳すらもないのか……。

「だからネガティブになつちゃ駄目だつて！」

「どうしろと！？」

## 第一十七話 係

「大道具係代表、清水！」

「看板から内装の飾りまで、作るのは俺たち大道具係に任せておけ。無理なものもあるだろうが、全力を尽くすことを約束する」

「料理係代表、杉田！」

「模擬店だからと黙つて手を抜くのは簡単だ。しかし、妥協しても面白くない。旨いものを安く提供する、この信念を持つて行動しよう」

「宣伝係代表、石井！」

「この学校にうちの喫茶店を知らないのは当たり前でー、北高祭に来校したすべての人に知つてもらえることを目標とするよー」

「提供兼サービス係代表、三井！」

「異議あり！」

「各部門の代表者の発表は以上です。それぞれ係が何になつたかはプリントに印刷してきたので確認してください」

「俺の意志は！？」

「拒否権は存在しません」

「横暴な！？」

「それはないだろー！？最近夏田を筆頭に、俺の扱いが酷くなつてる。確實に。

「せめて意見くらいは言わせてくれよー！」

「なぜ？」

「そんな理解できないみたいな反応されても。

「なおくん、いやなの？」

「ほらー！俺の意見を聞きたい人がいたじゃないか！議長、再度発言を求める！」

タツミは少なくとも俺の味方か。感謝の意志をこめて、笑顔でタツミを見ていたら顔を赤くして顔を伏せられた。……そんなにおか

しいか、俺が笑うのが。

「……ちつ、どうぞ」

「今あからさまに舌打ちしたよ」の議長！

「それが発言の内容ですか」

「流れからして違つてわかるだろ！？何この「早く終わらせよみたいな空氣！？」

「早く発言を終わらせよカス」

「もつと酷かつたよ！」

恐ろしいクラスだ。

「サービス係兼提供つて、要はウエイターだろ？」

「そうだ」

「俺の希望部門は、大道具か料理のどちらかにしたはずだが」「この前のアンケートで、希望を取つたのは何だつたんだ。代表以前の問題だろ。

「アンケートの結果だ」

「どういうことだよ」

「ウエイター 執事をやらせたい人間も同時にアンケートを取つたから」

「それは確かにそうだつたけど。

「でも本人の意志優先だろ！？」

「お客様のためだ、譲歩しろ」

「アンケート取つたのは客からじゃないだろ！？」

「来店するのは同年代の女子がほとんどだと思われる。その女子からあれだけ票をもらつてるんだから選出は妥当だつていうか大量に票をもらつて調子に乗つてんじゃねえのか水虫にでもなればいいのに」

「後半から怨嗟の言葉になつてますけど！？」

しかし俺に票をよこすとは。このクラスはどれほど俺のことが嫌いなんだ。

「全身吹き出物だらけになればいいのに」

「悪化した！？」

## 第一十八話 一計

「どうしても執事をやるのは嫌なのか、旦那」

「当たり前だ」

「どうしても？」

「どうしてもだ」

「なら強攻策を使うしかないか」

「…………？」

「暴力にでも訴えるつもりか？」

「旦那は約束は必ず守るよな？」

「…………！」

「まさか！」

「察しがいいな。さすが旦那だ」

「そんなので褒められても全く嬉しくない。

「料理勝負での旦那一日使用権。これを文化祭當日に使わせてもら

う

「…………卑怯者」

「作戦勝ちだと言つてくれ

「石井が妙に自信を持つていたのもこれだな」

「そうだよー。三井なら約束は破らないよねー」

「お前らとの約束なら破つてもいい気になつてきた」

「ということで旦那の執事代表就任決定、みんな拍手ー」

パチパチパチと済し崩し的に決定してしまった。なんてこいつたい。

「…………はあ

「…………はあ

「旦那、また溜息か」

「若いのにだらしないよー」

「なおくん、ネガティブなのはダメだよ？」

責められれば責められるだけ、余計にネガティブになるのがわからんかな。前向きな人が羨ましい。

「しかしなぜピンポイントに俺が狙われたんだ」

「執事役なんてもつとふさわしい人がいるだろ？」

「それは……ねえ？」

「旦那はそこそこ顔が整ってるし」

「しつかりしてそうに見えるしねー。実際性格も重箱の隅をつつく感じだけどー」

「やかましい。顔がそこそこいいとは中の上だろ。その評価は聞きたきたわ。」

「だから、なおくんは自己評価が低すぎー。」

「俺の自己評価は妥当な線だと思つ」

「義人がにやにや笑つてするのが気になるが、まあいいだろ。義人と石井が変なのはいつものことだ。気にしない気にしない。」

「むー……」

タツミの睨むような目線が気になる。こつちは慣れないためどうしても気になる。

「言いたいことがあるならはつきり言え」

「別にー……」

「うん、気まずい。」

「ところでタツミは何の係になつたんだ？」

「話題転換をして丞先を鎮めよ。ナイス判断。」

「執事係だけど」

「そうかそうか……執事係！？」

「何驚いてるの？」

「俺の認識では執事は男がやるものだと、相場は決まつてるんだが」

「菅原さんの説明聞いてなかつたの？女子もやるつて言つてたじやん」

「言つてたか？」

「言つてた」

「言つてたよー」

その時点ですべて突つ込む奴はいなかつたのか。どうなのその辺。

「大丈夫！家事全般は好きだから！」

そうだよな。昔みたいなトラウマを作ることはもうないよな！

しかし三井の希望は、数日の間に脆くも崩れ去ることとなるのだった……

「義人！妙なモノローグ入れるんじゃねえ！！」

## 第一十九話 原石

「三井は執事長なんだから、そのぼたぼたの頭と身だしなみを何とかしろよ」

いつの間にか執事代表から執事長にランク上げされたらしい。嬉しくねえ。

「そんなこと言つたつてな……くせモだし、水泳部だからセツトとかしたところですぐに無駄になるから」

「でも他のクラスの水泳部員は普通だよな」

「田村とか片山とか」

「松田もそうだよな」

「俺、髪型は自然に任せたままにしておくことが普通だと思つんだ」

「その認識は明らかにおかしいだろ」

「そんなことないよな、田那」

「そうだよー。みんなの方がおかしいよー」

「髪型なんかわざわざセツトする必要なんかないよな」

「さすが心の友だ。これでこの話題は終わりにしてしまおつ。」

「それは間違つてるよー。」

「タツミー？」

「そうー！石川さんよく言つたー！」

「三井君も杉田君も石井君も、自分の容姿に無頓着すぎー。」

「三人とももどがいいんだから、もっと外見に気を配りうつよー。」

わらわらと女子が湧いてきた。いきなりどうしたんですかあなた方は。

「この中にーこの中に美容師志望の方はおられませんかー？？」

「なんだこの小芝居。」

「あの……私でよしければ……」

「続いた！」

「おお、あなたは美容師志望で外国に修行に行きたいと思っている

佐伯さんではあーりませんか！」

説明ありがとうございます。そして「あーりませんか」ってなんだ。古いわ。

「私の野望は埋もれた原石を発掘し、輝かせることです」

じり、と俺たちの方に近づいてくる佐伯さん。目が血走っている  
ように見えるのは氣のせいだらうか。

「だからこそ、入学時からこの漫才師三人が埋もれた原石にしか見  
えず、気になっていたのです」

さらに距離を詰める佐伯さん。逃げようにもクラスのみんなが退  
路を断つていて、逃げることができない。素晴らしい団結力。

このチームワークをもつと別のことに向けてほしいと切実に思う。

「今回、この三人を変える機会を設けて頂き、皆さんには本当に感  
謝しています」

「ストップ！変える機会なんてどこにもない！俺たちは別の仕事が  
ある気がするから帰らせててくれ！ほらー、義人も石井もなんとか言つ  
てくれ！」

「……旦那、人に嫌なことをしたら、それは返つてくるって言葉な  
かつたつけか」

「因果応報？」

「まさにそれだ」

「俺悪いことなんかしてねえ！」

「まあまあ一蓮托生だよー」

「お前らの都合に付き合わせるなー」

「総員！かかれーっ！…」

「…わあああああ」

「ぎゃああああああー！」

## 第三十話 脳内変換

「劇的改造！」

「ビフォーア ター！」

「むー！むー！」

現在の状況。……身だしなみがなつていないと難癖をつけられ、ちょっと危ない人（佐伯さん）が暴走し、色々あつて椅子に括りつけられている水泳部員三人。何このアウエーな空氣。甲子園球場か。あ、ようやく口にを塞いでいたタオルを取ってくれた。こんな些細なことで幸せを感じるつて一体どうなんだろう。俺の将来が危ぶまれる。

「旦那、諦めは肝心だぞ」

「……わかっているが、少しも抵抗しないお前ら一人は尊敬に値する」

悟りでも開いているのか。

「むしろこの状況を楽しむくらいでないとー」

「か！お前らド なのか！」

「極端に考えるな。俺はどっちでもいける」

「みんな聞いた！？やっぱり杉田君は両刀使いよー＝井君もその手に掛かってるに違いないわ！」

「何その結論！？言葉をそつも悪意で捻じ曲げる才能はどうから来るんだ！？」

そもそもあなた誰ですか！？菅原さんら、俺が腐女子と認識していたグループとは違う人のようだ。この学校、変人の層厚いよ。不必要なほどに。そして無意味な層が。

「…………おくん……掘られて……」

「タツミー！なぜそこで真っ青になる！？おかしい！そのセリフはどう考えてもおかしい！」

「さて本題に入ります」

「待て！話は終わってない！誤解を解く機会を『』えてくれー！」

「……わかるよ、三井君」

「絶対理解してないだろー！間違つたままそれを事実として処理してるからー！」

タツミに至つては顔面蒼白のまま口をパクパクとさせて、小刻みに震えている。言葉を発することすらできないようだ。……どんな妄想を膨らませているのか、知りたいけど知りたくない。怖くて。

「というかあなたは誰だ！？」

「隣のクラスの者ですけど」

「なぜここにいるー？あくまで文化祭のクラス企画が本旨じゃないのかー？」

「括りつけられたまま、突っ込む旦那はシユールだな」

「冷静な目で今の俺を見るな！しまいにや泣くぞ！」

「まあまあ落ち着いて」

「だからあんたは出てけ

しぶしぶ教室を出て行く隣のクラスの腐女子。なぜ今俺は晒し物になつているのだろうか。本気で俺の存在価値が知りたい。

「佐伯さん、抱負をどうぞ」

なんかいろいろやつてるうちに、

「この三つの原石を、磨きに磨いて♪アニメ版ポケモン、ポリゴンの回々並みに光輝かせてみせますー！」

人体に有害なレベル！？

「そこでテーマを募集します！テーマに沿つて、この三人をカットして着飾らせてメイクしてめつたためにしてやりましょうー！」

「ノープランだったのか！？そしてめつためたつて何！？」

人を改造すると言つておいて、どうしてそうも無計画なんですか！？

「三十分相談して、テーマを決めてください」

「待て！俺たち括りつけられたままでか！？」

「仕様です」

「なんの仕様だよー...?」

## 第三十一話 カット

「では最初のお便りです！」

「それなんてラジオ番組！？」

「司会進行はこの私、D-J 夏目がお送りします！」

「お前絶対俺を憂さ晴らしの標的にしてるだろ！？」

「うん」

「清々しい！堂々と答えるその姿は清々しいが、清々しければ許される問題じゃないからな！？」

「このお便りの要望は「テーマは♪わかめ♪でよろしく！」だそうです」

「無視しやがった！都合の悪いことを無視するのは、健三さんの異様な空気がこのクラスに蔓延しているからか！？わかめって！海藻かよ！俺の髪をなんだと思ってるんだ！執事と関係ないだろ！かすりもしてねえ！」

「懺悔は終わりでよろしいですか

「俺の会心の突っ込みが懺悔扱い！？」

「さあ、いくがいいマイスター佐伯

「素人なのにマイスター！？」

ちなみにマイスターとは名人という意味だ。豆知識。

「ギギギ……カミ……キル……」

「ええ！？急に何！？今までそんな喋り方してなかつただろ佐伯さん！？何が起きた！？」

「いや、キャラが薄いと思つて」

「もう濃い人はいらないよ！変人のバーゲンセールだからこの学校は！」

「三井のことか

「俺じやねえよ！」

「ではカットを始めます

「もう始めるのか！？ちょっと待て！まだ心の準備が……」

「基となるのは石井でいい！」

「ちょっと待って。一言だけ言わせてもらひからー」

何を言つつもりだ。

「アッ！」

わかる人だけ分かればよし。

「完成しました」

「……まさかテーマの「わかめくが磯野家のワカメだとは思いもし  
なかつたよ」

そのため、今の石井はオカツパ状態。髪をほとんど切つていないのでよかつた。気持ち悪いくらい、髪がさらさらなのが気になつてしまつがない。恐ろしい薬物とか使ってないよな？あともう一度言うが、絶対執事と関係ない。

「次のお便りだY.O.！」

「……ノリノリだな夏田。今のお前を録画して冷静なときに見せてやりたい」

「テーマは「テライケメンwww」を「希望」…さあ、ミニスター佐伯、ファイト！」

「佐伯さん出世した！？」

ミニスターは首相の意。テストに出るから覚えとくと書。

「てかこの書き込みしたの誰だ！？ちゃんねるーが混じつてるぞ！」

怒らないから2ちゃんねるーは拳手しなさい

「「「はい」」

「多つ！？」

予想を上回る駄目っぴだ。かく言つ俺も楽天の掲示板をのぞいているから、人のことは言えないが。

「では今回は杉田を素材とする！」

「カッティングスタート！」

「……正直見くびつてた。ごめんなさい」

「杉田……なぜいつも前髪を垂らしたままにしてたんだ……？」

「もつたいねえ……てか殺意すら覚えてきた……」

義人は見事、一枚目へと変貌を遂げていた。男子は妬み、女子は呆気に取られて言葉が出てこないようだ。このまま自然解散にならんかな。

「……腹立つてきたから三井のテーマを面白いのにしそう……」

事態悪化。義人のアホ。

「冤罪じゃね」

「冤罪なんて警察ではよくあることだろ」

「旦那、問題発言するな」

## 第三十一話 カット（後書き）

感想が欲しいです。できれば下さい。

「正直反省してる。」めんなさい

「……しぐしぐしぐ」

「だから三井、もう泣くなよ」

「……ぐすつ」

「今のお前が泣いてると、非常に萌えて襲いかかりたくな」

「……！」

今、俺は佐伯さんの魔の手に掛かつて恐ろしい変貌を遂げている。  
「しかし佐伯さん、素晴らしい仕事だ」

「お粗末さまです」

「まさか三井を萌くのテーマで、ここまで変化させるとはな……  
てつきり華奢な少年風に見えるのかと思つたが、性別」と見える

とは……素晴らしい職人技よ」

「これは知らない人が見たら、十人中八人は男子だと見破れんだろう。マイクとかつらだけでここまで見えるのは凄いと言わざるを得ない」

マイクとかつらは美容師の仕事じゃないと思うんだが、どうなの  
その辺り。佐伯さんの目指すものがわからない。

「しかもその半分は可愛いと云うレベルだ」

「男子用の制服のままだが……しかしそれが又そそるといつか」

鏡を見せられたときは、衝撃の余り逃げ出したくなつた。今だに  
縛り付けられているから動くことすら儘まきならんが。……舌噛み切つ  
て死のうか……。でもその前に。

「……一言いいか

「なあちゃん、どうかしたのか」

「なあちゃん！？」

「背筋が凍りついたわ！ 気持ち悪い呼び方するな！」

「強気な少女……いい」

「少女！？この俺が少女呼ぱわりだと…？」

人生単位でトップクラスの屈辱だ。

「執事と関係ないだろうが！メイドにでもするつもりか！？」

「それいいな」

「検討してんじゃねえよ！」

健三さんの指摘で中止になつたのをもう忘れたのか。このクラスは自分に都合の悪いことをすぐ忘れるから困る。しかも自然と。」

「では三人に使命を与える」

「使命？」

「とりあえずこの化粧とかつらをどうにかしてからでいいか。

「もちろんそのままの状態でだ」

「苛めですかそうですか。

「このクラスの執事喫茶を、他のクラスに存分に宣伝してきたまえ」「はあ！？」

「もちろん説明等は宣伝係代表、石井に一任する」

「待て！この状態で行つたら間違いなく変人扱いされるだろうが！」

「「「はつ、何を今さら」「」」

「クラス全員で失笑だと！？」

「さあとつとと行つて来い

「嫌に決まつてるだろうが！」

「でも行かないと……」

「どうなるつて言うんだ！？」

「脅しか？なんて卑怯な……。

「清水の理性がそろそろ飛びそうだ」

「ハアハア……もう可愛ければ男子でもいいや……」

「行つてきます！だから早くこのひもを解きたまえー！」

「真操の危機には変えられん！」

## 第二十二話 宣伝活動

「しかし宣伝活動といったって、具体的には何をすればいいんだ？  
といふかこのかつらと化粧、どうにかしてくれ」

清水の理性が崩壊する直前に辛くも脱出を果たした俺たちは、周囲の人から奇異の視線を受けながら廊下を移動していた。これなんて羞恥プレイ？このまま俺に女装癖があるという噂が立つたらどうしてくれる。

「大丈夫ー。そこら辺はまず、僕たち一人が見本を見せるからー」「わかった。で、かつらと化粧はどうすれば……」「イッシー、一組から始めるぞ」

話聞け。

「三井はそこで待つってねー」

「だから恥ずかしいって言つてるだろ？が！」

「失礼しまーす」

マイペースつて便利だなあ、おい！

「ハアイ、ジエシー！最近疲れがたまつて困つてるんだよー」

「ブライアン、そんなあなたにとつておきの商品をお薦めするわー！..」

「なにこれ！？アメリカ風通販！？」

「私がお薦めするのはこれ！特製栄養ドリンクー！」

無駄に発音いいな！

「なんておいしそうなドリンクなんだー！いつたいどんな効果があるんだい！？」

「疲労回復に素晴らしい効果があるのよー！早速飲んでみてー！」

「では喜んで頂くよ！GOKUGOKU」

擬音まで！？

「プハアー！なんてエキサイティングでスリリングな味なんだー！」

それ栄養ドリンクにとつて、高評価ではないだろー。

「疲れの方はどーー？・プラターイウワーンー・」

鬱陶しいー必要以上に鬱陶しい！

「なんてことだーさつきまでの疲れがまるでないー！」

嘘だ！

「今なら一十四時間テレビをマラソンしながら全部ぶつ通しで見る  
ことだつてできるよー！」

効果あつすぎだらー！胡散臭すぎて疑うことが馬鹿馬鹿しくなつて  
くるわ！

「それはよかつたわ！勧めた甲斐があつたとこいものよー！」

「とこいのドリンクは、どーいで手に入れる」とができるんだい  
！？」

「せうか。ここの商品を執事喫茶で出すと宣伝するわけだな。宣伝こ  
なつているとはとても思えんが。

「通販よーお申込みは  
おまけでついてくるのよー！」

執事喫茶で出せよー！

「それはいい！早速申し込むこととするよーそれじゃー！」

今までの茶番は何だつたんだー？

「ちなみに原料は中国産だからー気をつけてー！」

なら勧めるなよー！

「ふつ、いい宣伝になつた

「どーがだよー！」

生徒のほとんどが呆気に取られてるじやねえかー反応に困るつ  
ひかむ困るつひ

なことするな！松ちゃんだけ大爆笑してたけどー！

「こんな感じで次は三井も一緒にやるよー」

やつたくねえ！

「さあついてこー、旦那

ついて来いつて強制的にじゃん！拒否権はないのか！？

「ないよー」

ひでえ！

「……はあい、ジユシー……」

「どうしたの、鳳明琳！」

俺中国人の設定！？

「旦那、台湾人の設定だ」

どうでもいいよそんなの！

## 第三十二話 宣伝活動（後書き）

ええじゃないか（そのにではない方）の累計アクセス数が十万件突破！ ひとえに読者様のおかげです。そこで、特別編のリクエストを受け付けたいと思います。三井のトラウマ話からなぜ保護者が三井についているかの過去話まで、リクエストがあれば書きたいと思います（ただし一日一話投稿なのでその間本編の流れは止まります）。 そんなリクエストとかどうでもいいから書きかけと仰るなら、その意見を尊重します。

これからも頑張って書きますので、この駄文を読んでやつてください。

「宣伝活動御苦労、諸君」

「とりあえず殴つていいか」

妙に偉そうだ。人にこれほどの屈辱を「えておきながら、奴は無傷とは気に食わん。

「まあなおちゃん、そう怒るな」

火に油を注いでいるのがわからないのかな？これはお仕置きが必要なようだ。

「えい」

「…………！」

「俺、握力ないからあんまり効果ないだらうなあ」

男子高校生平均以下の握力だし。これで痛がるようでは男じゃないだろ？

「……ギブ、ギブ……」

「聞こえないなあ」

頼み事ははつきりということ。これは最低条件だろ？

「…………すまん……アイアンクローハ……やめてくれ……」

「旦那、夏目が変色してゐる。これくらいでやめとけって

「もとからこの色だる」

「青紫色が人間の顔の元々の色なら俺も文句は言わん。しかし俺たちの顔は肌色がデフォルトだ。したがつて今の夏目の状態は非常にまずい。OK？」

ふむ。義人の言つことにも一理あるな。しかし。

「夏目は人間じゃなかつたんだ、きっと」

「現在進行形で別のものになりかけていることを除けば、夏目は人間のはずだぞ、たぶん」

「…………たぶんって…………どういうことだ……」

命乞いのかわりに突つ込むとはなかなかやるな。褒美に手を離し

てやるわ。

「…………」

「おーい、夏田生きてるか」

「義人もほつとけよ」

「おーい」

「…………」

「返事がない。ただの屍のようだ」

「それが言いたかつただけか」

一度は言つてみたいセリフではあるが。

「…………死んでねえよ…………」

よくもまあ倒れながらも突つ込めるものだ。

「旦那も大して変わらんと思つ」

つるさい。人を突つ込みマシーンとでも思つてゐるのか。

「…………もう一度彼女を作るまで…………俺は死ぬわけにはいかんのだ……」

しかし夏田はどうしてもボケずにはいられないらしい。この発言はマジで言つてゐるから、天然ボケといふことで。それでも立ち上がりうとする姿勢は立派だ。

「彼女のために死ぬわけにはいかん! というなら格好いいのにねー

「ぐはつ!」

「まあ、今の発言じゃ本当に可哀想な人にしか聞こえんな

「ぐふつ!」

「…………ドンマイ!」

「けはつ…………」

夏田が再び倒れ込んでしまった。肉体的な痛みには耐えられても、精神的な痛みには耐えきれなかつたようだ。残念。修行が足りんよ。精神面を鍛えるつて……どうじるといふんだ?」

「経験を積め」

「精神面を鍛えるような経験をしないよつに努力しろよ」

## 第三十五話 思い違い

「準備も着々と進んでいますね、感心感心」

健三さん、せっかくスーツ姿になつて常識人に見えるんですから、おかしな行動は取らないでください。いい大人が文化祭の出し物の試作品をつまみ食いするってどういうことですか。

「三井、食べ物は食べるためにあるんです」

それに限つていえば、作った人、もしくは来店するのに近い人物が食べることに意義があると思います。さつきから食べても感想一つ漏らさないんじゃいい迷惑です。

「でもさー三井ー」

「ん?」

「この中だとー、健三さんが一番執事っぽく見えるよねー」

見た目だけはな。やはり年をそれなりに取つてるだけあって、貴禄というものがある。全員（係問わず）スーツとネクタイを着用することになつたのだが、義人は身長の低さがネックになつてゐるし、石井は未だにワカメヘアーのまま（気に入つたらしい）で論外、清水は体格の良さが災いして、カジノにいる用心棒に見える。他の連中も高校生であるが故に、スーツに着られてゐる感が拭えない。やはり、執事喫茶は無理があつたのではなかろうか。

「でも、なおくんはまともに見えるよ?」

「見えるだけじゃなくて実際まともだからな」

「はいはい」

「義人、軽くいなすな」

失礼な奴だ。

「しかし……」

「どうしたの?」

「タツミは違和感があるな」

「スーツ姿だからじやなくて?」

「それもあるが、それ以外にもなんか変なんだよ」

男性用のスーツを着ているのに変に見える理由……ああ。

「胸か」

「……なおくんのHツチ」

「違和感の原因を探し出しただけだ。やましこ」とはない

「……」

なんだろう。タツミの視線が冷たい。

「三井ってそのことに今さら気付いたのか？」

「俺たちは一番に田がいったのに……」

「杉田、三井って去勢手術でもつけたのか？」

「いや、田那が女子に関心がないのは、主にマツカマのせいであつて、肉体的なものではない」

「トライア」

「逢つてきた女性のほとんどからひどい田を取けてきたらしく。田那の話によると」

「例えば？」

「実の姉によるスキンシップの話を借りたDVD

「……」

「幼なじみによる毒殺未遂

「……」

「後輩による罵倒

「……もうこい、やめてくれ

「でも、三井が嫌われてるわけではないんだよな？」

「むしろ逆。愛情の裏返し？」

「疑問形なのが気になるな

「俺女子じゃないし」

「それもやうか

「……はつまつは」

……「どうしてだらり。タシミからは軽蔑されてる気がするし、あの子で笑ってる男子連中からは馬鹿にされている気がする。

「なあタシミ、どうしたんだよ」

「……別に」

「何がまずい」とでもしたか？したなら謝るが

「……少し不快にはなった」

「すまん」

「……そう思うなら行動で示して」

「……なにか奢るか？」

「奢らなくともいい。ただ……」

「ただ？」

「この執事喫茶のプレオープンのとき、なおくんがエスコートしてくれる？」

「……そんなことでいいのか？」

プレオープンとは、文化祭の前に一度実際に執事喫茶を開いてみる実験のことである。クラスで半分ずつ分かれて、提供する側とする側でどのような問題が浮かんでくるかを試すために行われる。その中のエスコートだ。普通にサービスすればいいんだろう？それくらいならお安い御用だ。

「約束だよ？」

「男子相手にやるよりかマジだ。喜んでやってやる」

「……なおくんでもそんな風に思うんだよね？」

失敬な。俺を同姓愛好者だとでも思つてゐのか。

「だつてなおくん、女子に冷たくない？」

「女子が俺を嫌つてるんだわ」

逆だ、逆。

## 第三十六話 交渉

執事喫茶> KENZO'S BAR <（あくまで酒は販売しない。調子に乗った義人たちが「響きがいいから」という理由で名付けた）プレオープンの日（土曜日）、俺たちは休みだというのに北高の教室に集まっていた。まだ暑いのにスーツ着用で。

「あちい……」

「旦那、準備してこなかつたのか？」

「準備？」

「背中に冷えピタ張るとか、濡れタオルを持ってくるとか」

「しまったな。俺もそうすればよかつた」

「一ついい経験になつたな。本番で準備してなかつたら悲惨な目にあうところだつた」

事前に一度実践しておくれのはいい意見だつたようだ。現に今、俺は一つ学んだことだし。

「こんな感じで改善点を見つけていく」とが今日の課題だな「三井、何言つてるんですか」

今日はあるはずのない声が聞こえてきた。

「今日の課題はいかに私の暇をつぶせるか、です

「……健三さん、休みだというのになぜ学校に？」

「面倒臭がりに定評のある健三さんらしくもない。

「休みくらい家でゆつくりさせると、娘に追い出されました

「……なんかすいません」

世間の親と同じ哀愁が漂つてゐる。この話に触れるのはよしておこう。

「さあ、早く私の喫茶店を開店させてください」

「……健三さんの喫茶店なんですか……」

確かに店名からしたらその通りなのだが。何もしてない人物が店長つてそれでいいのか。

「ああ、でも不祥事……食中毒とか起こしても責任は取りませんから、起こさないよう注意してください」

……好意的に解釈しよう。食中毒とか起こしたら駄目だ、自分の尻拭いを人にさせるなという高潔な教えなんだ、きっと。

「ちなみに売上の九十パーセントは名前の使用料ということで私の懐に……」

「とんでもないこと言いだしたよこの人！」

「……のもちょうど考えましたが、喫茶店のメニュー食べ放題というのを妥協しましょう」

「…………いいのか、義人」

「健三さんには賄いとか、作り置きで古くなつたやつとか売り物以外を提供する…………のでは駄目ですか？」

調理係代表の義人には、譲れない一線があるようだ。……さて、

健三さんの返答は？

「ちつ、しけてますね…………しかしいいでしょ。感謝しなさい」

なんか理不尽に威張られた気がする。

「旦那、健三さんだから仕方ない」

「それもそうだな」

健三さんに文句を言つても始まらない。

「さあプレオープンの開始です。前半に仕事が入つてゐる人は準備してくください」

「…………はい、健三さん」

「店長と呼びなさい！」

「…………はい、店長！」

……健三さんが取り仕切つてゐる。この人でも樂しんでるんだ……

よな？

「「「いらっしゃいませ、お嬢様、旦那様」「」

「こちらの窓側の席でよろしいですか?」

「ご注文をお伺いしてもよろしいですか?」

「苺パフェをお一つですね、かしこまりました」

プレオープンを開始して三十分。ミスをしながらも順番に客の相手をした結果、ようやくウエイター業務に慣れてきた。

「旦那、そんな仮面で注文聞いてどうするよ。もつと笑え

「そんなこと言われてもな……」

「執事なんだから、使える人に喜んでもらわないと。だからスマイル

そう。ウエイター業務には慣れたものの、執事という業務には慣れていない。執事喫茶という職種柄、相手を喜ばせなくてはならないそうだ(数人の腐女子が激しく主張)。特に俺は目を付けられているらしく、相手をした客の十割にもつと笑えと言われている。

「仕事をしてゐるのに笑うつてのもどうかと思うが……」

「どの仕事だつて不機嫌な相手に対応してもらいたくはないだろ」「別に不機嫌つてわけじゃない」

単純にミスをしないよう気が張つてゐただけだ。

「それでも気持ちに余裕を持てよ。緊張のし過ぎはミスにつながる

「……わかつた。次の客からはにこやかに対応する

「よし。ああそれとだ」

「なんでしょうか旦那様?」

「このパフェ作った奴呼んで来い。クリームの量が多すぎる。適正な量で提供しないと不公平になるからな

「……かしこまりました」

調理係代表としてしっかり仕事もしてこらゐみつだ。感心。

「しかし笑つて応対するのか……馬鹿にされたいると思われないか？」

「問題ない。どう思われるかどうかの確認も、このプレオーブンの目的の一つだ」

近くにいた原君に相談したら、このよつたな答えが返ってきた。なるほど。俺はミスをしないよう神経質になつていて、それは間違いだつたな。ミスをするのが目的と考えれば問題ない。

「ありがとうございます原君。では次のお客さんの応対をしてくる」  
「礼には及ばん。それと、三井にお嬢様から指名がかかつてゐる」  
「ん? 誰だ?」

「石川さんだ」

ああ、もうタシミの番が回つてきたのか。よし、このままタシミで実験台となつてもらおう。タシミなら多少のミスも許されるだらうし……ただ、改善点を最後に聞かんとな。忘れないようこじよつ。 「わかった。あと一つ聞いていいか?」

「なんだ?」

「原君は執事喫茶どう思つてる?」

常識人に近い原君の意見を聞きたい。

「……儲かりそだだから妥協してる。執事をやりたいとは思わんかつたが」

うん、現実的な意見ありがと。原君は執事似合つてると思つんだがなあ。

「冗談だろ。知らん人のために何かするのは性に合わん」  
さいですか。

## 第三十八話 立場

……しまつた。タツミに呼ばれているといつから、てっきり一人で座つていると思ったのだが、予想に反して三人で座つていた。一緒にいるのは副会長と書記の人（名前は忘れた）だと思つ。転校して一週間も経つてないのに、仲良くなつたようで宜しいことだ。その社交性は見習いたい。

「お呼びでしょうか、お嬢様？」

まずは用件を聞こう。話はそれからだ。そう思つて、できる限りにこやかに用件を尋ねてみた。……気持ち悪いとか言われたらどうしようか。

「なおくんが笑うなんて珍しいね」

そこに食いつく前に用件を言ってくれ。恥ずかしいから。

「うんうん、三井君はいつも笑つてた方がいいよ。杉田君と石井君みたいに」

四六時中頭の中が花畠になつてゐる奴らと一緒にするな。あいつらは氣苦労をしない体質なんだ。もしくは「身だしなみも常に整えるようにしようよ。佐伯さんが原石とか言つてたのも、今なら納得できるし」

あなたは一学期の間、俺のことをなんだと思つてたんですか。

「佐伯さんも見る目ないなーと」

失礼なこと言つてるつて自覚してますか？

「で、用件だけど……」

ようやく本題に入るのか。

「一人が聞きたいことがあるんだつて」

この一人が？接点なんてほほないに等しいのに。

「朋ちゃん、聞きたいことがあるんでしょ？」

書記の人は朋がつく名前によつた。どうでもいいけど。

「うん」

「なんですか？」

「三井君って彼女いないんだよね？」

「生まれてこの方、一度もできたことはありませんが何か？」

今の立場（仕える側と奉仕される側）を利用したいじめが発生しています。

「じゃあ辰美ちゃんのことどういってる？」

「ちょっと、朋ちゃん！？」

「はい？」

「質問の意図がわかりかねるんですけど」「だから、辰美ちゃんのこと好き？」

「んー！んー！」

タツミが何か叫ぼうとするが、口を塞がれている。……ほんとこの仲が良いのかわからんな。

「……まあ、嫌いではないのは確かです」「……」

「じゃあ好きなんだね？」

なぜそう短絡的になるんですか。

「……そんなこと言えません」

「なら女性の中で何番目の存在？」

「は？」

「ああ、名前は言わなくていいよ」「

そういうことと書いてるんじゃないんですけど。

「三、二、一、はーー！」

「……五番以内？」

「だつてさー！」

「……」

もう口は塞がれてないのに、タツミがわざから黙つたままだ。

「どうかなさいましたか、お嬢様？」

「……なんでもない」

「それでは御注文を伺つてもよろしいですか？」

「……紅茶で」

「お」方は?」

「私たちは「一ヒー」で」

「かし」まりました」

さて、バックに伝えるか。

「ああそうそう」

「なんでしょうか?」

「紅茶には愛情をたっぷり入れてあげて!」

「そのようなサービスは行っておりません」

スマイル〇円とかじゃないんだから。

## 第三十九話 具体策

「プレオープンで気が付いたことを挙げていってー」

「さあどんどん挙げていってくれ」

前後半のプレオープンも終わり、俺たちは反省会（司会は義人、石井の「コンビ」）を行っていた。

「そうだな……注文を取りに来るのが遅い」

「執事係ファイト」

「それで終わりかよ！ 解決策を出し合つのが目的だらうがー・執事係に負担を押し付けるな！」

「そうだよー。もつと具体策を立てないとー」

「そうだよな！ 確かに執事係の不慣れもあるが、カバーできる点があるはずだ！」

「執事係が一倍速で動くつてことでおつけだよねー」

「全く具体策じゃない！」

「なんかそういうアイテムありそうだな」

「ねえよ！ 現実世界には、そう都合のいいアイテムねえよー！」

「ある薬を使えば数十倍になるが……」

「マジで！？」

「パフェの甘さが」

「必要ない！ 今の話の流れからわかるだろうが！」

「ちなみにその薬品は戦後砂糖の代わりに使われていて、入れすぎると味覚が馬鹿になるほどだつたそうだ」

「怖いよー！ 戦後でないと許されないよつた薬品だなおい！ そしてなぜその薬品の話を今ここにするー？」

「あまり夢ばかり見て いるような ならお灸を据えようかと」

「リスクが高すぎる！」

「まあ、客の出入りをチェックする係も必要だな。シフトがきつくなりそなうだが致し方あるまい」

「健二さんが手伝ってくれれば楽になるんですけど……」

「手伝うわけがないだろ、あの健二さんだぞ」

「あの健二さんは、教室の隅で居眠りをしここる。」

「……頼んだといひで使えそうになつたよつたな……」

「係を増員するつてことでいいな」

皆異議はないようだ。……あの健二さんの姿を見れば頷くしかな

いが。

「他に意見は？」

「執事の衣装がバラバラの気になるな」

スーツは各自で持つてきているため、色からメーカーまで揃つているものが一つとしてない。確かにこれは客から見たら不自然かもしれない。

「どうすればいいと思つー？」

「別に気にしなくていいだろ」

「いや、せっかくやるんだから、少しくらい統一感を持たせたい」

「方法はないものか……」

「なんか一つくらい費用から金出して買おうぜ」

「何を」

「執事に必要なもの……」

「蝶ネクタイはどつ？」

「それだ！」

「よし、それでいいか？」

異議なし、と声を揃えるクラスメイト達。団結感があるのはいいことだ。

「それじゃ、誰か買い出しに行つてくれる人はいるか？明日にでも

「めんどうな」

「今日わざわざ出てきてんだから、明日へりこ休ませてよ」

「慈善事業じやあるまいし」

うん、いひちのやる気のなさでも一致団結してゐるな。団結感があるところのもの困つものだ。

「それなりに、執事系かの代表者一人出して」

## 「どうして執事係？」

「 麻子ちゃんの立派な」

卷之三

「野原の瞳、一羽、やがて飛んでゆく」

「清水、お前は大道具係だ。お呼びで

男女二人のところに反応するなよ。切なく

吳三·白三·尹一

國學

「旦那、執事係代表だろ？」

強制で決められた代表だというのに理不尽なことだ。

それじゃあ——女郎は詰たゞ仰視する——

'ΙΟΔΑΙΩΝ ΙΩΑΝΝΙΝΩΝ ΕΠΙΦΑΝΙΟΥ ΛΕΥΚΟΥ

「えー? 三井君が決まってからをわをわしてたじやん? 」

「それでは石川さんで決定でいいかね、諸君？」

なんだ義人、偉そうに、それでモケラスのほう

で（清水は断固反対の様子、タツミは俯いたまま何も言わず）良しとしよう。

## 第四十話 テジャヴ

「なんですねとーーー？」  
「ああ、旦那と石川さんが明日一人で買い物に行く」  
「あの朴念仁がーーー石川先輩が誘つたんですかーーーどうなんですか  
そこのところは杉田先輩！」  
「色々と事情があつてな。本人たちに聞けよ」  
「……なぜそんな情報を私に？」  
「イッキーと俺とで旦那をつけるから。あのーーー人の邪魔をしない約  
束ができるなら集合場所を教えよう」  
「……目的地は教えてくれないんですか？」  
「そしたら一人で暴走するだろ、保護者ちゃん」  
「……否定はしません」  
「そしたら面白い展開がなくなるからな。まあ気が向いたら後で掛け直して」  
「その必要はありません」  
「というと？」  
「……邪魔をしないで見てるだけでもいいです。このままじゃ気に  
なつて眠れません」  
「わかった。じゃあ俺たちの集合場所は……」

集合時刻になつても待ち合わせ相手が来ないというのは、イライラするものである。そこそこ几帳面なタシミならこんなことはないだろうと思つていたが、予想が外れた。こんなことなら読書用に本でも持つてくるんだつた。  
「もしかすると道に迷つてるのか？」  
あり得る話だ。まだこの土地に来てから一ヶ月も経つていないの

だから。ましてや駅周辺など混雑していく、ジジが西口などわからんかもしれん。

「仕方ない。俺が動くか」

注意しながら周りを探せば見つかるかもしれない……と思つて角を曲がつてみた。

「……いた」

そこには男に絡まれていてタツミの姿があった。……「ジジャヴ？」前にもこんなことがあつたようだ。

「だからさあ、合コン一緒に来ない？」

「そうそう、一人女の子がキャンセルしちゃつて」

「待ち合わせ相手がいるんです」

「男でしょ？ ほつとけばいいって」

「……ずいぶん勝手な物言いをしてくれるな……」

「あ、なおくん」

「なんだ？ お前が待ち合わせ相手か？」

「お前一体この子の何なんだよ」

「答える義理はないな」

「うぜえな、お前」

「君たちほどではないな」

「はあ？ 調子乗つてんじゃねえぞ？」

「自覚すらないとは重症だな。脳外科に行くことを推奨する

「ふざけんな！」

少しばかりからかつてやつただけで殴りかかってきた。もつともかすりすらしない、恥ずかしいものだつたが。

「周りが見えないとは……馬鹿もここまで極まれり、だな」

「何言つてんだてめえ！」

「ギャラリーがいるのがわからんか？」

ここは駅前。喧嘩が起れば人が集まつてくることなど考えずともわかりそうなのに、馬鹿なやつだ。

「ちつ、覚えてろよ！」

そう言つてナンパ男一人は去つていつた。まさか「覚えてろよー」などとこの耳で聞こうとは思わなかつた。いるんだな、そんな奴。

「なおくん、大丈夫?」

「何が

「……今、殴られてたじやない」

「当たつてないわ、あんなの」

「なおくんつて格闘技やつてた?」

「いや、全然」

「それにしては慣れた様子だつたけど……」

「……あれの五百倍は強い相手に苛められてたからな……」

いかん、目にも写らない速さの正拳突きを思い出すだけでもびりそうになつた。おのれ姉上、記憶だけでダメージを与えるとはどれだけ俺のことが憎いんだ。

「……なおくんも苦労してるんだね」

苦労させられた相手がうちの姉ちゃんだと知つたら、タツミはびう思うのだろうか。昔は慕つてたし……信じなさそつだ。

「まあそれより、買い物を終わらせるわ」

時間がもつたいない。

「そのまえになおくん、一つだけいい?」

「なんだ?」

忘れ物でもしたか。

「……助けてくれてありがと」

……別に。当然のこととしたままでだ。

三軒ほど服飾店（洋服の 山など）を回ってみたものの、手ごろな値段で四十個もの発注を一週間以内にこなせる……といつ都合のいい蝶ネクタイは見つからなかつた。蝶ネクタイ自体にあまり需要がないせいだろう。分析するのはいいが、どうすればいいかは思いつかない。困つたものだ。

「なおくん、他にお店は知らないの？」

「もともとそういう店には立ち寄らないからな……」

「じゃあいつも服はどうしてるの？」

「親に買つてきてもらつてる。主にユ クロとかで安くて長持ち。なんていい響きだらうか。

「……もつと身だしなみに気を使おうよ。……」

「普段は制服で、外出するのなんて図書館か本屋くらいなもんだし。氣を使う相手もいないから問題ない」

「もつと青春を謳歌しなよ」

「十分しどる。人によって人生の楽しみ方など千差万別なのだから、その言い方はおかしいな」

「……まあいいや。今は」

あとでまた小言はあるのか。

「蝶ネクタイならどんなのでもいいんでしょ？ 予算があるから、安いのにしないといけないだけで」

「そうだな。よし」

困つた時の義人頼みだ。電話して有力な情報を得よう。

「……ん？」

こんな時に限つて出ない……というより電源が切つてあるのか？ いつもは迷惑も考えずに掛けてくるくせに、自分では取らないとはなんて奴だ。

「しまつたな……義人が駄目となると……タツミは知らないよな？」

いい店とか

「うーん、まだ来て一ヶ月も経つてないしね」  
そりやそりや。むしろそれで俺より知つてたら俺の十年近くがな  
んだつたんだつて話になるわな。

「でもほんとに知らないの？」

「知つてると調べた店は全部当たつた。これでないならみんな納  
得……」

「どうしたの？」

「……いや、一つ思い当たる個所があつた」

そんなわけでたどり着いたのは、以前保護者と一緒にきたアクセ  
サリーショップ。

「ダメもとで当たつてみた割にはいいものがあつたな」

蝶ネクタイといつてもそう畏まつたものではない、なおかつ安価  
なものが見つかった。しかも発注するまでもなく倉庫（別の場所に  
あるらしい）に在庫があるそうで、明日学校に届けてもらえること  
に。いいこと続きで罰でも当たりそうだ。

「いいでこのミサンガ買ってたんだね」

そうやつて手首を上げると、ミサンガが巻きつけられていた。せ  
つかくプレゼントしたものだ。長く使ってやつてくれ。

「ミサンガが切れると願いがかなうって言つから、あんまり長くは  
使いたくないな……」

「何か願掛けしてるとか？」

「……なおくんはどうなの？」

質問に質問で返すとはいがん奴め。

「とりあえず平和な日常を願つてある」

でも答える俺。立場が弱いことに起因するわけでは決してない。  
……決してない！

「頑張って生きよつね、なむくさん  
慰め方がひどこや、タツ!!。」

## 第四十一話 得意分野

発注も終わり、頼まれごとも他にはない。予想より多少時間はかかったものの、ようやく俺は晴れて自由の身となつた。行く手を遮るものは何もない。

「じゃあな、タツミ。お疲れさん」

「ちょっと待つて！」

「なぜだ。俺にはこれから崇高な使命があるところに」

「用事があるの？」

「図書館で、楊令伝の最新刊を読まねばならんのだ」

「暇なんだね」

失敬な。俺にとつてはこれ以上ない有効な時間活用法だ。

「それなら、町の案内してくれない？」

「誰か女子に連れて行つてもらつたんじゃなかつたか」

俺の記憶では、転校初日に例の副会長と書記が案内するみたいに言つていたはずだが。

「人によつて案内する場所は変わつてくるでしょ」

「この田舎都市（野菜の生産量日本一）に特別案内するところがあるとでも？」

「案内する場所が少なくていいんじゃないの？」

……笑つてはいるものの、タツミに引く氣はないようだ。子供の頃より頑固さが増している、確實に。

「……いいだろ？ それなら俺が知つてゐるいい場所に連れてつてやる」

「本当に？」

それがタツミにとつていい場所かどうかはわからんが。

数分後、目的地に辿り着いた。

「……ここのは……本屋だよね？」

「見ての通りだ」

「……どこがいい場所なの？」

まるで俺が立ち読みするために来て、それを案内と言つて誤魔化そうとしている。そり言いたげだな。まあその積もりが全くなかつたと言えば嘘になる。かといって決してそれだけではない。

「見る、この有名漫画家のサインの数々を！」

新装開店した時に、どうこうコネかは知らんがこの店に大量に漫画家のサインが届けられた。

「有名漫画家って……私が知ってる人にはないと思うけど……」

「タツミは、あらぬけいいちく先生を知らんのか？」

コンピューターで、日常くという素晴らしい漫画を連載してゐる、注目度ナンバーワンの漫画家だというのに。……そのうちアニメ化しないかなあ……。

「それ以外にも、美永かがみく先生（らきすたの作者）のサインとか色々あるけど」

「誰？」

「知らないようだ。この価値がわからんとはもつたいない奴。

「まあそれを抜きにしても品揃えがよくていい店だ。ゆっくり立ち読みして行け」

「……店に迷惑でしょ……」

「いや、月にかなりの金を落としてるから問題ない」

「問題あるでしょ……」

「そんなことはない。だつてほら。

「おつ、三井君じゃないか。いつも贔屓にしてもらつて悪いねえ」

「まあ、いつもいつも立ち読みさせてもらつてますから」

「立ち読みくらい三井君の買った本の総額に比べれば安いもんだよ。もちろん買つてくれるに越したことはないが」

「全部買つてたら破産しますよ」

「それもそうだな。ところでそこのお嬢さんは三井君の彼女かい？」

「か、彼じょ……！？」

「違いますよ。新しく越してきた知り合いです」

「そうかそうか、ぜひこの店を御観覧に。じゃあ」

いつもながらいい人だ。

「おい、タツミ。店長の許可も下りたことだ。これから立ち読みするから別行動な」

「…………」

なぜかフリーズているタツミだが、この本に囲まれた空間ならそのつけ基に戻るだろ。楊令伝は立ち読みで済ませてしまおう。

俺は充実した午後（四時間立ち読みしつぱなし）を過ごすことができ、充実した気分で帰路に就いたのだった。めでたしめでたし。

……あれ？ 何か忘れてるような……。気のせいかな。

「「めん、待つた？」

「「うん、私も今来たと」」

「……人を待たせておいて、コントをするとはどうこいつア見ですか、  
杉田先輩」

「ここはお約束だろ。保護者はどうしてカリカリしてんだ？」

「それはもう一、三井が女子と一入りで遊びに行くからだらうね  
一。ビバ青春ー」

「なるほど。嫉妬か」

「なんとでも言えはいいです。あとビバつてなんですか。いつの時代の産物？久しぶりに聞いて混乱しましたよ」

「石井、ところでお前はどれくらい前に来た？」

「僕は集合時刻十分前くらいかなー。その時に古木さんはもういた  
けどー」

「……張り切りすぎだろ」

「集合時刻の十五分後に来た杉田先輩はふざけ過ぎです」

「ちなみにどれくらい前にきた？」

「一時間前です」

「……受験生がそれでいいのか？」

「勉強よりも大切なことがあるんです」

「その心はー？」

「人生に関わつてくるかもしないことです」

「おお、燃えているな」

「惜しむらくはー、その熱意に三井が気付いてないってことだねー」

「……先輩は、本当に私の気持ちに気づいてないんですか？」

「ほほ百パーセント気づいてないだらうな」

「それが三井だよー」

「はあ……どうすれば気づいてもらえるんでしょうか？」

「知らんよ。それに知つてたとしても、俺としてはこのまま二角関係に移行するのが一番面白い展開だから、何も言わん」

「最低ですね。可愛い後輩のために何かしようとは思わないんですね？」

「何が旦那にとつて一番幸せかわからん今、俺にじてやる」とは何もない

「僕はー、みんなが幸せになるように動くつもりだよー。だから今は何もしないで傍観ー」

「……いいこと言つてるんだかいないんだか……要は自分の気分しだいで行動するんですね」

「その通り

「そうだよー」

「……わかりました。お一人の先輩には手を貸してもらひません。自分の手で先輩の心を振り向かせてみせますー」

「おおー」

「いい覚悟だ

「さあ、その野望のために今日はしつかり観察してやります「おもしろい展開になるといいな」

「そうだねー」

「少なくとも、私とおー一人では価値基準が天と地ほど違つので、そのおもしろい展開とやらにならないことを望みます」

「そんなー。僕たちはただー、純粋に三井と石川さんの距離が縮まらないかなーって言つてるだけなのにー。あわよくば第一ーのステップへとー」

「どこが純粋なんですかー! あと第一ーのステップつてー?」

「にやんにやんするステップだな」

「いつの時代の人間ですかー! あとステップが進み過ぎですー! 意味知つてるじゃん」

「おお、見ろー人とも。例によつて旦那がT.O.I.O.V.eるに巻き込まれてるぞ」

「なんかアクセントが違いませんか  
「気に入らんよ保護者ちゃん」

「今日は石川さんが巻き込まれた側つぽいけどねー」

「どうせ先輩の能力でトラブルを呼び寄せたんでしょう。全くもつて迷惑体質な人ですね、あの先輩は」

「旦那がどんな星の下に生まれついているのか調べたら、論文が書ける気がする」

「大学の卒業論文の時にはー、三井に協力してもらおうかー」

「そんな戯言はどうでもいいです」

「杉田ー。まずくないー？三井がナンパ男相手に喧嘩売つてるよー？」

「加勢しましょうか」

「この状況で出てつたらー、いいくらい井でも怪しむでしょー。でもどうしようかー？」

「安心しろ、旦那は何の考えもなしに喧嘩は売らん」

「……みたいですね。人が集まつてきました」

「なるほどー。ストレスを解消して問題も片付けるー石一鳥の作戦だつたわけだねー」

「それは違うな。旦那の性格からして、ストレスを馬鹿にぶつけるのが一番の目的だろー」

「……人を集めたのがついでですか

「まあ誰も怪我とかがなくてよかつたよー」

「よくないですよー助けられて石川さんちよつとほほ染めてるじゃないですか！危険ですよー」

「落ち着け。まだ恋愛感情は抱いてないらしい。……フラグはたつ

たが

「旗をたてるの大好きだもんねー、三井はー」

「やうだな。しかしこれで安心して旦那と[石川]さんのデートが見れる

「やつぱりデートだつたんですか！？妨害してきます！」

「落ち着きなよー」

「約束は守れよ。そうでないと旦那に一部始終を報告する

「……わかりましたよ」

「あと心配しなくていいよー。」の買物はただの文化祭の備品買い出しにすぎないから

「そうそう」

「男女一人きりで買い物に行く時点で「ただの」とは言えません」

「保護者ちゃんだつて旦那と一人で出掛けたじやん」

「どうしてそれを！？」

「おもしろそうな出来事には便乗する。それが俺たち北高生」「最低です！あの時も見てたんですか！？」

「黙秘する＝サンガ」

「僕の口からは何も言えないよ＝サンガ」

「語尾になんかついてます！間違いなく知つてるでしょうー？」

「知られて困るようなことしてたのー？」

「……それは……何もなかつたんですが……」

「映画館あと少しだつたのにな」

「三井の空気の読めなさは偉大さすら感じるよねー」

「聞いてたんじやないですか！余計なお世話です！」

「あと最低で……その行為を今まさに君もしてるとかなんだが」「僕たちは最低な行為とは思わないけどねー。誰も損しないしー」

「……私には事情があるから仕方ないんですけどー」

「政府高官じやないんだから。言い訳しない」

「良心の呵責を覚えるあたりまだまだだねー」

「少なくともその一線は越えないようになります」

「旦那たちは眞面目すぎだな。もっと小物の店とか回った方が、安くて意外な掘り出し物とか見つかるかもしれんのに」「確かにー。洋服の青とかで文化祭用の蝶ネクタイを探すのはおかしいよねー」

「教えてあげたらどうなんですか?」

「そんなことしたら楽しむ時間が減るだろ?が!」

「減つていいいじゃないですか?」

「携帯の電源切つておいたらー?誰かから下手に掛かつてきたら厄介だよー」

「そうだな。追跡途中で掛かつてきて見失つたら田も当たられん。電源は切つておこつ」

「友達なら力を貸してあげましょ?」

「保護者ちゃん、間違えるな。親友だ」

「親友なら力を貸してあげましょ?」

「親友だからこそ成長を見守つてやりたいんだよ。ひとりでできるもんくみたいな?」

「訂正を求められた意味がわかりません」

「気分」

「……一人じゃないですよね」

「ふたりでできるもんくみたいな?」

「どうでもいいです」

「二人ともー。三件目を出でてきたところでお手上げ状態になつたみたいだよー」

「はやー!」

「いくら田舎都市だからといって服飾店三件で打ち止めは少ないのでしょう。先輩つてもしかして店とか同じところでばっかり買う人ですか?」

「もしかしなくとも、那までつぎだな。取扱以外の一ことに關しては興

味を持たないし、淡泊

「お父さん、が三井は教えてあげな。

「おおそれだ！」那は保護者ちやんに感謝。その感謝の気持ちはやがて變へ

.....( / / / )

「保護者ちゃん、そこは「ありませんよ」、みたく突っ込んでくれ  
……なに満更でもなさそうな顔してんの？」

刀譜がたがてうが

「三藏」の「三」は「三」の「三」

「旦那が電話してゐるな。誰かに相談でもするつもりか」

柏田はしや なし

TATATA

「二人揃つてアメリカンな笑い方しないでください」

—おやおや?—人か移動を始めましたよ。

卷之三

「ストーカーみたいだねー」

卷之三

卷之三

「一人とも！おいてかないで

すぎる！周りの視線も痛いし！」

「 もやー だれかー 。 ここに 変態 が い ますー 」

一氣持ちこもってねえ！適当にやられて余計に傷ついた！」

一 だつたら黙つてつけますよ

「……まさこ」

「ではー、れつづりー」

「石井はぬみなをやつでこーな……」

「予想通りー、例のアクセサリーショップに来たねー」

「さて、旦那と保護者ちゃんの思い出の地を、他人に紹介された今  
の心境はいかに！？」

「……先輩の役に立て光榮なような……もつと別の場所はなかつ  
たのかと腹立たしいような……つて何言わせるんですか！」

「なるほどねー。でも三井、助かつただろうからいいんじやないー  
？」

「そうそう。あそこには結構いろんなものが揃つてるから、旦那がま  
た世話になるかもしけん。恩を売つたと考えれば悪くないんじやな  
いか」

「それもそうですね。この恩を理由に何かできないですかね」

「文化祭でデートでもしてもらえばー？」

「で、でーと！？」

「それはいいな。あえて旦那と石川さんの休憩時間をずらすよう仕  
向けてやるう」

「ち、ちよつと待つてくださいー」

「三井が誰かと約束することもないだろうじー、誘えばホイホイつ  
いてくると思うよー」

「先輩はゴキブリですか！」

「オイオイ馬鹿言つちやあいかん。確かに何度殺されかけても死な  
なかつた生命力の強さは、近いものがあるかもしけんが」

「……それは私も悪いことをしたとは思つてますよ」

「安心しろ。旦那は少なくともあと二名から同様に殺されかけてる

「私の知らないところ」で、先輩はどれだけ凄惨な人生を送つてゐる  
ですか！」

「それでも生きてるつて素晴らしいことだよねー。後ろ向きな人生  
だけどー」

「石橋を叩いて渡つても、妨害が入つて悲劇にあつ不幸体質だから仕方ない」

「先輩が可哀想になつてきました」

「だからー、古木さんがたつぱり慰めてあげなよー？そしたら口口と逝くかもしれないよー？」

「死んだら意味ないじやないですか！」

「旦那と石川さん、また移動を始めたな。もしや見つからなかつたのか？」

「そうかもねー。そしたらわざわざの計画は中止とこい」とドードー

「……中止ですか」

「残念そうだな。やつぱりトーントしたかったのか

「そんなことないです！」

「そつー？それなら三井と石川さんを一緒に休憩時間にするけどー」「どうしてそつなるんですか！？」

「なら旦那とトーントするか？」

「一択の内容がひどいですー！」

「いえす、おあ、の一？」

「……」

「沈黙は肯定の証か

「……」

「早くしないと一人とも行つちゃうよー？」

「……」

「ああ答えはー！」

「……お願いします……」

「よしキタ！……」

「セッティングは僕たちに任せでー」

「……誘うのくらい自分でやつます……」

「積極的だな！いいぞいいぞー！」

「答えも出たところでー、追跡を続けよつかー」

「……なぜに本屋？」

「旦那が来たかったんだろ」

「そうでしょー」

「立ち読みしながら答えないでください。先輩が気付いたらどうするんですか」

「旦那が本屋で他の人に気を取られるなんてありえん」

「その通りー」

「……まさか」のまま流れ解散ですか

「そうなるな」

「お疲れー」

「……みんな何してるの？」

「……！石川先輩！」

「立ち読みだけど」

「右に同じー」

「何か言つた？」

「いや、何も」

「そう……。ねえ、今ひま？」

「暇といえば暇ですが」

「それなら近くの案内とかしてくれない？古木さんとの親睦も深めたいし」

「構いませんが」

「よかつた！なおくんに言つてもいいだけ連れてきて終わりにされちゃつたから」

「それでこんなところに来たんですか

「じゃあ、案内してくれる？」

「はい。まず安いカラオケの店ですが……」

「杉田一。石川さんと古木さん行つちやつたよー」

「別によくね」

「やうだねー。じつくり読書でもしようつかー」

## 第四十七話 反抗期

「ここは山本家。せつかくの休日、三井のクラスの担任である山本健三は特にすることもなく、だらだらと過ごしていた。

「父さん。休日くらいどこか出かけたらどうですか

「せつかくの休みだからこそ疲れを癒すのでしょうか」

「常日頃から疲れる行動も取っていないのに何を言つてるんですか」  
やれやれ。娘が反抗期のようです。口の悪い性格は誰から遺伝したんでしょうか。つい先日まではおしめも代え粉ミルクも作つてあげていたというのに、時が経つのは早いものです。

「まあ早い話、勉強の邪魔なので出でていってください」

反抗期です。親の威厳はどこへ行つたのでしょうか。

「自分で言つのもなんですが、静かにしてますよ? なんならテレビも消しますし」

何が悲しくて一日連続で外へ出なければいけないんでしょうか。  
私の家なのに。

「大してお酒に強くないのにちびちびと高い酒を飲まれていては気が散ります。いつの間にか寝てる時もありますし」

「自分の部屋で勉強すればいいじゃないですか」

「自分の部屋だと集中できないんです」

困った娘です。しかし受験生相手に向きになつても仕方ありません。大人の対応をしましょ。う。

「では書斎でぐつすり眠ることにしましょ」

目的もなく外に出ることほど、時間の無駄もありません。

「親が駄目だと反面教師となつていいですよね」

嫌みを言われたようですが気にしないようにしましょう。別に構いませんし。

「ところであなたはどこの高校を受験するつもりですか?」

「北高ですが」

「よつによつてうちの高校ですか。何故に？」

「市内一の進学校ですか？」

「ういえばそうでしたね。我が娘は勉強はそこそこできるのでした。

「将来を考えるなら私立でも構いませんよ？」

「勉強するのにわざわざ高いお金を払う必要もないでしょう」

「いい心がけです。

「ただでさえうちは無駄に高いお酒を好んで貰う、浪費癖のある大黒柱がいますから」

早く反抗期が終わってほしいものです。一々親に突つかかってこなくて済むよとそうなものですが。

「ところで、文化祭には見学に来るのですか？」

「応聞いておきましょ。」

「行きます。校内の見学にもなりますし、来年からは私も参加することになるでしょ。」

自信過剰ですね。ないよりあった方がいいですが、程度をわきまえるべきでしょう。

「父さんのクラスは何をやるんですか？」

「執事喫茶だそうです」

「我がクラスながら意味がわかりませんね。それがまたいいのですが。」

「気が向いたら行きます」

「そうですか」

「無理に勧誘する必要もありませんし。自主性を尊重しましょう。」

「では、本格的に勉強を始めるので出ていいってください」

「大変ですね。そんなあなたにこれを進呈しましょう」

「親からの気持ちのこもったプレゼントです。」

「元気ハツラツですか？」

「わざわざリボビンロをありがとうござります」

「礼には及びませんよ。まあ、飽きるまで寝るてしましょうか。」

## 第四十八話 悪質

開催まで一週間と迫った文化祭、それに続く体育祭。しかしこの休みの間に、思わぬアクシデントがあつたようだ。

「どうしたんだ清水！？松葉杖なんか突いて！？」

「……ラグビーの練習試合でな……」

話を聞くと、日曜日に行われた練習試合で相手に悪質なタックルをくらつたらしい。俺はラグビーに詳しくないのでよくわからないが、危険なタックルとそうでないタックルがあり、下手をすれば二度と競技ができなくなる怪我を負わせるものまであるそうだ。見ている分には面白いが、恐ろしいスポーツだ。俺には絶対にできん。

「それで、一週間後までに治るのか？」

「絶望的だ。……くそつ！あのバツク次の試合で合法的に圧し折つてやる！」

無理なのが……。しかし、怪我をしたばかりだといつて復讐心に燃えている清水はある意味凄い。誇り高き戦闘民族の王子かお前は。

「道具係のリーダーがこれだときついか……？看板とかの製作状況はどうなつてる？」

「未だ四割にも達していない。この一週間は修羅場になるな」

「執事係は手が空いてるからカバーに入るぞ」

完成できなかつたら洒落にならん。どれだけ費用がかかつたと思つてるんだ。何としても黒字を叩き出さんといかん。

「おお、助け合いの精神は立派ですね」

「……そういうなら健三さんも手伝ってくださいよ」

「嫌ですよ、面倒くさい」

教え子が怪我をしたのに変わらない態度、ご立派です。

「一人でも援軍が欲しいんです」

「」の老体を働かせるつもりですか？私は燃費が悪いんですよ  
老けて見えて四十代でしきつが。

「まだまだ若いですよ」

「褒めても働きませんよ」

駄目か。

「三井一。健二さんに求める方が酷だよ。自分たちでがんばるー  
それもそうだな。」

「よし、看板製作分担するぞ！」

一致団結して仕事に取り掛かろうとするクラスの面々。青春だ。  
「ところで旦那」

「いい気分に浸つてるとこりになんだ」

「清水が怪我したから、一人三脚は補欠と出ることになる」

そうだった。清水とペアを組んでたんだ。やる気こそなかつたが  
こうなると残念な気持ちにもなるな。せっかく練習したのに。

「それで？補欠は？」

「体育祭執行委員の石川さん」

タツミか。

「……なぜ女子？」

色々と問題があるだろ。

「補欠だからな。執行委員の旦那と石井と石川さんで適当に埋めて  
る」

勝手に何してくれてるんだこいつらは。

「まあ実際けが人なんて出ると思わんかったしな……石川さんなら  
いいだろ」

「よくないだろ」

清水と練習をやつた感じ、かなり体が密着する。やめておいた方  
が無難だろう。

「ふーん？まあ旦那がそういうならそれでもいいが。今は」  
今はつてなんだよ。

「もしかしたら清水の怪我も治るかもしれんし

「本人が無理だつて言つてたろ」

「病は氣から、氣合いを入れればなんとかなる」

「わけないだろ」

さすがの清水も、人体の限界を超えるような真似はしない……で  
頂きたい。

「ヤバイ……清水ならやりかねない氣がしてきた……」

「それが北高スキルなのだよ、旦那」

……常識を破るのはできる限りやめてほしい。

## 第四十九話 忙殺

「時間がたつのが遅く感じられますねえ、清水」

「そうですね、健三さん」

「しかしこんな時間を過ごすのは贅沢だと思いませんか？」

「俺は動かないでいるのに慣れてないので、無駄に感じるんですけど」

「ど

「そうですか、若いですねえ」

「若い？」

「年をとればわかりますよ。このように何をするわけでもない時間が一番有意義だということが」

「そうなんですか」

「ん？お茶菓子が切れてしまいましたね。緑茶も残り少ないです

…誰か、持ってきてください！」

「忙しいから勝手にやってください！」

今、うちのクラスは文化祭の準備で修羅場中。

「飾り付け用の備品は完成したか！？」

「まだ終わらん！あと三日はかかる！」

「飾り付ける時間がなくなるだろ！突貫作業にかれ！」

「サー！イエッサー！」

「テーブルの数は足りるか！？」

「クラスのを使えば余るくらいだ！問題ない！」

「テーブルクロスは！？」

「家から持つてこれる奴は何人いる！？」

「うちのを一枚持つて行くわ！」

「私の家にあるやつも使っていいよ！」

「他にはいないか！？ないなら購入することになつて費用がかさむ

からできれば阻止したい！

「仕方ない！俺んちのを使え！」

「助かる…ありがとう…」

「バナナはおやつに入れますか！？」

「糖度が高いからおやつにしとけ！」

「おーい、お茶」

「だから勝手に注いでください…」

「いちどら忙しくて目が回りそうだとここの、呑氣なものだ。仕事ができない状態の清水に生贊となつてもらつてるからいいものの、健三さんはクラスの空氣を読もつとしないのだろうか。

「旦那、それは違うな」

「何がだ」

「空氣を読んでるから」ああの態度なんだろう

「そうだよー」

石井も同調する。俺の周りは敵だらけ。

「張りつめた空氣を和らげるためにー、わざと道化を演じているんだと思うなー」

そこまで考えているんだろうか、あの人ガ。

「先生！それは試食のための試作品です！」

「なら食べてもいいんでしよう？」

「どれくらい置いておけるかの実験も兼ねてるんですけどああ！もう食べるし…」

「味は上々です。これでおつけでしよう」

「全然役に立たないです！どれくらい、ぱさついてるかとか…」

「わからないですよそんなの」

「だから食べないでほしかったのに…」

調理係の方が悲惨な様相を醸し出している。

「義人、大丈夫かあれ」

「だいじょばない」

「それでもお前は、健三さんが空氣を読んでいる」と、

「健三さんの思惑を俺ごときが理解するのは百年早かったよつだ」「だらうな。

「とりあえず……義人も一からやり直し?」

「……旦那、お互い頑張るぞ」

「絶対文化祭成功させようねー」

実際、間に合つのだらうか……それでも間に合わせないといけない。

「よつしゃあ！徹夜しても今日のノルマは達成させるべー！」

死ぬ氣でやればなんとかなるはず！

「ああ、学校には七時までしか残れませんよ～色々と規則があるので」

……食後の一服の最中、うれしくない情報ありがとひげこります、健三さん。そういうえば一応教師でしたね。……それでもノルマは達成させよつ。俺もみんなも死に物狂いでやればなんとかなるはず、……。

「ああー看板圧し折れた！？」

……公園がどこかで製作してたら、不審者通報とかされるのかなあ……。

## 第五十話 シフト

「ひやつほーい！」

「看板製作しゅーりょー！」

「自分で自分を褒めてあげたい！いやいつそみんな俺を褒めてくれ！…」

「お前はよくやつたよ！そして俺も！」

「大道具係、ヘルプの執事係ばんじゅーい！…」

「…「ばんじゅーい！…！」」

俺たちのテンションは最高潮。その理由は長きにわたった看板制作の完成だけにはあらず。

「朝日が昇ってきたゾエ！」

「きれいな朝日だ！そしてこれから看板を運ぶと考へると鬱になつて死にたくなるな！」

文化祭本番前日の朝。ここまで俺たちは一睡もせずに看板制作を続けていたのである。つまりは徹夜。地主の息子である義人のおかげで制作場所（余つてた空地）を確保できたため、ギリギリで間に合つた。明かりが足らず色塗りに失敗したり、塗料に使つたシンナーの臭いで通報されたりとさんざんだつたが、夜中にも関わらずどこからか見守つていた健三さんのフォローで事なきを得たりした。この出来事で健三さんの評価はウナギ登り、俺たちのやる気は急上昇。そして急ピッチで進められた制作は日の出とともに終わりを告げたのだった。今日は授業はなく、丸一日準備に使えるため、このまま飾り付けに移る。この場所は少しばかり北高から離れているため運ばなくてはならないのが厄介だが、この場所がなければ完成すら不可能だつたに違いない。グッジョブ義人、そしてみんな。

「凱旋帰校じやー！熟睡してゐる健三さんを胴上げしながら帰るぞー！」

「…「こつそ看板の上に乗せて王の帰還みたくしようぜー！」」

「いいなそれ！乗せろやあ！！」

気分が高揚しすぎていたせいだらう。せつかく完成した看板が壊れることも心配せず、寝たままの健三さんを担ぎあげた。……まあ、一度圧し折れた後にかなり補強したので大丈夫だらう、たぶん。

「……旦那、終わったか……」

「義人、お前も死にそうだな……」

看板を校内に運び入れると同時に倒れ込むようにして眠りだした制作班の面々（健三さんは途中で起きて「気分はいいですが高いとこ嫌いです。降ろしてください」と言って降り、登校途中の生徒から自転車を強奪、登校。せつかく上がった評価が暴落した）。俺も寝たいが、一応トップのためそれすらも許されない。義人、石井、清水も同様だ。

「さてー、明日の予定だけどー、この時間が仕事になるからー」

「おお、忙しい俺たちのかわりにシフトを作ってくれたのか。助かる

「それで眠くつて……俺眠くて倒れそうだ」「感謝する。お前たちを見なおした」

なんて友達思いな奴らだ。何の旨みもないのに、自主的に仕事を片付けてくれるなんて……。これで残る仕事は飾り付けのみ。

「気を緩めたら眠りそだだから、俺は早めに仕事に取り掛かる。あとは任せろ」

一人に助けられてばかりでは田代めが悪い。俺の全精力を注いでやる！

「罪悪感が生まれたよー」

「そうだな……」

二人でまた何か話しているが、構うまい。俺が指揮をとり、徹夜していないメンバーで仕事を終わらせてやる……！

## 第五十一話 ハイ

「では皆の衆！カウントダウンを始める！」

「――イエ　　イ！――！」

文化祭当日。北高の全生徒は体育館に集まり、生徒会主催のオープニング企画に参加していた。この学校の生徒はテンションがおかしそうると思うのだがどうだろ？

「俺の後に続いて叫べ！五！」

「――五！――！」

「四！」

「――四！――！」

「スリー――！」

なぜ急に英語！？

「――トウリ――！」

そしてなぜ対応できる！？未来予知でもできるのか！？つら―？

「――ゼロ！文化祭開幕じやコノヤロー！――！」

「――イエ　　イ！――！」

生徒会長のやつ端折りよつた！そしてそれに動ぜず盛り上がり上がる！？相も変わらずスペックが高いなあおい！

「オープニング企画その一！ライブ演奏イン体育馆――！」

かつこ悪！イン体育馆で！

「最初の演奏者は……サッティーアンドケンゾーのお二人だあ

――！」

いきなり大御所だと！？冒険しそぎだろ！？何やつてるの健二さん！？

「ドナドナードーナー、仔をのーセーて――」

テンション下がる歌を初っ端から歌わないでください――！

「盛り上がりがつてまいりましたあーー！」

どに盛り上がる要素が！？

卷之三

熱狂してゐるー? 所々から「健三さん瓶が渋いぜ!」(無茶苦茶い

「次の団体はビジュアル系バンド、Censusのメンバーだ！」  
おお、意味はわからんが格好いい名前だな。

「曲四せ、アンパンマンのマーチ！」

」の後も続々と企画が進められていった。放送部（全国大会入賞の常連）製作の「ードラマや吹奏楽部の演奏、漫才などバラエティに富んだ内容で、会場（体育館）はヒートアップ。なんだかんだで文化祭の出だしがこれ以上ないものになつた。

取り掛かりたまえ！」

卷之三

「これにて解散！」

それで、俺の活動はここからだ。出だしがなかつただけに、言い訳はない。

「アフターシア?」

「そんなくさい花咲かせたくねえよ！」

「執事喫茶ゝ KENZO-S BARゝ、仕事の最終確認を行う！接客係は執事係ができる限り単独で行うこと。忙しくてどうしても回らないようなら、メールを回せ。空いてる奴が駆け付けるから。ミスがあつたらすぐに謝る。お客様には誠心誠意をこめた対応をすること！最悪クレームが発生した時には、執事長で在らせられる三井を呼べ！全責任を被つてくれる」

嫌な役回りだ。しかし誰かがやらんといかんのだ。黙つて犠牲者になろう。ついてない。

「調理班はオーダーの順番を確實に。メニュー作成で混雑の仕方も変わつてくる……んだよな、杉田？」

「ああ、その辺はしつかり叩き込んだから気にしなくていい」それで調理班の連中も、この一週間忙しそうだつたのか。義人は料理のことには厳しいし、大変だつただろう。お疲れさん。……いや、忙しいのはこれからか。

「石井筆頭の宣伝係は、大道具係が作成したプチ看板を持って校内を練り歩いて来い。人を呼び込めるなら方法は問わん」

「本当にー？」

「……合法的なので頼む」

「了解ー」

どうして当然なことをわざわざ確認しているんだろうか。そして弱冠石井が残念そなのが気になる。何考えてたんだあいつは。「シフトは以前作成してもらつたのを最終とする。仕事開始の十分前には来て、着替えておくこと。時間を間違えるな。もしすっぽかしたりしたら、石井による世にも恐ろしい制裁が下されることとなる

る

「僕はすっぽかしてくれても構わないよー」

機嫌が直る石井。だから何を考へてるんだお前。何やらせるつも

りだ。しかしこの脅しは相当効いたようで、皆の表情が引き締まる。きつとこれで、誰も時間を間違えることはないだろう。結果オーライ。

「よし、これで事前確認は終了だ。健闘を祈る

開店まであと少しと迫り、執事係のメンバーは緊張をほぐすために談笑していた。

「なおくんと私って休憩時間バラバラだね」

「そうだな。俺がいない時の仕事は任せたぞ」

「わかった。でも残念だなあ。なおくんと文化祭回つたりしたかったのに」

「いや、恥ずかしいから」

文化祭で一人でいるところを知り合いにでも見られてみる。どんな根も葉もないわざが立つことやら。そんなことになつたら俺は不登校にならないでいられる自信がない。

「旦那、そんなこと言うなよ」

「そうだよー。別に噂なんて立たないってー」

「うわー、こいつらが言つても全く説得力ねえー。大体執事係に交じつて来るなよ。一人とも係のトップなのに。」

「でも旦那は一人で回るのか?」

「さみしくないー?」

大きなお世話だ。

「まあ司書室でゆつくつさせてもらひつかな」

「ダメだよー、そんなのー」

「そうそう。俺たちに任せておけ。いい」としてやるから

「いいこと?」

「ああ、休憩を楽しみにしどけ」

開始前に不安を増やさないでほしいものだ。



## 第五十一話 確認（後書き）

以前書いた美容師ですが、マイクとかする美容師さんもいるそうですが（読者さんがメッセージで教えてくれました）。……偶然つてあります。

五万アクセス突破しました。読んでくださいありがとうございました。

開店早々忽ち満員 とはいかなかつたものの、執事喫茶はそこのこの入客数を確保していた。初めは慣れないだろうと多めに動員しておいたこともあり、今のところ大きなトラブルは発生していない。メニューを間違えたり、釣銭勘定を間違えたりと細かなミスはあるものの、それでもフォローに回っている俺を含めた数名がミスを指摘することで悲劇までには至っていない。ちなみに入客の八割が女子、一割がその彼氏らしき人物、残りの一割はよくわからん男子となっている。話したこともない女子に執事的サービス（笑顔、丁寧な物腰、要求の対応）をするのは骨が折れる……といつより心労がきつい。

「ふう……、入客が途切れないな、原君」

空いた食器を片づけながら、小声で話す俺。不真面目だらうか。

「いいことだ。それでもまだ満員でないのが恐ろしいな」

「そうだな、昼飯時になつたら嫌でも増えるだらうし……」

「その前に休憩行つておきな、三井。もうすぐ時間だろ？」

確かに、いつの間にか休憩時間まであと少しと迫つていた。集中していたせいか時間がたつのが早い。

「あまり疲れてないから、残つてもいいぞ？」

特にやることも、回ることももないし。

「後で疲労が来るかもしれん。休めるときに休んどけ」

それもそうか。実際、こんな仕事やつたことがないから、どうなるか見当もつかんし。

「そういう原君はまだ休憩じゃないのか？」

「ああ。俺は昼の忙しい時休ませてもらえるらしい」

うわ、ズルイ。不公平だ。俺は忙しくなりそうな時間帯（最初、昼飯時、三時頃）全部入つてゐるのに。

「シフト作つたのは俺じゃないし」

「作つてもらつて贅沢は言えんか。じゃあもう少ししたら休憩入るわ」

もう少し頑張るか。ん？客か？

「あ、いらっしゃいませお嬢様……ってなんだ、保護者か？」

「先輩、私も今はお客様ですよ」

まだ営業中だった。営業モードに入らんと。

「いらっしゃいませお嬢様、御注文を伺つてもよろしいですか？」

今ではこんな言葉と笑顔を躊躇いもなく提供できる。慣れつて恐ろしい。

「…………」

「どうかなさいましたか？」

「……はつ！何でもないです！」

俺の顔を見てフリーズしたかと思つたら、急に大声で否定しようとした。何なんだこいつは。

「それで、ご注文は？」

「……先輩を一人、持ち帰りでお願いします」

「お帰りはあちらの扉となつております」

「いつもは滅多に見せないさわやかな笑顔でそんなこと言わないでください！」

先に営業妨害をしたのは保護者そつちだと思つんだが、どうなのその辺。

「このクレープと紅茶のセットをください」

「かしこまりました。クレープ、紅茶セット一つ！」

「クレープ、紅茶ですね、かしこまりました！」

バックに注文を伝え、手が空いた。手持無沙汰な様子が伝わったのか、保護者が話しかけてきた。

「先輩、ちょっとといいでですか」

「なんでしょうかお嬢様？」

「暇ですか？」

「暇ではありませんが」

少なくとも今は仕事中だ。

「え？ もうすぐ休憩ですよね？」

「なぜ知ってる」

「それは……杉田先輩と石井先輩がそんなことを言つてました」

「個人情報をなんだと思つてるんだあいつら。

「それがどうかなさいましたか？」

「それですね、あの……」

「保護者が言つよどむ。どうしたのか。

「あの……」

「うん？ あ。

「一緒に文化祭回りませんか！？……つていなー！？」

「お待たせしました。クレープと紅茶のセットとなります。それで、先ほどの御用件はなんですか？」

危なかつた。商品が完成しているのに提供しないで、冷ましてしまつところだつた。気付いてよかつたよ。

「…………」

「あれ、保護者さん？ どうしてそんなに怒つているのかな？ 顔が怖いよ？」

黒いオーラが立ち上つてゐるよつとすら見える。怖くて逃げ出したいのに立場上逃げ出せない。拷問だ。

「……先輩、休憩に入つたら私のところまで来てください」

「はい」

即答してしまつた。このオーラにだれが逆らえよつか。俺まだ死にたくないし。

「……それならいいです」

「……ごゆつくりどうぞ」

「……おかしいな。……喫茶店つてこんなに殺伐とした場所だっけ？」

休憩時間だとこいつのに後輩に拉致される俺。我ながらこれまでの人生がとても心配である。

「……それで、俺は何をすればいいんだ?」

恐る恐る保護者に聞いてみる。先ほどの剣幕を田の当たりにしては、俺には抵抗ができない。年下相手にこの体たらぐ。重ね重ね思うが、これから的人生がとても心配である。

「そんなにおつかなびっくり聞かないで下をこよ。もう怒つてませんから」

「本當か?」

それにしては表情が強張つていて見えるが。

「……緊張してこるんですね。……これくらい察して貰ださい……」

「何か言つたか?」

「いえ、何も」

それならいいけど。

「それならもう一度聞こつ。要求は何だ」

理由はともかく不快にさせてしまつたんだ。何かしら埋め合わせはしてやるつ。

「……そうですね……一緒に歩いてるだけでもいいんですけど……」

「もう少し大きな声で頼む。聞こえん」

「独り言です。気にしないでください。デリカシーがないですよ」  
それならこいつらを窺いながらつぶやくのはやめてほしい。気になら。

「一緒に適当に回つて、奢つてもいいつてことでいいです

「了解」

それくらいが妥当な線だな。財布の中身が心許無いが。

「それでは……えい」

「腕を組むな!…?恥ずかしい…」

「一緒に回るつて言つたぢやないですか？」

「くつついて回る意味は！？」

「恥じらう先輩を見て楽しむためです」

「趣味悪いぞ！」

今日はなんだかんだ言つて離れようとしないのだった。

……俺、羞恥心で死ぬかもしれない。

「あそここの店はなんですか？」

「フランクフルトだな。チーズを付けただけで200円はぼつたりすぎだろ」

「そうですね。流石お祭り騒ぎ。こんな商法に騙される人がいるんですね」

「そうだよな。いつもなら絶対に買わんだろうに」

「一本ください」

「でも買つのかよ！？」

「早く先輩、代金を払つてくれさい」

「人の財布だと思って！」

言つてることとやつてることが違うではないか！

「あそここの出し物はなんですか？」

「お化け屋敷だな」

「……行きましょう」

「目が光つたように見えたのは、俺の目の錯覚か？」  
保護者が獲物を狙う肉食獣に見える。

「入りましょう！」

「だから引っ張るなつて！」

「きやーこわーい」

「棒読み！？抱きつくな恥ずかしい！」「真つ暗なんだから誰も見てませんつて」「理性残つてゐるじやねえか！」「

「ここはなんじょう？」

「アーケードみたいだな。景品も出るみたいだ」「あれいいですね……取つてください」

「彦にやんぬいぐるみだと！？むしろ俺が欲しいわ！」「

「ここの輪投げが二回入れば手に入ります」

「挑戦権は？」

「三回です」

「ハーダル高っ！」

景品渡すつもりないだろ！

「楽しかつたですねー」

「休憩にならんかった……」「

むしろ余計に疲れた。

「楽しくなかつたんですか？」

「いや、楽しくはあつたよ。お前といふと退屈せんで済む」財布が軽くはなつたが。

「……それは光栄です」

保護者が殊勝な態度だ。珍しい。

「あのですね、もし先輩が良ければ……」「

「三井！ここにいたか！」「

「どうした？」

クラスメイトの大林が走つてきた。かなり慌てていいよつだ。

「クレームが発生して」

「義人がいるはずだろ」

「奴も一応代表だし、対応は俺よりも適役だろつ。

「それが、杉田が使い物にならなくなつて」

「はあ？」

「とにかく来てくれ！」

そう言って俺を引きずり出した。流石剣道部、力が強い。

「悪いな、保護者。また今度な」

「いいですよ別に！」

なぜか怒ってる。今日は感情が「口口口口変わるな、あいつ。

……

今日も、か。

「しかし義人が使い物にならんつてのはどういう意味だ？」

「見ればわかるから……早く！」

全く義人も肝心なところで役に立たない。俺がバシッとクレーム対応の手本を見せてやろつ。

「ようやく着いたな。これだから広い校舎は嫌なんだ」

全国公立高校で一番広い校舎は弊害にしかならない気がする。

「文化祭だからってこんな安っぽいクリームを使うのはおかしい！」  
声が聞こえてきた。まあ確かに安いのを使っているけど、そこまで味は落ちないと思うんだが。まあ俺は味オーナーだから、レベルの高い人の感性はわからんが。

「あの一人だ。なんとかしてくれ！」

「よしわかつ……」

.....。

ダツ。

「おい三井！？無言で逃げるとはどうこいつア見だ！？」

「離して！帰るー！俺帰るー！」

「どうした三井！？理性が吹き飛んで……これじゃ杉田とほとんど同じじゃないか！」

そりやあそだ！義人も使い物にならなくなるわけだ！だつてあの一人！

「どうして姉ちゃんがいるんだよ！？」

大林に捕縛された俺は、義人ともども別の空いている教室で、姉ちゃんズ（二人とも大学一年生）の前に出されていた。何これ？人

身御供？

「ん？直樹じゃん。あんた今まで何してたの」

「……休憩中。姉ちゃんこそ何やってたんだよ。夏休み（大学の夏休みは八～九月）なのにつちに帰つてこなくて、ラッキー……じゃなくて心労がたまらずに済んだのに」

「ほう、それが本音か」

しまつた！動搖して本音が出てしまつた！

「あんた帰つたら覚悟しどきな」

覚悟なんて怖くてできません。

「それより姉ちゃんはそんな怒つてないよな？やっぱあっちか」

「うむ。私も味にはうるさくないし」

怒つているのは義人姉（柔道黒帯）だけのようだ。……ほんとよかつた……！

「旦那の薄情者！助けてくれよう！」

「あんたが調理班のトップらしいじゃないか。人に頼るな俺には手のつけようがございません。」

「私の味覚が壊れたらどうしてくれんだ、ああ？」

杉田家は母親が家庭科の先生のため、幼い頃から家事を叩きこまれ、旨いものを食べてきた。そのため味覚が発達し、味にうるさくなっているらしい。……ただ、義人の姉ちゃんは学ぶ気がなかつたので、義人にしわ寄せがいつたそうだ。味にはうるさいが、家事はできるのにやる意思がない、重量級で重度のオタクの長女。それが杉田家の最終兵器、リサルウェポン、義人姉なのである！

「ああ、そうだ。私たち北海道に行つてきたから。これお土産」

それで夏休みなのに帰つてこなかつたのか。しかしこの熊の木彫り人形、用途は何なんだ。無駄に思える。

「武者修行か？熊と戦つてきたとか」

「お前を狩つてやろうか」

「……すいません……調子こきました」

とりあえずその握つた拳は開いてください。俺に太刀打ちなんて

でそれまたなん。

「まあ綾乃（義人姉）、それくらいにしどけ。文化祭の出し物でそこまでの味を求めるのは酷だと思うぞ？」

「しかしこの愚弟の不始末だし、私が落とし前をつけんと」

「私にとつてはそこそこ美味しかったし、値段相応かそれ以上の価値はあつたんじゃないか？義人君泣いてるじゃない」

締めあげられて数分経つし、幼い頃から恐怖のみを植え付けられていたのだから仕方あるまい。よかつた……つちの姉ちゃんは怒つてなくてよかつた……！」

「仕方ない。弘美（俺の姉）がそこまで言つなら許してやるが。……義人、次はないから覚悟しどきな」

脅されてさらに怯える義人。同情くらいしかできないが、頑張れ。俺も頑張るから。

「それで、二人はどうしてここに？」

「O.Bが文化祭を訪れたらいかんのか」

なぜそんな喧嘩腰に！？温厚にいきましょいよ。

「うちのクラスに来たのは？」

「綾乃が執事喫茶に興味があつてね。サービスはどうだつた？」「まあ及第点だな」

「……それはよかつたです」

「これでサービスも不満だつたら、さらに魔人化していたのか。……助かつた。

「そういえば辰美ちゃんに会つたよ。直樹と同じクラスなんだつて？運命つてのはあるもんだね」

「そんな大げさな。偶然に偶然が重なつただけだろ」

「いやいや、いい子に育つてたじやない。中身も外見も……ボリューム感たつぱりで」

「ここにエロオヤジがいるんだが、通報したら警察は駆けつけてく

れるだろ？……できれば武術有段者の。

「しかしあれだね。あんな格好させて……直樹の趣味か？」

「なぜにそうなる！？」

「クラスの出し物なのに、責任はすべて俺に転嫁されるのか！？」

「そうだね、直樹はどちらかといえばセーラー服が好みだもんね」

「なぜ！？根も葉もないデマを流すな！」

「……はっ

「鼻で笑われた！？」

まさか奴は……俺の秘密を握っているのか！？

「まあこの話は、後ほどじでゆつくりとじょうじやないか……ふ

」  
堪え切れなくて噴き出した！？何を握られたんだ！？あれか！？

それともあっちか！？

「ああ、健二さんになつたらよろしく伝えといつて。まともに仕事しろとも」

「伝えはするが、そりや無理だ」

あの健二さんがまともになつたら天地が崩壊する。それくらいありえん。

「……旦那

「どうした、義人？」

「お互い頑張ろ？な……」

「……ああ

今日帰つたらあがいるわけだよな……。早く大学は後期日程を始めろ。頼むから。

「よくもまあこんなに……」

現在は昼飯時。そのため、予想通り数多くの客が来店している。中に入ることができる人数は限られているため、今では外で並んで待っている人までいる始末だ。商品の味も、義人の姉ちゃんに酷評された以外では全く文句を言われていない。むしろ「おいしかったです！」とか「じちそうさま。おいしかったよ」などとお褒めの言葉を頂くくらい。あの料理やお菓子がとても美味しいと思った俺の舌も、異常ではなかつたようでなによりだ。あの義人が作ったのだから俺としては当然なのだが、義人の姉ちゃんは義人以上に味覚が発達しているらしい。海原雄山かあの人は、至高のメニューでも食べていてください。

「いやー、混んでますねえ」

そう思うならいい席を陣取つてないで手伝うなりなんなりしてください。いや、健三さん相手に無理なお願いだとはわかっているんだけれども。それでも愚痴らずにはいられない。

「さあ、皆さん働くのです。この私のために」

少なくともあなたのためではありません。じいて言つながら自己満足のためですから。

「……あー、誰も構つてくれないって寂しいですね」

みんな健三さんに構つてている余裕がないんです。察してください。

「あ、一句思いつきました」

……フリーダムですね。どういう思考回路ですか。

「安上がり 金のかわりに 手間かけて 値段つり上げ 寄騙される」

「健三さんー営業妨害になりますからやめてくださいー！」

事実であるのがまた嫌らしい。反論できないし。これは営業努力だよ？悪いことしてない、当然のことだよ？でも口に出したらいか

ん」とつてあるのです。

「調子に乗りた」「じめりた」

意味がわからないし反省の気持ちが見えない！

「お客様！安上がりと言つても、そこそこ品質のものを使用しております！ですから安心なさつてください！」

明らかに客が不審の田だよ。疑つてるよ。無用なトラブルを引き起しやないでほしい。

「……健三さんも少しほ皿重してください……」

「何度飲んでもこの紅茶は美味しいですねえ」

反省してねえ！

「田那、健三さんに構うな。手と足が止まつてゐるや」

「……悪い」

突つ込む前に仕事を片付けないと。忙しくて田が回つやうなのに、健三さんがいるだけで場の空気が和む。……こい点でも悪い点でもあるがな。

「しかし、この部屋暑いですねえ。扇風機ありませんか扇風機」

あつたら厨房に真っ先に入れます。健三さん専用機になどさせません。

せん。

「生徒がもつと教師を敬つてくれないものですかねえ」

そうしてほしいうなり、まず健三さんが態度を改めてください。

「交代時間だよー。休憩の人は仕事を引き継いでから休憩に入つてねー」

石井が交代時間をわざわざ告げに来た。……嫌がらせか？俺は続けて接客し続けねばならんといつのに。

「なおくん、まだ休憩じゃないの？」

休憩に入らない俺を疑問に思ったのか、率直に尋ねてきた。新たに加わった執事の中にはタツミもいたようだ。

「俺は名ばかりの最高職だからな。サービス残業が多いんだよ」

「残業とは違うでしょ」

素早く返してくれるな。まあタダ働きさせられるのは一緒だ。しかしたる違いはない。

「仕事頑張ろうね」

「言つてるそばから客が来てるんだ。さつさと対応するぞ」

「あつー！」「めん！」

俺に謝られても困る。謝るくらいなら働けばいいじゃない。

「いらっしゃいませ、お嬢様、田那様」

「この仕事にも大分慣れてきて、ピーク時の混雑も緩和されてきたからか、俺たちには余裕が生まれていた。やればできる子なのだな、俺たちは。」

「ご注文はお決まりですか？」

「あ、あの、一緒に写真撮つてくれませんか？」

空いている執事がいると、こんな注文も出てくるほどだ。忙しいと客も遠慮してくれるが、余裕があるように見えるとダメもとで言ってくるのだろう。物珍しさで記念に残したい気持ちはよくわかる。「かしこまりました。その携帯でよろしいですか？」

「はい！」

許可されるとは思つていなかつたのか、若干驚きつつ携帯を渡してきた。余裕があれば無料でサービスをする。なんて良心的な店なのだろうかと自画自賛してみる。

「じゃあ夏田。俺が写真を撮るから一緒に写つてあげてくれ

「了解」

俺は[写りたくない]ので、基本このへ[写]真撮られる様くには夏田が就任している。適材適所はいいことだ。

「はい並んでー。はいチーズ」

「仕事完了」。喜んでもらえたようだしなによりだ。いい思い出になるだろ。

「ところで携帯のアドレス交換しない？」

……夏田、毎回毎回女の子にがつつきすぎだ。いい思い出が台無しになるから。店の評判が悪くなるから。

「なぜ写真係が俺じゃないんだー！」

駄々をこねている、怪我人清水は無視。理由は顔（夏田はイケメン、清水は無骨）と体型（夏田はスラッシュとしてる。清水は筋骨隆々、執事に見えない。威圧感あり）とはつきりしているが言わないで聞いてやろう。事実は残酷で人を傷つけるからな。

「……そうか、男子の連中が俺に人気が出るのを恐れているんだな

……それなら仕方がない」

……ポジティブ思考は最強の武器になのだと俺は思つ。

「なおくん、お客さんから苦情が出てるんだけ？」

「何かこっちに不手際でもあつたか？」

「まずいようならクレームの対応、俺がでないといかんかな。

「つづん、そうじやなくて……あそこに座つてる男のお客さんのことなんだけじね」

そう言つてタシミが促した先には、この店には不釣り合いな男が座つていた。

「あの客か。わざわざからずつとこに思えるんだが……『氣のせいか？』

ただでさえ男性の数が少ないのに、ずっとといつでは目立つて当然だ。同席している人もおらず、テーブルの上には空になつたカップが、テーブルの下にはその男のものだと思われるカバンが置いてある。何をするわけでもなく、ただ周りを見渡すばかりで得体が知れない。

「氣のせいじやないよ。私たちもそう言つてるもん」

「一時間近くいるよな……退席するよつ頼んではないのか？」

「夏目君がが頼んではみたんだけじ、「客に対する態度か？」って凄まれちゃつて……」

肝心な時に役に立たんな。

「それじゃ、苦情の方は？」

「その人が女子を観察してるみたいで……にやにやしてて氣味が悪いって言われて」

「そりやあまた不気味なことだ。営業妨害にあたるのか？」

「よしわかつた。俺が行つて帰つてもうつわ」

「いいよ、私が行くから。なおくんのところにはその確認に来ただけ」

「大丈夫か？」

「うん。女子相手の方が相手も対応が優しいでしょ  
それもそうか。何が目的かはわからんが、女子にキレる男子もい  
ないだろ。」

「じゃあ頼んだ。でも無理はするなよ?」

「わかつてるつて」

タツミならなんとかなるだろ。夏田より頼りになるし。

俺が雑用をしている間に、タツミが交渉を始めたようだ。任せた  
とはいって、相手が素直に従うとは限らない。気になつてつい目線が  
そちらを向いてしまう。

「お客様、そろそろ退席していただきてもよろしいでしょうか?」

「ああん? なんで俺が帰らねーといけねーんだよ? 俺は客だぞ?」

「ですが、限度というものがあります……限度を越されると、  
私たちの方も対処をしなければなりませんので」

「高飛車な店だな。客がゆっくり疲れも癒すことも許されねーのか  
よ」

「御注文の品を飲み終えてから一時間も経つのですが」

「つむせーな、黙れよ」

「他のお客さまからも来店しますので、席を退いていただけれ  
ン」

「つむせーつむせーんだろー」

「うるさいよ」と

その男はタツミを突き飛ばした。

「大丈夫か！？」

突き飛ばされたタツミを見て、何事かと店内が静まり返る。

「平気、ちょっとぶつけただけだから……」

急いで駆け付けた俺を、タツミはそう言つてなだめた。理不尽に怪我をさせられたこの状況でも、人の心配か？人が好すぎる……そう思つたのも束の間。突き飛ばした男は、悪いとも思つていらない様子でこう続けた。

「あーあー、何だよこの店は！最低だな！」

「…………」

「なおくん？」

「……石井、頼む

「りょうかーい」

石井はそう言つて姿を消した。俺は俺の仕事に取り掛かる。

「……お客様、よろしいでしょつか」

「あん？ 何がだよ」

「こちらが何か不手際をいたしましたか」

「客に対しても帰れつづてんだからな」

「私どもの見解では、飲み終わつてから一人で一時間も席を占領されているのは、想定の範囲外でして」

「はあ？」

「まさかこのお祭り騒ぎの文化祭で、休憩、食事以外の目的で来店されるお客様がいるなど思いもしなかったものでね」

「何が言つてーんだ？」

「女性のお客さま方から苦情が出てるんですよ、あなたのことで。何でもじろじろ見られて気味が悪いとか」

「……自意識過剰なんだろ、そいつが」

「一人ならそうかもしれません、そう何人も同じ苦情が出ると、

あなたの方を疑うのが筋でしょう？

「……客を疑うのか、この店は」

「お客様の行動によりますね。見たところ同年代のようですが、そのポケットに見えるタバコはなんですか？ 怪しまれたいと思つているんじゃないかと逆に疑問が生まれましたよ」

「関係ねーだろ！」

「そうですね。あなたが肺ガンで死のうと私には何の関わりもありません。この年でそんなもの吸わない限り気分が紛わせないかと思うと、同情したくなりますよ」

「喧嘩売つてんのか！？」

「同情しているのにそう思われたなら心外ですね。私たちは煙草に頼らなくとも楽しい生活が送れるんですから、あなたに喧嘩を売る必要なんてないんですよ。そんなこともわからないんですか？ それですね」

「あ？」

「男子よりも力の劣る女子に暴力を奮つておいて、謝りもしない。その時点で私はあなたをその程度のモノとしか扱つていませんから」「ふざけんな！」

我慢がきかなくなつたのか、その男は俺の顔を殴つてきた。静まり返つていた教室から、女子生徒の悲鳴が上がつた。口の中を切つたのか、血の味が広がる。……だがこれで、条件は整つた。

「……殴りましたね？」

「それがどうかしたのか？」

「石井」

「ばつちり録画したよー」

「はあ！？」

石井に頼んだのは決定的な場面の録画。これで後はビリでもなる。

「この録画を出すべきといひ出したらどうなるでしょう？ 営業妨害まがいのこととした挙句、説得する店員に暴力を振るう男。どう

この高校かは知りませんが停学くらいになつても不思議じゃありませんね」「そのビデオを寄こしゃがれ！」  
「まずは話し合いです。」こちらの部屋に来ていただけますか  
「……くそが」「承諾と判断します。ついてきてください」「舌打ちをしつつも、後ろに従つてゐるようだ。……これで一段落か。

## 第六十一話 救援

部屋を移る前に、言つておかないといけない」とを忘れていた。

男は石井と清水に任せ、一旦店内に戻る。

「タツミ、怪我は大丈夫だな？」

「……あ、うん」

「それなら後は任せた。こんな状況を纏めるのは大変だろうが、頼んだぞ」

騒ぎの余韻で、店内はざわついている。このままでは売り上げにも響くし、何より客として来ている人に失礼だ。

「……うん」

「どうした？ ボケつとして……やつぱり具合が悪くなつたんじゃないか？」

「いやいや！ 大丈夫大丈夫！」

困つたな。頼りのタツミがこの調子だと、人数も減るわけだしきついか……？

「お困りのようですね！」

「困つたな……夏目は意外と役立たずと判明したわけだし……」

「堂々と無視しないでください！ 聞こえているんでしょ！ ？」

「……再びの御来店、ありがとうございます！」

「用件が違うこと、わかつて言つてますよねー？」

「……一応聞いてやろう。何のためだ？」

「私がかわりにメイドをやつてあげましょー！」

「はいはい。

「ここの執事喫茶だから。メイドはここの範囲外だから

「なら代わりに執事をやつて差し上げましょー！」

「……お前に出来るのか？」

「私にできないことがあるとでも？」

何その自信。

「……やつたこともないのになぜそういう言える」

「先輩」ときにできて、わたしにできないわけがありません」

「ああそりですか。

「要求は何だ」

「承諾する、ところどりですか」

「ああ」

他に手段もない。この時間も勿体ない。

「先輩に恩を売る……これだけでも大きなメリットです」

「しわ寄せは俺に来るわけか。

「……つくづくついてない……」

「何を言つてるんですか。こんな幸運ありませんよ」

「つむさいわ。

「ただ、執事服をどうするかだな……予備なんてないぞ？」

「こんな事態想定していないし。

「！いい考えがあります」

「期待はしないが言つてみる」

「せ、先輩の服を……」

「却下だ」

「まだ全部言つてませんよ！？」

「なぜ俺が貸さんといかんのだ」

「あ、おしいけど違います」

「は？」

「先輩の服をはぎ取つて私が着るんです」

「俺が考へてたのよりたちが悪いわ！却下だ却下！」

「でも他に方法があるんですか？」

「……上だけな。汚すなよ？」

「いいんですか！？」

「早くしろ仕事はしつかりやれ応援が来たら帰つてもいい何せつて  
んだお前！」

「すーはーすーはー」

「人の上着の臭いをかぐな！」

「……先輩の臭いがします……それを着るつてことは……先輩に抱かれているも同然……」

「何言つてんだお前は！？」

アホなことやってないで、やるなら早くやってくれ！

## 第六十一話 罪

「調子はどうですか?」

「……いいわけねーだろ、早く帰せよ」

まあ、暴力を振るつたことで部屋に連れてこられたんだから当然か。しかしこの男、まだ反省していないのか。

「ずっとこんな調子なんだよー。まあ、もつとも三井が来るまで待つてたつてのもあるけどー」

「?」

「さてとー、なら本題に入るうつかー」

「本題だと?」

なぜか焦り始める男。他に何かやましいことでもあるのだろうか。石井が何のことを言つているのかわからない。

「そのかばんの中身、見せてもらつてもいいかなー?」

男の様子が目に見えて拳動不審になつてきた。状況がつかめている俺にとつては謎が多くすぎる。

「帰らせてもらひー!」

「往生際が悪いよー。気持ちはわかるけどねー、なにせ」

一呼吸おいて、石井が男にとつては決定的な、俺にとつては衝撃的な一言を放つた。

「盗撮なんて発覚したらー、人生終わつたよつなものだもんねー」

「なん……だつて……?」

正直耳を疑つた。そんな馬鹿げたことをやる人間が、實際にいるとは思わなかつたからだ。

「……冗談、だよな、石井」

「そう思つならー、その黙りこくつてるお客様のかばんの中ー、確

認しなよー

「……よろしいですか？」

俯き、何も話さなくなつた男からかばんを取ろうとした途端、男は立ち上がり勢いよく俺を突き飛ばした。

「つ……！やばい！逃げられる！」

突然の出来事だったため、男を捕らえられる人がいない。石井は座つており、清水は怪我をしてるので咄嗟には動けない。しかし石井の言つことが事実なら、男を逃がすわけには

ダメ。

そう考えたところで、扉からの脱出を図つた男は立つていた人によつて阻まれた。

「どけよー！」

「……この状況で退くと思つのですか？ そつ思つのだとしたら脳外科に行くべきですね」

我らが担任、健三せんじよつて。

「邪魔なんだよ！」  
「……うちのクラスの者に手をあげておいて、言いたいことはそれだけですか？」

健三さんの様子がいつもとは違う。颶々として受け流す、つかみどこひのない健三さんではない。単純に怒つているとしか思えない、無表情の健三さんだ。

「三井、そこに落ちているかばんを広げなさい」

見ると、ぶつかつた衝撃からか男の手を離れたかばんが落ちていた。急いで拾い、中を見る。

「うわ、マジでか……」

そこには、隠して何かを撮ろうとする、悪意を持って動いている  
としか思えないビデオカメラがあった。

「確定ですね」

その言葉に、男も俺も立ち竦むだけだった。

「健三さんー、こいつどうするんですかー？警察に通報しますかー？」

……こつなつた以上、通報しないわけにはいかんだから。しかし健三さんの答えは予想外のものだつた。

「いや、それはやめておきましょー」

「どうしてですかー？犯罪ですよー！？庇いだてをするのなんておかしいですよー！」

何を言つているんだ健三さんは。どうかしているとしか思えない。「三井、違いますよ。私が言つているのはですね」

「なんだつて言つんですー！」

「こまま通報したら、文化祭は台無しになりますよ？それでもいいんですか？」

「……！」

「怒りと正義感はこもつともです。しかしそれと引き換えにこの文化祭は終わりを告げますよ？」

「だからといって……」

「もちろんこの男は警察へ突き出します。ただし、私の教え子に警察関係者がいますから、それを通して内密に処理させます」

「……盗撮された女子は……」

うちの店員はスース姿のため、男が机の下に設置したローラングルからの盗撮画像には関係ないだろー。問題は制服姿で来た他のクラス及び他校の生徒だ。

「それは私が探し出します」

「どうやってですかー？」

混雑していなかつたとはい、それでもかなりの女子生徒が来店していた。男は一時間以上席を動いていないため、十人二十人ではすまない数のはずだ。

「田と頭を使うんですよ」

「……？」

「わかりませんか？簡単なことです」

「俺にはまだわからない。田？頭？」

「私が覚えていませんから問題ないといふことです」

「そんなわけないでしょ！？不可能です！」

「疑いますか？」

「いつもの行動で信じるという方が無理です」

「……三井の評価を改める必要がありますね」

「しまった、つい本音が。」

「冗談ではなく本気ですよ。うちの生徒で見覚えがない人は来店しませんでしたし、他校の生徒は一度見れば覚えます」

「……そんなことが……」

「できますよ。思い出すのが面倒ではありますが……警察から下手な事情聴取受けるよりマシでしょ！うから」

「……そういうえば誰かから聞いたことがある。」

健二さんは図るのとできない天才なのだと。

「……任せてもいいんですね？」

「思い出すところまでは任せましょう」

「……はい？」

「だからそれを調べ、盗撮されたことに対する謝罪に行くのはもち

ろん三井です」

「……面倒な」とは俺任せですか？」

「はい」

清々しい即答をありがとうございます。

「むしろこれだけ手伝ってあげるのですから、感謝はこぐらしくてく

れても構いませんよ？」

「高騰状態にあつた、健二=わたくしの尊敬と感謝の気持ちが急激に萎むのはどうしてだらう。」

「さて、その男は文化祭終了まで軟禁しておきますか」

「くそが！離せ！」

「おやおや、罪状を増やしたいんですか？おとなしくした方が身のためですよ？」

教師とは思えない発言です。

「後は頼みましたよ。やる」とせめぎつむおもすので。勿論余分なことはしませんけど」

……尊敬していいんだか悪いんだか。

今行動を起こしても、騒ぎが全校に広がるだけでメリットが少ない……そう判断したため、盗撮騒ぎの処分と謝罪は文化祭が終了してからにすることとなつた。……おそらく俺は今日、眠る暇なく働くことになるだろつ。……名ばかりの管理職つて大変なんだな。全国の中間管理職の皆さん、頑張つてください。

「三井一、現実逃避はそれくらいにして、ヘルプに入つてあげたらー？」

「そうだつた。保護者に手伝つてもうつくらいに人材が不足してたんだ。俺が早く手伝わんでどうする。

「早速入る。保護者には感謝せんといかんな……」

「そう呟きながら店内へと戻ると、なぜか執事があふれかえつていた。

「先輩、私いらない子ですか？なんかどんどん集まつてきたんですけど……」

「この文化祭を成功させたかったのは俺だけじゃなかつたんだな……」

…

シフトの時間から外れ、本来は自由時間だといつのにヘルプに来てくれたクラスメイト達。普通に感動できる光景だ。

「それじゃ、悪かつたな。手伝わせて」

「いえいえ。私が好きでやつたことですから。先輩を自由にできる権利で十分におつりが来ますよ」

「報酬高い！俺の人権は三十分にも満たないバイトで崩壊するレベルなのか」

「ふん、何を思いあがつていたんですか。その程度ですよ」

「せめてオブラーートに包むとかしてくれ！」

「先輩の人権なんて、駅前で配られるティッシュ程度ですよ」

「むしろ下がつてる！？オブラーートに包んでもないし！」

また一段と俺の価値が下がっているようだ。デフレスパイナル到来？

「まあいい、とりあえず上着返してくれ」

「嫌です」

即答！？

「俺の一張羅なんだが」

「先輩は女子の上着をはぎ取った揚句、それを着て笑つて人前に出るつもりなんですか？最低ですね」

「声がでかい！その言い方だと俺が変態に聞こえるだろ？が！やめてくれ！」

「事実でしょ？？」

「事実だが言い方によつて印象が大幅に変わることを覚える！」

「保護者の今の上着は俺が貸したものだし、笑つて人前に出るのは執事という名のウエイターをするから愛想よくせんといがんからだ！決してやましい部分はない！」

「大体お前から借りたいつて言つたのに、返すのを拒否つてどういうことだ！？」

「……着心地がよかつたとか？」

「同じ製品買え！」

「そういう問題じやないんですよ……でもまあ返してあげます。条件付きで」

「また条件か。拒否権もどうせないんだ。手早くいこう。

「大抵の要求は呑むからはよ言え」

「……先輩が休みの日に、私の勉強を見る……のはどうですか？」

「わかつたから早く上着を返せ」

「いいんですか！？」

「予想より遙かに楽そうな要求だったの、気が変わらない」

承諾。

「日程は今後相談でいいな？」

「…………先輩と二人きり…………」

「いいな？」

自分の世界に浸り込む保護者に再度確認するも、返事が得られない。そのため上着が返ってきたのは五分後となつたのだった。

## 第六十四話 団結（後書き）

もつシリアス的展開を書くのは止めます……。疲れるしアクセス数は減るし……下手な挑戦はマイナスにしかならんことが判明したので……。

誰か文章を書く力をください。

「忙しい

忙しいたら

忙しい よつを

「ぼやいてる暇があつたら働け」

義人、お前はいつから改名したんだ。センスのかけらもない句を詠むな。疲れがどつとたまるから。

「忙しければ死にたくもなるさ。人間だもの。 よつを」

後ろ向きすぎるだろ人間！ 気持ちはわからんでもないけど！ でもさらにネガティブになるようなこと言つんじゃねえよ！

なんだかんだでクラスのほとんどが集まつたものの、執事喫茶の忙しさは終了間際となつてピークを迎えていた。その理由はこの看板にある。

♪今なら執事と一緒に写真が撮れます！♪の文化祭の記念にぜひお立ち寄りください！♪

……こんな時間を貪つ企画を、最後の最後に宣伝に使つたことが最大の原因だ。いくら人手が足りてはいるとはい、ほぼ全員の客が写真を求めるため、店内の混雑は最高潮かつ混乱していた。どの客がいつ席に座つたのかもわからない有様で、お冷やを出すタイミングもつかめない。……石井ももつと前にこのイベントをすればいいものを……。

「ふう、疲れましたねえ。ねぎらいの意味も込めてお茶を一杯、くらいてくれても罰は当たらないと思いますよ？」

「旦那！ 旦那も写真の方へいってくれ！ 給仕は俺が手伝つかり！」「マジでか！？」

写真に撮られるのは本当に嫌なんだが。

「そんなこと言つてる場合か！ あと三十分乗り切るためだ！ 自己中

になるな！」

「……了解」

簡単に言つてくれるな。俺が一緒に「与」とこつて拒否されたらどうするよ？一生もののトラウマになるだ。今さらまた一つ増えたところ大したことない？ほつとけ。いや、同情してくれ。

「ぐつとらつくー、みついー」

氣の抜ける応援、ありがとう石井。

「……氣付かれないのは心えますねえ……。悪気はないんでしょうが。終わるまでひと眠りしますか」

「NNNNNNNNNN」

「——健二ちゃんのやつ……！」

何か起こしていないと氣がすまないんですかあなたは！いつもは静かに寝てるのに、今日に限って大きないびきをかくのは理由でもあるんですか！？

「疲れてるんだろ」

「それにしても限度があるだろ！？」

爆音かと思ったぞ！？一斉に客が振り向いたじゃねえか！

「旦那、氣を取り直して『眞へGO』

「……落ち着け、俺」

自分でいつてりや世話をはないな。

幸いにも、一緒に「与」の拒否されたらどうするよ？一生もののトラウマになるだ。今さらまた一つ増えたところ大したことない？ほつとけ。いや、同情してくれ。

底からホツとした……。嫌な思い出が増えなくてよかつたよ……。

「「「うそつさま。」」の写真、記念にずっと取つて置きますね！」

「「「ありがとうございました！！」」

最後の客が執事喫茶を後にしたとき、一斉に歓声が上がった。

「終わった……！」

「これは大成功と言つてもいいんじゃね！？」

「間違いなくそうだろ！余る予定（クラスで分担して持ち帰る予定だつた）で仕入れた材料、ほとんど底をついてるぞ！」

「こんなに繁盛するとは……俺のおかげだな！」

「清水、お前も確かによく頑張つたが、一人だけの力ではない。皆の力が合わさつたからこそこの文化祭は成功したのだ！」

「おお、夏田が尋常でなくいいこと言つたぞ！」

「しかしその通りだ！俺たちは最高だ！ノーベル賞ものだ！」  
ハイテンションすぎてわけわからんことを口走つてゐるぞ。ノーベル賞て。何か該当するものがあるのか？平和に貢献したとはとても思えんが。

「それにしても悪かつたねー。中学生に手伝わせちゃうなんて」

「三井君の後輩なんだって？いい子だねー」

手伝つてもらつたこともあり、保護者にはクラスに残つてもらつっていた。少しばかり残つた材料で賄いを作り、閉幕式が始まるまで早目の打ち上げをするのでそこで労おうという寸法だ。

「そんなことないですよ。好きでやつたことですし。それに」

謙遜なんか柄じやなかろうに。年上の女子相手では勝手が違うのか？

「……私は先輩に体も心も束縛されていて、拒否権がないんです」

「何言つちゃつてんのこの後輩！？」

「ありもしないことを口走るな！？こら清水！怪我人が殺氣を放つな振りかぶるな！……相討ちでもこいつを倒す……とか言つな！」

ほれ見ろ怪我が悪化して苦しんでるじゃねえか！

立ち上がりつて足に体重を乗せた結果、痛みが走つて顔が青ざめて

いく清水。変なところで熱血するな。

「すいません、半分は冗談です」

「半分！？」

全部の間違いだらうが！

「束縛されているのは肉体のみです」

「だから根も葉もない嘘をばらまくな貴様！俺のこのクラスでの立場をどうするつもりだ！？」

四方八方から軽蔑の視線が突き刺さる。俺が一体何をした！？そして清水、もう動くのは諦める。悪化するばかりなのは自明だから。それと女子！「……やつぱり……」つてどうことだ！？俺は今までどんな風に女子に思われてたんだ！？

「まあそれも冗談です」

今の嘘で得することはあるのか。俺の評判が下がつたことしか利害はないと思うんだが……そこまでして俺の評判を下げたいか。

「……半分、ところの事実なんですけどね……」

「まだ何か俺を貶めるつもりか！？」

「それにも飽きたので、せつかくですからチ打ち上げを楽しみましょう」

流行り廃りがあるのか、俺苛めには。

「一発芸誰か見せろー！」

「よし俺が！円周率を際限なく言つざー！」

「すごいけど無駄だ！盛り下がるから止めー！」

## 第六十七話 大切

女子の集団に保護者が拉致されたため、俺は何となく手持無沙汰になつた。静かに一人疲れを癒すのもいいが、一つ気になつていてことがあつたため、その確認をすることにした。

「タツミ、突き飛ばされたときの怪我の調子はどうだ？」

「あ、なおくん……」

何か考え方をしていたのか、女子の輪に加わらず一人で紅茶（残り物）を飲んでいたタツミに確認。あの嫌な事件の後、元気がなかつたような気もするし、励ましてやつた方がいいだろ。

「まあ、あれだ。あの最低な奴に怪我させられたのは屈辱だつただろうが、元気出せ。そんな嫌なことは忘れるのが吉だ」

忘れようにも忘れられんかもしれんが。癌でも残つたら田も当たられんし。

「……まさか、あのネガティブななおくんに励まされるとは思わなかつたよ……」

失礼な。気持ちはわからんでもないが、嫌なことを何度も受けている俺としては当然の対処法なのだよ。

「……それに今悩んでるのは別のこと……」

「別のこと？」

「……いや、なおくんのことじゃないよ……」

そんなこと言つとらんのだが。

「俺のことじゃないならちょうどいい。相談ぐらうてなうのやつ……」

「そんなことしなくとも……でも……」

「俺じや役不足か」

「むしろなおくんじやないと相談できなことなんだか……おくんだけには相談できないとも言えるし……」

「……おくん、あのお客さんに対する怒りってた？」

あんなのを今さら客呼ばわりする義理はないと思つ。

「あんな嘗めた態度を取られてキレないほど、俺は人間ができるな

い」

「……その理由は？」

「そんなもん。

「大切な仲間と、その努力の結晶を馬鹿にされたんだ。手を出さなかつただけ俺は大人だと思ってる」

「……た、大切……！？た、他意はないんだよね？」

他意も何も言葉通りの意味だ。

「……もしかしてなおくん、誰相手でも同じようなことしてるの？」

「立場はわきまえてるからな。相手が確実に悪いときだけだ」

若い頃（小中学生時代）は義人と馬鹿をしたこともあつたが。

「そつか……何はさておき、私のために怒ってくれてありがとう」

「どういたしまして」

「考えてやつたことではないけどな。

「……後で古木さんに謝らないとな……」

「何か迷惑でもかけたのか？」

「うん、まあ……一つしかないものを取り合つてしまつたって言うか……」

「よくわからんな。

「これで文化祭は終了となるが、月曜日には体育祭も残っている。打ち上げは原則禁止となつておるので、騒いで北高に連絡が来るようなことは避けるよう」

生徒指導部長、小倉さんのがたい「指導を受け、文化祭はひとまず終了。打ち上げは原則禁止だとは言うものの、小倉さんの口ぶりでは打ち上げすることが前提のようだ。そりやあクラス一丸となつて一つのことをやり遂げた後だ。打ち上げくらいしたくなるのが人情というものだらう。もちろんその辺りは先生方も承知で、騒いで苦情が来たときに「打ち上げは禁止となつてているのだが、生徒が勝手にやつてこちらも困つている」との言い訳に使うために言つているのだらう。先生は先生で打ち上げをやつてているくせ（情報源は健三さん。堂々と口にだして「今夜の飲み会は楽しみですね」などと宣つていた）、やることがみみつちい。いや、生徒が騒がなければ全くもつて問題はないのだが。

「打ち上げは体育祭も終わつた後でいいよな？」  
「せつかくだから一回行こうぜ！」

「そんなことしたら儲け全部飛ぶだろ」

「儲けが出ただけいいんだから、自分たちで出せばいいんじゃね？」  
「こいつら騒ぐ気満々だな。迷惑になるからカラオケでも行つて叫ぶだけ叫んでから参加すればいい。そうすれば多少はマシになるだろ。

「今から俺たちはカラオケ行くけど、一緒に行く奴いるかー！？」  
「マジで行くらしい。こちとら一日で全精力を使い果たすほど疲れたというのに、元気な奴らだ。……あれが若さか……。

「旦那も年齢同じだろ」「

「奴らとは精神年齢が違うんだ」

「そうか、俺たちは大人だもんな！」

「そうだよねー。アダルティーって言うのかなー？」

「誰がお前らを含めとるか。俺の分類によれば、お前らの精神年齢は幼稚園児並みだ。」

「ところで旦那は行かんのか？」

「本気で疲れ切つてるんだ。帰つて眠らせてくれ」

「残念ながらそうはいかないなー」

「……なんで？」

「三井にはトップとしてー、謝罪に出向いてもらわないとー」

「ぐは。そうだつた。脳が忘れようと務めていたらしい。」

「旦那、人はそれを現実逃避と呼ぶ」

「大体、まだ謝罪に行く人とかのリストができてないだろ。それは健三さんの仕事のはず……」

「悪あがきはよしなよー。健三さんはその作業すでに終わらせてるからー」

「どれだけ優秀なあの人！？」

「その優秀さをもつと別の時に発揮してほしかつた！」

「飲み会に参加するためにちょっと本気を出したみたいだねー。はいリストー」

「予想以上に多いー？これでちょっと本気とかどうなつてんだー？」

「それが健三さんなのだよ、旦那

「あの人は確実に才能の使い方を誤つてる……！」

## 第六十九話 謝罪と召集

手土産に写真と義人謹製のお菓子（これもほとんど余った材料で作った）を持参し、片っぽしから住所を回ること数時間。「あなたは悪くありませんから」と優しい言葉をかけられることもあれば、「最低な気分です。済んだことだから我慢しますが、盗撮した奴の顔と名前教えてくれませんか？殴りに行くんで」などと物騒なことをおっしゃる御仁もおりました。しかしこれで最後のお方、これが済めばもう帰れるのです。あなたのおっしゃる場所に向かえるのです。だから今しばらくの辛抱を……

「五月蠅い。早くしろ。五分以内に帰つて来なかつたら捻じ切る」

「……勘弁してください姉上様」

「どこを！？などというツッコミは命を削る事態を引き起こしかねないため、してはならない。やるとなつたら本気でやるのが姉ちゃんの怖いところだ。

せつかく幼なじみ（うちの姉ちゃんとタツミの姉さんも幼なじみ、当然その妹のタツミも姉ちゃんの幼なじみ）が再開、集合したといふことで、四人一緒に飯を食いに行こう と急に告げられた（ちなみに料金は割り勘らしい。あのケチめ……背は低くても年上なんだからここは奢るくらいの器量の大きさは見せろよ……）。もちろん俺には相談もなければ拒否権もない。ところが仕事が残つてる……という命に関わる最大の危機になつたのだが、謝罪を終わらせるのは最低限の義務。悲劇を考えないように先延ばしにしてここまで來たが、今はもう恐怖から逃れることもできません。嫌な予感ばかりが胸をよぎる。指……？それとも足……？嫌だ！まだ五体満足な姿でいたい！なにか打開策はないものか……？

「……着いた」

重要な案件を一心不乱に考えてこぬつひ、たひひし、田的に着いてしまつた。とりあえず謝罪を済ませよつ。恐怖に怯えるのは後回しにして……ひんぱーん。

「じゅら様ですか？」

「北高の者です。じつは赫々云々で」

「それはひどいですね」

「これはお詫びと謝罪を兼ねてで……」

「それはどうもすみません」

……何の問題もなく終わつてしまつた。できればこゝでアクシデント（主に叱咤など）が起きて時間を潰せれば……などと考えていたのだが、そう都合よくは進まないらしい。

「ん？ 携帯にメールが……」

発信者姉ちゃん。件名 ロロス。

「罰則がきつくなつてゐる…？ 僕死ぬのか！？」

全力で自転車をこじりつゝ、目的地（居酒屋）へと向かうのだった。

……じゅらが五体満足で体育祭に出られますよつ。

「あら、久しぶりねえ直くん。私のこと覚えてるかしら？」  
居酒屋に辿り着いたとき、幸いにも姉ちゃんはすでに酔っぱらっていた。そのおかげで俺への処罰は忘却のかなたにあるようだ。代わりにタツミへのセクハラの真つ中最中（まさに酔っぱらいオヤジ。手がつけられない）で、俺が見るのはためらわれる光景が広がつていた。必然的に俺はもう一人の幼なじみ、三歳年上の望さんの相手をすることとなつた。

「正直顔は覚えてませんでした。お久しぶりです。一望さんでしょう？」

失礼ねえ」

實際忘れてたんだから仕方ない。人間は忘却する生き物なんだ。  
あそこで「よいではないか、よいではないか」などと迫つて いる馬  
鹿と同じで。

「私は一度だつて直くんたちのことを忘れなかつたつていうのにー」「それは失礼しました。姉ちゃんから聞いたんですけど、関東の大学ですつて？ 一人暮らしつてやつぱり大変ですか？」

な」として嘗て書いたもの

「それよりどうなのよ？直くん、彼女とかいるの？」

またその話が、どうしてそう人を落ち込ませようとするかな、女  
子つてのよ。

「いませんよ。てかいたことがありません」

「そんのじゃあがの」と、

「辰美よ、た・つ・み。お買い得よ?」

妹をモノ扱いで売りに出すつてどういうことですか。これだから

姉つて人種は困る。

「なんでそうなるんですか……」

「あり? だつて昔から仲良かつたし、今も仲良くやつてるんでしょ? つちでよく話してるわよ、直くんのこと」

「はいはい、それはよかつたですね」

「あらあら、本気にしてないのね? つまんないからかうのもいい加減にしてほしいものだ。

「でも直くんと辰美が結婚したら、私と直くんは義姉弟よ?」

「何工程すつ飛ばした結論に辿り着いてるんですか。それと、それは丁重にお断りさせていただきます」

これ以上にハチャメチャな姉が増えたらどうしようんだ。心労で倒れかねん。

「あら? もしかして私の方がよかつた? 駄目よ? 私彼氏いるし」

「はあ、そうなんですか。大人ですね」

「もう、反応がつまんない。彼氏彼女がいる関係なんて中学高校ならいぐらでもいるでしょ?」

だから俺に何を期待してるんだ。

「あいにくと、近くにそういう人がいないもので」

「もっと人生楽しまないと損だよ? お姉さんからの忠告」「楽しんではいますよ。若干正規ルートから逸れているだけで。

## 第七十一話 悪魔超人

「……弘美さん！？ ちょっとそこは……！」

「むふふふ、久しぶりだらう？ よいではないかよいではないか」

「久しぶりに会ったその口に、変なところを触らないでください！」

「私と辰美ちゃんの仲だらう？ 壇根なんぞなくて当然」

「どういう理屈ですか！？ 酔っ払い過ぎですよ！」

「私は酔つてなどいない。ただ頭の中がふらついているだけのことだ」

「それを世間一般では酔つて血うんです！」

「まあまあ、お姉さんの酌をしてくれ、可愛いお嬢さん」

「もう飲み過ぎです。お酒はやめておきましょ！」

「だが断る」

「ダメです」

「抵抗しようと無駄だ。私の戦闘力は六十万を超える」

「フリー・ザ以上じゃないですか！？ 全宇宙最強を超えた存在！？」

「おお、よくわかつたな。女子でこのネタ（ドーラゴンボール）がぱ

つとわかるのは少ないぞ？」

「え？ 有名じやないですか？」

「有名と言えば有名だ……一部の人には、辰美ちゃんは漫画、結構  
いけるクチ？」

「そうですね……ジャンプ系統は結構読んでますよ。スラムダンク  
とか、るりうに剣心とか……ワンピースとか」

「あとそうだな、ナルトとかブリーチとかかな？」

「そうですね。単行本は買つてませんけど」

「そりゃあ、読む本全部買つてたら金がこくらあつても足りんし

「くすり」

「どうした？」

「いや……なおくさんと回り回りと血うんなど思つて」

「姉弟だからな。多少は似る」ともあるだろ？。とつあえず直樹はボロることに決定したが

「どうしてそうなるんですか！？」「どうしてそうなるんですか！？

「なんとなく」

「なんとなくで、なおくんは暴力を奮われるんですか！？」「しないで言つたら不愉快だったから」

「理不尽でしょ！？」

「んー？直樹のことに必死になるねえ。何かあるのかなあ？」

「…………」

「にまにま」

「……口に出してまでいやらしく擬音を言わないでください」「どうした辰美ちゃん？声が小さくなつたぞ？これは面白やうだ」

「……本音が出ますよ」

「楽しいことにまつり反応してしまつてな。それで？直樹のことをどう思つてる？」「

「……直球ですね」

「やついう君は慎重だな？ふふふ、心の中を見透かされたくないのはわかるが、私にその手は通じないぞ？」「どうしてですか？」

「それは……いつあるからやー。」

「！？」

「直樹ーーちゅうひつちつち来いーー一秒以内」

「物理的に無理だろー！？」

「ブー、時間切れ罰ゲーム質問に答える拒否権なし」

「ひどつ！暴虐無人だ！」

「直くん？弘美に今さらそんなことを言つても無駄よ？」

「そうですね……いだつ！？」

「失礼なことしか言えないのかーの口は」

「姉ちゃんだけには言われたくねえ！」

## 第七十一話 悪魔超人（後書き）

誕生日というのにテスト+バイト（しかも交通の便が悪いと）…  
…。なんて誕生日だ（泣）

## 第七十一話 敵前逃亡

酔つ払つた姉ちゃんに呼び出しをかけられた俺。何やらタシミも顔が赤くなつてゐるようだし、一人仲良く酒盛りでもしていたのだろうか？それなら俺を呼ばずともよからう。ましてや強制罰ゲームとはどうじうことだ。

「さあ正直に答えてもらおうか」

「何を」

「……言つてなかつたか」

「言つてないです」

「」の酔つ払いが。……せつー？

「今失礼なことを考えたろ？」

「……なぜわかる……」

間髪入れずに突きを入れてきよつて。危つて一度と声が出なくなるとこりだつたわ。

「直樹、辰美ちゃんのこと好きか？」

「なぜそんなことを聞く」

「お前はただ質問に答えればいい」

「やれやれ。質問するときはまず自分から答えるのが筋だろ？。そんなこともわからないのか？」

「ああ？」

「すいません調子こきました」

酔つ払つていてもこの反応。嫌になるな。

「好きか嫌いかで言えば好きに分類されるな」

「そうか、それは上々」

「何が。

「……だ、そうだ辰美ちゃん。どうする？」

「どうするつて何をですか！？」

質問の意図はこれが。本人の前でこんなことを言わせる」とで両

方をなぶる、と。鬼め……まるでこれじや俺が告白したみたいじやないか。恥ずかしい。タツミはタツミで真っ赤になつてゐるし。俺たちは姉ちゃんの遊び道具か。

「どうせこんなのに彼女はおらん。売れ残り商品だし安くしつくぞ」  
誰が売れ残りだ。彼女がいないのは否定できないが、姉ちゃんだ  
つて同じよつなもんだろ。

「私と一緒にするんじゃない。  
私は彼氏を作れないのではなく、作  
らないだけだ」

「わーい、負け組のセリフだ。誰が負け組だつて？」

「心を読んでまで奪

心を読んでまで俺を苦しめないでください」「屋力五十村一バーは伊達じやがつた死ぬか

二  
。.

「反省したみたいだしー、離してあげなよ、弘美」

ありがとうございます。九死に一生を得ました。

「じゃあ、辰美は返答どこいったか？」

「」

タツミが返答に困っている。さすがに「気持ちが悪いから勘弁してくださー」などとは言わないよつだ。……自分で考えておいてなんだが、言われたら一週間は立ち直れんだろうな……。なんとかオブラーートに包んだ拒否をしてくれよ？（断ること前提）

「まあ答へは？」

何を思つたか目の前にあつた酒を一氣飲みした。

「逃げたわね」

「逃げたわね

「 もう 」

相当酒に弱かつたのだろう。飲み終えたタツノは突っ伏したまま動かなくなつた。……一気飲みつて死ぬこともあるから、やつたらまずいんだよな……。

「俺を傷つけないためにそこまでしてくれたのか……なんて立派な殉職……」

「いや、ただ逃げただけでしょ」

「この反応は……青春だなあ」

姉ちゃんの考える青春は、一気飲みでぶつ倒れるものなのか。異常だ。

## 第七十二話 戰意

タツミがつぶれた後、年上一人（精神年齢は不明）から集中砲火を受けた翌日。体育祭の前日ということで、クラス全員が出席する長縄の練習にわざわざ北高のグラウンドに来ていた。

「……頭痛い……」

「どうした旦那、寿命か？」

「俺の人生短つ！？違うわ、一日酔いだ！」

「そつちの方が問題だと思うんだけどー、どうなのその辺ー」

しまつた、墓穴を掘つたか。

「まあ今の時代、酒くらい飲むことはあるよな。それで、飲み過ぎたのか？」

「ああ。飲まされた」

「やつぱりー、例の三井の姉さんに誘われてー？」

「誘われたのではなく、強引に飲まされたんだよ、一人に」

「二人？」

「……そうか、言ってなかつたか。昨日は四人で飲んでたんだ」

「あと一人はー？」

「タツミとその姉さん。幼なじみ四人で飲んだんだよ」

「それなら別によくないか？」

「それだけならな。

「色々と尋問されたんだよ、酔っぱらい一人に」

「あれー？石川さんもいたんだよねー？その時石川さんはどうしたのー？」

「同じように質問の返答を強要されて、服毒自殺を図つた

「どういうこと！？」

「酒を一気飲みして潰れた」

「なんだ、つまらん」

「事実を話してなぜ失望されんといかん」

話せと言つたのは貴様だらうが。

「もつと詳しく話してもらひうよー？」

「なぜに」

「だつてー、石川さんが明らかに拳動不審なんだもんー」「確かに。Jリーグを見たかと思えば、田が合つた瞬間逸らされるし。昨日のあの質問が尾を引いているのだろうか？だとしたら、姉ちゃんはまた余計な事をしたことになる。

「明日は一人三脚一緒に出るんだろ？清水の怪我が直らなければ」「無理だろ」

ただでさえ酷かつた清水の怪我は、昨日調子に乗りすぎたせいで悪化したらしい。驚異的な速さで回復していたそうなのに、馬鹿な事をしたもんだ。それが清水と言えばそれまでだが。

「出るつもりはねえよ。体調が悪いことにでもしとけば休めるだろ」「それで済めば一番なんだらうけどねー」「

体育祭か……めんどい。

「体育祭に意味つてあるのかね？学生の本分は勉強だろ」「うわー、田那が駄目人間の発言してるー」

「駄目人間言うな」

「腐敗人間の臭いがするー」「

腐敗人間！？

「田那は運動ができないわけじゃないんだから、しつかりやれよ」「Jリーグの高校では平均以下だけど

「球技ならまだしも、ただの陸上競技で太刀打ちはできません。

「ならー、一人三脚はいけるじゃんー」

「女子とやつて恥ずかしい思いをするなら、成績くらい捨ててやる」  
胸を張つていつてやる。

「やつぱり腐敗人間だねー」

「日本の政治並みに腐つてゐるな」  
もはや修正不可能なほどにー？

## 第七十四話 リーダーシップ

「長縄……それはクラスとクラスが全身全霊の力を籠め闘う、いわば体育祭一クラスが団結できる競技である。この種目を疎かにしての上位入賞など有り得ず、団結力と勝利への意志を問われる、血沸き肉踊る決戦である」

「……よくもまあそこまで捏造できたものだな……」

なぜ長縄如きに熱血要素を加えようとする。バトルとかいらないから。無事に一日が過ぎればそれでいいから。

「旦那、つまらんぞ？せっかくの行事なんだから、楽しめ

「楽しもうなんて氣力、昨日で尽きたわ」

「文化祭ですか？」

「それもあるが、その後にあつた謝罪巡りと実の姉による苛めが大きかつたな」

「若いんだから、精力でなんとかしなよー」

精力で。俺にどうしろってんだ。

「それはともかく、他の皆のテンションを下げるよつなことはしないでくれよ？」

「……善処する」

自信はない。

「みんなーーー？元氣かーーー？」

「「「オオーッーーー」」

「……おおーう」

テンション高いぞ皆の集。俺は疲れに加えて寝不足だつてのに、どうしてその高いテンションを維持できるんだ？話によれば、昨日クラスの一部の連中（音頭を取つての夏田含む）は打ち上げに行つた揚句に<sup>ボーリング</sup>二次会に<sup>カラオケ</sup>三次会をやり、数人に至つては徹夜らしいのに…

…体を労われよ。

「せーの！」

「「「いーち、こーの、さん…！」」

心中でクラスの若者たちに苦言をしていると、練習が始まった。

「「「いち……あ」」

記録ゼロ回。当然といえば当然の結果だ。初めてやるわけだし。

「まあ最初だしな、ドンマイドンマイ。次いこう、セーの…！」

しかし何度もやつてもうまくいかない。飛べたと思つても数回、最高でも十回に届かないという駄目っぷりで、不安ばかりが募つていった。……クラスマッチの時は異常な好成績を残したのに……。意外とこのクラス、結束力はないのかもしれません。

「ふはははは、まるで駄目だな、お前ら…！」

「な、何者！？」

悪いイメージばかりが先行して、結果もそれ相応になるという悪循環に陥っていた俺たちのもとに、聞き覚えのある豪快な笑い声が聞こえてきた。

「あ……あなたは清水師範！？」

いつの間に昇進してたんだ清水！？

「やはり俺がいないと結束力が高まらないよつだな！」

怪我のこともあり、繩を回すこともできない清水だつたが、怪我を押して声出しをしてくれることになった。やはりこいつがいなといこのクラスはまとまらない……いい意味でも悪い意味でもムードメーカーだな。

「さあ俺を崇めろ！讃えろ！さすれば我が力、貴様らへと十二分に

分け与えてやる！」

「「「調子に乗るな戦力外」」けがにん

「……すいませんでした……」

ホントにいい意味でも悪い意味でも、我がクラスのムードメーカーである。

## 第七十五話 掛声

「声出しは俺がやるから、あとに続けて叫べ！」

「叫ぶのか。むしろそつちの方が飛ぶよりも疲れそうだ。」

「せーの！ ワン、トゥー、スリー！」

「なぜ英語！？」

「普通にやれ、普通に！」

「おおー、三井が突っ込みを入れたねー！」

「疲れてるだろに……旦那の本能が疲労に勝つたのか、やかましいわ。俺の本能は突っ込みに特化してるのか。嫌だぞそんなん本能。」

「一致団結するかと思つたんだが」

「どういう理屈で！？ いないよ！ 掛け声が英語になつたら一致団結する、アメリカンな人はここにはいないよ！」

「I want to eat beef bowl」

「知らないよ！ 何を証明したかったのかは知らんけど、「私は牛丼を食べたいです」ではアメリカンな感じは一向に出ない！ 牛丼つて日本人丸出しじゃねえか！」

「そつか……訂正しよう」

……やつと声だしが普通になるのか。清水が納得してくれたようでなによりだ。

「I want to eat girl」（性的な意味で）

「訂正するのそつちかよ！ しかも悪化してる！？ 「私は女の子を食べたいです」！？ 犯罪臭がバリバリするわ！ 危ない人だ！ 危ない人がここにいますよ！」

「しまつた……つい本音が」

「本音！？ 本気で言つてたのかよ！？」

思春期の男子なら少しは考えるのもやむを得ないかもしかんが、声に出して言つなよ！ 女子いるのに！ クラスの女子が勢揃いしてゐる

のに！

「…………

うわー！女子が清水のことをけだものを見る目で見てる…でも半分くらい「清水だしそのくらい考えてただろうよ」みたいな達観した表情なのが気になる！清水の評価は、女子内でどんだけ低いものになつてんだ！？

「そんな目で見るなよ。俺が変な趣味に目覚めたらどうするつもりだ！？」

清水は清水で反省の色なしだし！「こんなんで大丈夫なのか、このクラスの長縄は！？」

「……はーい、では長縄続きやります」

清水が普通に戻つた！テンションが下がるとそれはそれで不気味だな！

「ワン、トゥー、ヒアウイー、ゴー…！」

全く改善してないし！

……その後一時間かけて練習した結果、最高記録十八回、平均十回程度は飛べるようになつた。なんだかんだで清水の声だしあなりの効果があつたようだ。

「でも隣で練習してたクラス、最高三十九回飛んだみたいだな」

「本番勝負だからな……つまくいけば最高記録更新できるだろ」皆の集中力も格段に上がるだろうし。集中すれば長縄はなんとかなると思うんだがどうよ？

「まあ回数飛べなかつたからつて、何があるわけでもないしな」

「うわー、旦那ネガティブ」

「いつものことだろ？が

「それを自分で言つてるのはー、終わつてると思つよー」

「何が。

「人生」

スケールが大きいわ！

## 第七十六話 弾ける

体育祭当日の朝。体と心の疲れは未だ回復していないこと、いつの間にか長縄の練習をやることで朝もはよから登校。例によつて寝ていた義人をたたき起こし、時間どおりにグラウンドに集合（体操服には着替えた）したのだが……。

「……人口密度高いな……」

どこのクラスも考へることは同じなのだろう。一つあるグラウンドは生徒達の練習風景で埋め尽くされていた。やる氣に満ち溢れるな……落ち着けよ。

「どのクラスも燃えてるな……お祭り騒ぎがそこまで好きか」

「そりや好きだろ。中でも一年の先輩方は盛り上がりが異常だ」

「理由は何かあるのか？」

「それはねー、一年が優勝の可能性が一番高いからだよー」

「三年じゃなくてか？」

「うんー。だつて三年は部活引退してー、体力が落ちてるからねー」「なるほど。それなら一年の先輩方のやる気にも頷けるな」

ただ、三年の先輩もやる気がないわけではない。はつちやけ具合ではトップだろう。そんなに受験勉強は大変なのだろうか……？背中に旗（三年四組ばんじやーい と書いてある）を挿しながら、縄を回す姿はなかなかにシユールだ。

「……はっ！まさか笑わせて他のクラスの戦意を喪失させる作戦か！？なんて恐ろしい……注意が必要だな、旦那！？」

「いらねえよ！もしその作戦だったとしても、出オチじやねえか！」

「……これは負けてられねえ……」

「清水！怪我人が何考へてんだ！？対抗しようとしなくていいから！そういう勝負は種目がないから！ちょっとどこ行くんだ！」

「開会式までには戻るから練習はお前らだけでやつとけ！」

清水はそう言い残すと、松葉杖を突きながらも、かなりの速さで

去つていつた。……一体何に対抗意識を燃やしてんだ……あいつは

……。

「……掛け声はあいつが出すつて言つてたのにな……夏田っ練習どうする?」

「やるだけやつといつ。清水がいなくてもできるつてことを証明してといつ」

やつは言つたものの、結局朝の練習では記録は伸びず。不安を残したまま本番に臨むこととなつた。……まあ、いい記録が出なかつたところでペナルティがあるわけではないし、いいんだが。

「ただいま!待たせたな!」

「清水、いまさら待つてねえよ。もうすぐ開会式だから並ぶぞ」

「何持つてんだ?競技に必要ないなら置いてここよ」

「ふふ、これこそクラスの士気を盛り上げる秘密兵器だといつのこと

……」

「はいはい、妄想も大概にしておけよ?」

「反応冷たつ!?」

「霸王 優勝は我が手にあり?ダサいな」

例の三年の旗に触発されてだらう。清水が作つてきたのは旗だった。文化祭で余っていた段ボールで作ったようだ、即席にしてはそこそこ良くなっていた。……文章にセンスが見られないのは致命的欠陥だと思つが。

「そのくせネタばれして、拳句の果てに酷評だと!?」

「……そんなことに時間かけるなら、練習手伝えよ」

「声出しさやるつて自分で言つてたのに……清水君つて自分の発言に責任をもてすらしないんだね」

「このくそが」

「四面楚歌だ!この俺が、そんなに空氣読めないと!?」

「いや、K-Yだ」

キモチワタダヤ

「ひどい...あまりにもひどすぎる...」

「まあ、まあ清水君も悪気があつてやつたわけではないんだし...」

「石川さん結婚してください」

「いくら清水君が駄目人間でも、正直に言つのはよくなないと困ります？」

「やっぱり敵だらけだ！」

....今になつて氣付くとは、哀れなやつ。

「あなたたちに厳命を下します。藤田先生のクラスに絶対に勝ちなさい」

「何かあつたんですか健三さん」

「また藤田先生とトラブルですか。厭きないです、本当に。」

「あの藤田先生、朝の会議でほんの十五分ほど寝ていただけで、いつたい山本先生は何歳児ですか？乳幼児並みの睡眠時間を取らないと生きていけない奇病にでもかかっているんでしょうね。可哀想に」などと仰るんですよ？これは宣戦布告ととらえて構わないでしょうね」

「……ちなみに会議は何分ほどかかったんですか？」

「十五分ですが」

「時間いっぴいかよ！出席した意味ねえ！藤田先生もそりゃ怒るよ！血管そのうち切れるよ！」

「そんなことあつませんよ。会議は出席する」とて意義があるんです

「……その会議での連絡事項はわかりますか？」

「さあ」

「さあつておい！しつかりしてくれ担任教師けんせいうせん！」

「どうせ校長が気取つて、生徒たちには北高生らしい毅然とした態度を守らせるよつこー」とか、「体育祭で求められるのは結果ではなく過程だ」とかの、聞こえは良くても中身のない話を延々と繰り返しただけでしょ？から

「校長の話を 中身ない 呼ばわり！？しかも聞いてもいないのに！？実際校長が毎回そんな話するのは事実だけど、それを教師が堂々と言つちゃうのはどうかと思うんだ！……それと……。

「……何気に校長のモノマネがそつくりですね」

「去年の忘年会での隠し芸ですか？」

「……そういう無駄なところへかける努力と情熱を、ほんの少しで

いいから会議に使つてくれたら、藤田先生もイライラで高血圧に苦しむこともなくなると思つんですが。

「私の貴重な睡眠時間は、どなたであろうとも削らせません」

「……あれ？ それにしては文化祭の準備の日、わざわざ学校に来てましたよね？あの日は家でじっくり休めなかつたんですか？」

「訂正します。私の貴重な睡眠時間は、妻と娘以外には削らせません」

「

つまりは、家にあんまり居場所がないんですね…… 健三さん

……。

「受験生だからとこいつ言い訳は卑怯ですよね」

「……か遠くを見ながらつぶやく健三さん。…… やはり世の中のお父さんの一人には違いないんですね……。」

「なんか、健三さんに同情したくなりましたよ」

「同情するなら私のために働きなわ」

「高圧的だ！」

「……健三さんのためにも、頑張るぞー！」

「……おおーっ！」

「クラス間の空気が微妙だ……。

## 第七十八話 正直

校長の長話が大半を占めた開会式も終わり、第一種目の長縄に入つた。一年 二年 三年の順に行われるため、俺たちが最初に競技をすることになる。全学年中、三分間で連続して多く飛べたクラスの順に高得点となる。他のクラスが何回くらい飛ぶのかはわからないが、ベストを尽くすことしかできない（妨害は反則。妨害をするか、生徒会では真剣に議論したらしい……が、「教育上まずいだろ、弱肉強食の世界にしたら」という数人の良識ある教師の反対により挫折した）ため、ガチンコ勝負である。

「いよし！ 気合入れてくぞ！！」

怪我はしても気合いは衰えない清水。立派だ。本番になると段違いに存在感が出てくるな。怪我人がでしゃばつてビリするという意見もあるが。

「兼子、夏田！ 縄を回すときは大きく、できる限り飛びやすくしろ！」

「了解だ、死傷！」

なんか漢字違う！ 傷は負つてるけど、そこは師匠にしといてやれよ！

「死に物狂いでやれよ！ 長縄の後、お前らの腕が壊れてもいい！ 俺が許可する！」

「いらないよそんな自虐的許可！」

「了解、マスター！」

そこは了解するなよ！？

「途中で回せなくなつたら俺が代わりに回してやる！？」

だからお前は怪我人だろうが！ ってかお前の怪我で夏田にお鉢が回ってきたんだからな！？ そこんとこ理解してるか！？

「……そんなこともあつたな。てへ？」

気持ちが悪い！ 忘却の彼方へと消え去つていた事実もさることな

がら、筋肉質の大の男が「てへ？」とか言つた。あまりの気持ちの悪さに血の気が引いたわ！

「競技本番一分前です！一年は所定の位置へ集まつてください」

馬鹿言つてゐる間にもう本番か。

「いいか、一つ約束しろ」

清水がマジ顔になつた。全力で勝ちに行く態勢に入つたらしい。

「第一声は俺が出す。だが、それに続いでお前ら全員も声をだせ！一致団結こそ長縄勝利の秘訣だ！」

……清水がまともなこと言つてゐる！格好いいぞ清水！

「……それと女子は高く飛べ！」

？

「理由は？」

「揺れるから……あ」

アホ清水！団結しかけたのに女子から大ブーイングが来たじゃねえか！台無しにすんな！

「競技開始です！三分間頑張れ！」

……この状況で開始ですかい……。

しかし、清水に対する変なエネルギーが功を奏したのか、うちのクラスは最高記録を更新する一十三回の記録をたたき出した。全体で十三位（三学年合計一十四クラス中）なのでまあまあだろ。……やつてみなくちゃわからんものだな……。

長縄が終わつた後のリレー種目では、うちのクラスは残念ながら決勝に進めず。運動神経があまり良くない、精銳陣から外されたメンバーだからやむを得ないか。

「俺も本来、そのメンバーだつたわけだしな」

「やっぱ、ただ走るだけの種目はつまらんよなー、田那」

「そうだよねー。障害物競走みたいなー、色モノ競技こそ体育祭の華だと思うなー」

色モノ競技と言つておきながら、体育祭の華と断言するのはどうかと。

「高校生が真剣に、全力疾走するのは青春つて感じでよくないか?」「そんなこと言つてもー、実力あるクラスは予選では手を抜いてるしねー」

「そうそつ。いくら頑張つても陸上部、野球部とかを集中して配置してるクラスには勝てんよ」

そうなのである。体育祭ではクラスマッチと違い、チームワークなどより純粹な身体能力を競うものばかり。よつて波乱万丈な展開はほとんどなく、予想通りの流れで進んでしまう。バトンバスも予選では安全策を取るところがほとんど。だから燃えようがない。

「しかし次は、うちが有利なトライアスロンだろ? 予選なしの一発勝負だし、浜ちゃんの応援頑張ろうぜ」

「旦那、そう楽観視するのはよくないな

「む?」

「トライアスロンに参加する選手が水泳部なのは、うちだけじゃな  
いってこつた」

義人の言つたように、トライアスロン出場選手には、見覚えのあ

る顔が揃っていた。

「旦那、トトカルチヨでもやるか?」

「堂々と博打に誘うな……しかし予想するのはいいかもしねんな」

「優勝候補筆頭はー、現部長の池山先輩かなー?」

「田村も捨てがたいな。元部長もいい線行くと思つが

「ブランクがあるしねー。あとは松ちゃんとマサかなー?」

「どいつもこいつも強敵ばっかだな……まあ競技するのは俺じゃな  
いけど」

「気楽に応援するかな。誰が勝つても問題ない。

「そんなことどうするんですか、あなたたち

「健三さん?」

「藤田先生のクラスの選手は……片山ですか。ちよつと行つてきま  
す」

「どいこですか……あ。マサと接觸してゐ。

「…………」

「…………」

「何か話してゐな

「マサに何か渡してゐ?」

「あー、藤田先生出てきたー」

「健三さんの頭をひっぱたいたな

「そのまま強制退場させられてる……何したんだあの人

真相を知りうとマサに話しかけてみる。

「おーー、マサ」

「ん? どうした? 応援に来ててくれたか?」

「いや、一応クラスの浜ちゃん応援するから。マサもここで応援

するけど

「ついでかよーー! あいいけど。じゃあなんだ?」

「今健三さんから何話しかけられた?」

「……なんか「私のクラスが体育祭で勝たなければ娘が受験に失敗  
すると天啓を受けまして……」って相談された

何やつてんだあの人！？

「その後「これで手を打つてください」って言つてこれを受け渡された」マサの手にあつたのは……♪ポケモン青（ローソン限定版）♪。「懐かしい！しかしそれでビリ！」うなると本気で思つてたのか健三さん！？」

「危うく買収されるとこふだつたよ」

「されるなよ！？脆い！脆いぞマサ！」

「で、その後藤田先生が出てきて「何バカなことやつてんですか！」つて穩便に引き取つてもらつてた」

「周りで見てたけどあれは稳便と言わないから！」

「トライアスロンに出場する選手は集まつてください

「集合来たな。じゃあやつてくるわ」

「……そのポケモン青はどうするつもりだ？」

「そうだった。預かつといってくれ」

「そう言つて義人に預け、去つていつた。まあ、頑張れ。

池山先輩一位、田村二位、マサ三位、松ちゃん四位、浜ちゃん五位、元部長六位。上位を水泳部が独占して、トライアスロンは終了。残念ながら藤田先生のクラスとの差は開いてしまつた。

「全く、浜口は何をやつてるんですか」

足の速さ（長距離）ではマサの方が上だったし、仕方がないと思いますが。

「……中間テストの査定が厳しくなるでじょうね、可哀想に

健三さん！？職権濫用するな！？」

「冗談です」

「……わかりづらー」冗談はやめてください。

午前中の競技は大半が終わり、残すは一人三脚のみとなつた。この種目も予選はなく、一発勝負となる。かといって全クラス同時に走り出すのではなく、何組かに分かれてタイムで順位を決めることがある。

「まあ、うちのクラスは出場しないから関係ないかな」

「何言つてんだ旦那。出場しろよ」

「そうだよー」

「男相手とならまだしも、女子タレミとペア組んでなんか出れるか。俺の心には尊厳と羞恥心が同居してゐるんだ。お前らと違つて」「失礼だな。俺たちのどこが羞恥心がないって言うんだ」「羞恥心のあるやつは人前でオタ芸を披露しない」

「それは置いておいて」

「強引に話を切りかえるな」

「出場しなつて。体育祭は参加することに意義があるんだぞ?えらい人が言つてた」

「校長を偉い人と呼ぶなら、確かにそう言つてたな。長縄に参加したし、午後の応援合戦にも出るぞ?だからオッケーだろ」

「どつちもクラス全員の強制参加種目じゃんー。つまんないよー」

「体育祭に面白さを求める生徒がどこにいる。一応授業の一環だぞ」

「あそこー」

石井が指で示した先には、狂つたように応援する最高学年の先輩方。肩を組み、体を揺らしながら応援歌を歌つ姿は常軌を逸していふと言わざるを得ない。中には冷静で通つていた我らが水泳部の元部長もいるし……。受験勉強が変えてしまつたのか? そななのか?

「……恐るべし大学受験……」

「ああなりたくなかつたら、今この一人三脚に出場することだ」

「趣旨変わつとるー?」

「そうですよ。参加しなさい」

「健三さん」

「今、我がクラスは藤田先生のクラスに点数で負けています」

「しかも一、それなりに点差が開いてるよねー」

「そうです。その点差を少しでも返すため、不戦敗など認めません

……あくまで教師として

後付けですよねその理由！

「でもですね？俺がよかつたとしても一人三脚にはもう一人必要な  
んですよ？」

タツミだつて恥ずかしいだろ？ もし出ようもんならからかわれ  
ることは間違いない。害はあっても利はないのだ。おまけに、少し  
前から避けられてる気がしないでもない。

「わかりました。石川さんが良ければ出るのですね？」

「そこまでは言つて……」

「かもん、れつどすねーく

そのネタがわかる人はこの世代にいるのか？

「お呼びですか？マスター・ケンゾウ」

HR副会長？いいのかこんなノリについてしまつて？間違つ  
た道に進んでるぞ。

「石川さんを出場させるよう説得してきてください」

「わかりました。三井君、期待しててください。ミッションは必ず

成功させます」

「俺は成功を求めてないから」

頼むから欠場させてくれ。

## 第八十一話　囁き（前書き）

ええじゃ ないかそこに、十万アクセス突破です。八十話を超えてようやく……でするので遅い（人気はない＝大して面白くない）のでしようが、それでも読んでくださっている読者さんに最大級の感謝を。本当にありがとうございます。何かできることがあればできる限り応えたいので、ご意見待つてます。

## 第八十一話 聴き

「辰美、一人三脚でるよね？三井君と一緒に」「えー？ だつてなおくん出たくないって言つてたし……」「私は辰美の意見を聞いてるんだけどな？」「…………」「文化祭の時の様子だと、後輩の子……古木ちゃんとかなり仲良さそうだったよね、三井君」「…………」「やけに親密そうだつたし……あのまま付き合ひたいとなつたやうかなあ～」のままだと「…………」「でも辰美、三井君に助けられて惚れ直しちゃつたんじゃないの？」「…………」「もし」の競技と一緒に出たら、心も体も三井君に近づけるんじやない？」「物理的には近づくけどね」「いい思い出にもなると思うな。青春の一ページ」「沈黙は肯定と受け取つてもいいのかな？それどうする？出たいの？出たくないの？」  
「……出る」「んー？ 声が小さいなあ。聞こえなーい」「出たいです！一人三脚、なおくんと一緒に出たいです！」「一名様ごあんないー！ センセー！辰美、参加承諾したよー」「上々です」

「さて、三井。退路は断たれました。あとは出場する以外に道は残

されておりません」

「急に持病の喘息が……」

「諦めが悪いぞ、田那」

「それにはー？ 石川さんの勇氣を台無しにするのはよくないと思つよー？」

「勇氣？……ああ、男子と参加することで注目を浴びるのは確定だからな……それでも健三さんのために出場するとは見上げた度胸だ」「うわ……こいつマジで言つてるよ……」

「……義人、引きすぎだろ。俺が一体何をした」

「まあいい。旦那には不参加と言つ選択肢はない。出場しろ。面白くなりそうだし」

「明らかに最後のが本音だよなー？」

「その通りだ」

「堂々と言いやがつて！」

「人ご」とだし

「どうでもいいけど、もうすぐ参加者の集合始まるよー」

「いけ！三井

「……タツミ呼んでくる

」の後、陰口とか大いにたたかれることになるんだろうな……。

「タツミ、二人三脚いくぞ」

「……参加してくれるんだね？」

「怖気づいたか？なら不参加にするか」

「後ろ向きなのもほどほどにね……そんなに参加したくない？」

「タツミが嫌なら、いつでも出場を取りやめる準備はできてる」

「……参加はしたいんだけど……」

「それならそれでいい。出るぞ」

そう言ってタツミの手首をつかみ、連れて行こうとするが、近くにいたクラスメイト（女子）から黄色い声が上がった。

「さやー、三井君だいたーん」

「愛の逃避行！？そのままどこか別の場所に行つてもいいよ？」

「ちょ、みんな！？」

「やかましい黙つてくださいお願ひします」

「う、参加する前からこんないじめを受けることにならつません。くじけそつだぜ。」

「三井は女子相手には弱いな」

「うるさい。俺はジョントルマンなんだ。」

「紳士はやかましいとか言わねえよ」

「タツミ、いいから行くぞ……練習とかしてないけど、大丈夫だよ

な？」

「……うん、頑張る」

「愛の力で頑張るってか、ハハハ。ふざけんじやねえ三井ーー。」

「清水、勝手に妄想して切れてんじゃねえよー。」

「あああ愛の力！？」

「タツミも過剰反応すんなー。」

「……こんなんで完走できるのか？」

## 第八十一話 視線（前書き）

..... 夏休みまであと一日 ..... 会計のテスト ..... 単位落とせない  
ファイト俺 ..... 。

競技に参加するために、手拭いで俺の右足とタツミの左足を結びつけた。周りの出場選手を見渡しても、男女ペアは見当たらない。それは当然だろう。男女では体格が異なるし、何より股下のリーチに開きがある。そのため普通に息を合わせて走っては転ぶ確率は格段に高くなる。クラス対抗戦であるこの体育祭において、そのようなリスクを負うのは無謀だ。よつて、そんな珍しいペアは俺たちだけということになる。

「だからこそ、俺たちは注目の的になっているわけだが」「そ、そうだね……」

足を結んだことで、俺たちは密着状態。やわらかいタツミの体が触れているので、俺は緊張しつぱなしだ。それ故、俺の口数は少なくなっている。

「旦那ー！今の気持ちを一言ー！」

「こんなプライバシーのない空間で喋れるか…わざわざグラウンドの外、クラスの応援席から煽るセリフを吐くとは…」

「見せつけてくれちゃつてーー！」のこのーー！」

「いいぞ、辰美ー！このまま既成事実を作っちゃえーー！」

こんな煽り文句を叫ぶのは皆、クラスメイト達。敵は応援席にあり。本能寺にはない。

「ちつ！彼女もちはいいよな！」

「まあ待て落ち着け。ここはな、合法的に制裁を与えるのが一番だ

「体育祭か……事故で体が動かなくなつてもおかしくないな

「怪我人がないよう気をつけないといかんな？あくまで可能な限りで、でたら仕方がないと諦めるしかない」

「真剣勝負に怪我人はつきものだ。場合によつては死人も」

「つきものだな」

」のままでは死地に変わってしまう！

「違うわー!? 俺とタシ!! はなうつ、なんていうか……お前らが姫

想するよ二た関係ではない！」

何がいいですか？」

なに？ 俺たちの関係はお前らが想像している関係から何十

歩先は進んでるせいか、春たちのビニアリ半生では想像もできないよ。

「ふざけやがつてー！」

「どうやら死にたいらしいな……」

「そんなこと言つてねえ！」

駄目だ！ こいつら正気を失つてゐる。中には一年や三年も含まれてゐる。」

「タツミも何か言ってくれ！お前が否定すればまだ何とかなるはず

[...]

「」

「ー?なぜに体をせりて密着せぬー?恥ずかしいーんでもって、

「こんなことしたら余詰は姫姫が……！」

‘Killing you –

『Sabit』

やつぱり！」のまま出場したらやばい！彼女なしの男子ペアと一緒に

「別に勘違いされてもいいもん！」

タシのひぶやいた言葉は、周りの男子からの罵声によつてかき

消され、俺の耳には届かなかつた。

「位置について……よーい」

パン！

「位置について……用意」

パン！

「位置について……ヨーイ

ズギュウウウウウン！……

「待て！？最後のスタートの念図だけ、明らかに別物だつたぞ！？」

「落ち着きなよ、なおくん」

しかもジヨジヨ風つてどういふことだ！？しかもそれに構わず、一糸乱れずスタートする連中……訓練されてるのか！？突つ込みを入れないよつに調教されてるのか！？

変な噂を助長しそうなタツミの行動、それに過剰反応する一部の生徒のおかげで、俺は協議開始前から疲れ切つていた。五、六ペアが同時にスタートして、それを五回繰り返しタイムを競うのがこの種目のやり方。最終組に登録されている俺とタツミのペアは順番待ちで、足を繋がれたまま直射日光のあたるグラウンドの中央で座っていた。日陰くらい作ってくれればいいものを……生徒（と言うか俺）が脱水症とか熱中症になつたらどうするつもりだ。もしなつたら盛大に騒ぎ立てて問題にしてやる……！

「なおくん、それは日頃から直射日光に当たつてる水泳部が言つセリフじゃないと思うよ？」

「それでもあえて俺は言つ。インドア派の人たちのためにも……！」

「後ろ向きな発言をそこまで真剣にされても……」

なんやかんやしているうちに、四組目がスタートした。次が最終

組、つまりは俺たちの出番だ。

「ほれ、行くぞタツミ」

「待つて……あつー」

すつと立ち上がった俺だが、一つのことを失念していた。今、俺とタツミは足が繫がれているのである。よつて俺一人が立ち上がつただけではバランスが崩れる。バランスが取れなければ人間は立つていられなくなる。つまり

「おおつと！？」田那が石川さんを押し倒した　ツー！」

「三井ー、いくら耐えきれなくなつたからつてー、白昼堂々人目があるところで押し倒すのはどうかと思うよー？欲望に忠実なだけではけだもの同然だよー」

人聞きの悪いこと言つんじゃねえお前らー！タツミの上に倒れ込んでしまつただけだろ？俺が全面的に悪いのは認めるが、騒ぎを大きくするな！

「すまんタツミ、すぐどくからー」

「…………」

顔を真つ赤に染めてしまつたタツミに罪悪感を覚えながら、すぐ立つとする俺。しかし立つても足が繫がれている事実は変わらない。そんな当然のことにも気付かないほど俺は動転してしまつた。

「一度田ー！一度田ー！」

「旦那ー！もういいやー！そのまま行け！俺が許す！」

「いいよー」

よくねえよー！写真撮るなー！つちに注目するな！競技中……ああもつパールしてるとー！」

「いめんな、タツミ。本当にいめんなさー……」

やつとのことで足の手拭いがほびけ、びくーとができた。その後はひたすらタツミに平謝りである。

「……この件は、後でゆつくり話すつーへー」

「わかりました」めんなさー」

「もう一人三脚もスタートするし……」  
「そうだな」めんなさい  
「い、今は競技に集中しよう?」  
「可能な限り頑張る」めんなさい  
「……なおくん罪悪感芽生えすぎでしょ……」  
「そんなことはないだ」めんなさい。

悪い」とは重なるもので、一人三脚で女子<sup>タツミ</sup>と出場 疑惑 + 嫉妬の視線に晒される 順番待ちしてたら転んでタツミを押し倒す格好に注目度がさらにアップ……という事態に陥ってしまった。それでもまだスタートしていないと、何と人生とは辛いものであるのか。「いやいやいやいやいやいやいやがって……俺の隣になつたのが運のつきだ……正々堂々と潰してやるからな……！」

一学年上の先輩（つまり一年）が凄んできた。……もっとも、涙目なので迫力は薄れているが。

「落ち着いてくださいよ、名も知らぬ先輩」

「後輩のくせに、彼女と仲の良さを見せつけるための参加とはい度胸じやねえか」

「そんな目的ありませんよ。そもそもタツミとはただの友達で

」

（ぎゅう）

「なつ……タツミ、冗談は後にしてくれ！笑つて済ませられる状況でなくなる！？」

「ちくしょう！俺に何が足りないといつんだ！」

「じいて言えば出会いだろうね、落ち着きたまえ」

騒ぎ立ててた先輩のパートナーは、冷静な人だった。というか、大人？

「女子と組んで一人三脚に出るなんて、変わってるね？なにか事情でも？」

「そりなんですよー実は本来のパートナーが、部活で怪我して出れなくなつたんです。困つたものですよ」

よかつた、良識人で……。これなら下手に妨害されたり……つてことはないだろうな。……あれ？なんで俺、こんな当然なことに喜んでるんだ？末期症状？

「とにかく、質問してもいいかな?」「どうぞ?」

常識人には誠意ある対応を見せる、それが俺の信念だ。

「……競技中はギア<sub>セカンド</sub>2まで使つてことによろしいかな?」

「よろしくないですよ!どんな化け物ですかあなた!?」

「不覚……やはりこの高校に常識人など望むべきではなかつた……!」

「だいたい妨害自体反則ですから!ギア2で俺を殺す氣ですか!?」

「いや、そもそもギア2使えたら人間じゃない!出場停止でしょう!」

「いやだなあ、『冗談だよ。本気にしないでくれたまえ』

「……ですよね?」

「ただ第三形態まで変身が可能なだけだよ

「だけつて言いません!それは明らかに人としての領分を超えてます!」

「まあ、第三形態になつたらそれだけで十八禁映像になつてしまつけどね」「どんな秘密を隠し持つてるんですか!?」

「裸になつてしまふし」

「そういう意味か ッ!-!-」

駄目だ、この先輩もおかしい人だ。キャラが濃い。勝てる気がしない……!

まあ、勝たなくていいけど。

「位置について」

「ようやくスタートか。疲労も最高潮だぜ。

「よーい……」「やあーん。

「スタートしてください」

「今の合図かよ!」

「そんなんでスタートできるか!?」

「なあくん、もうみんな走ってるよ? できるのかよ、おい!」

「…………」

で、隣の先輩方は早速こけてるし! なんだかなあ、もう一.

「一度もこけることなくゴール。一十四組中、タイムで十四位は立派な成績だと思つんだ」

「そうかもな、旦那」

「それはそうと、俺はお前に言いたいことがある」

「手短に頼むよ」

「…………辞世の句はそれでいいのか?」

「なぜ! ?」

「…………あれだけ人の醜聞を広めてくれて、よくもまあ……」

「お、お祭りだからいいじゃないか」

「そうだな、お祭りだから派手なものが欲しいよな」

「そうだな! 応援用のメガホンでも作つてくるから俺はこれで

「

「十字架を応援席に挿しておこつか……人を括りつけて」

「ひいいいいい! 旦那、目が本気! 冗談になつてない!」

「当然だ……本気だからな」

「ぎやあああああ!」

「までこらあああああ!」

……残念ながら、義人と石井（義人と違い、俺が返つてくる前から逃亡）の十字架をさすことはできなかつた。……ちつ。

応援合戦と言う種目がある。赤（奇数クラス）と黒（偶数クラス）に分かれ、北高の応援歌を歌うという何が楽しいんだかわからない種目である。責任者は何を考えてこの競技を入れたのだろうか。

「つまらん競技だ……」

「まあまあ旦那、ストレス発散になるかもしれんぞ?」

「……ストレスの原因が何を言つてやがる」

昼休みに逃げ続けられた後、集合がかかってから義人と石井の二人は揃つて現れた。さすがに教職員のいる前（特に藤田先生とか小倉さん）で暴力を振るうのは自殺行為に近い。しぶしぶ我慢していだというのにこいつは……。

「とよはーしきーたこーうこーう！」

運動部の連中は声が大きいな。意味もないのに、よくあんなテンションを保てるもんだ。感心する。

「旦那も運動部だけどな」

「それは言わない約束だ」

応援合戦も終わり、次は色モノ競技、障害物リレーである。パン食い競争、アメ探し、などの障害物がある各コーナーに代表者を選び、クラス対抗でリレーをする種目。その中で義人が出場するのが借り物競走である。

「どなたか！どなたか水筒を持っている方はいませんか！？」

ふむ。水筒なら持っている人も多いだろう。いい借り物を引いたな、あのクラス。

「誰か！誰かバドミントン部の人来てくれ！」

ものだけでなくて人もあり得るのか。義人は何を引くか見ものだな。

「おーい、この中に「なんとか還元水の戯言で有名な、自殺した農林水産大臣の名前がわかる人」いないかー？」

「なんだその借り物！？クイズじゃん！松岡元大臣だろ！わかるよ！」

「機内にお医者様はございませんか！？」

「ここ機内じゃないよ！陸上だよ！」

「百万円持っている人いなか！？あなたのお子さんが事故を起こしまして……」

「振りこめ詐欺だ！誰か詐欺事件が起きてますよ！」

「PSPが欲しいです」

「勝手に買えよ！」

「旦那、来い！」

「俺を直接指名するなよ、義人！」

「……では、借り物の確認をします。よろしいですね？」

「オッケー」

「……なあ義人、借り物は何だつたんだ？」

「同じクラスの人、とか？もしくは水泳部とか、一年とか……男子、とか？」

「へツツ「ミミくですね」

「ツツコミじゅねえよ！」

「合格です」

「しまった！つい反射的に……！」

「いやー、旦那のおかげで助かったよ。全体でも上位だつてぞ」

「……俺の存在意義はツツコミなのか……？」

「まあいいじやん。いい順位だし」

「……訣然としない……。」

体育祭もいよいよ大詰め。花形種目のリレーも数種目が決勝を終え、残すは男子九百メートルリレーのみ。我がクラスの精銳（清水除く）で構成された切り札である。予選でも好タイムを弾き出し、優勝候補の一角にまでなっている。

「ガチンコでの勝負は燃えるよねー。青春の象徴って感じでー」「勝負の場に立つてないから言えることだな。決勝なんて緊張しつぱなしになるだろうに」「

俺ならバトンパスの失敗とかフライングとかを気にして、百パーセントの力なんて発揮できん。できたところでたかが知れる能力だけだ。

「そうでもないみたいだよー」

「ん？」

見ると、集合地点にいるクラスメイト（柳、深谷、兼子など）は気合十分で円陣を組んでいた。

「いいかー！俺たちが目指すものは一位のみ！ミスなど気にするな！一かゼロか、結果はどちらかでいい！様子を見て妥当なところで落ち着く……そんな大人になるのは嫌だ！」

「――――おおお――――！」

知らねえよ。そんな士気を上げる役割で、円陣の中心にいるのは清水。選手じゃない（しかも怪我人）にもかかわらず、当然のようにその位置にいる姿は風格すら感じさせる。でも集合場所にまで行つてやることじやない。他クラスの迷惑になるから帰つてこい。

「いやいや、鼓舞激励するのに清水以上の適任者はいないだろ」「……それでも、戦略を清水に託すのはどうかと……」

猪突猛進、振り向くことのない清水の性格がよく表れた作戦（と言つか意思表示）。しかしそれは、失敗すれば失うものが大きすぎる。

「そうですねえ。転倒でもしたら一巻の終わり……タイムなどより勝つことを重視してほしいのです」

あ、健三さん。

「今、藤田先生のクラスとの差はほとんどありません  
まあ負けてはいますけどね」

「黙りなさい。あの人のクラスも残念ながら決勝に出てるので、  
それに負けたら完全敗北となってしまいます」

「それなら、状況に応じて……」

「そんなこと言つたところで、あの洗脳に掛かつた人たちは聞かない  
でしょ。一位しか狙いませんよ」

洗脳で。まあ清水の激励で、あのメンバーの眼の色が変わったのは  
事実だが。

「はあ……負けたら藤田先生に向を言われることやう」

勝つたら勝つたで健三さんも嫌みの一つや二つ三つでしょ。体育会系の人たちの脳構造が理解できません

「俺もですよ、健三さん」

なんであそこまで盛り上がるのかとか。

「……だから旦那も体育会系だろ……」

球技以外に興味はありません。

「旦那水泳部ー！」

「いけー！深谷ー！ラスト五十メートル！」

「あと少し、頑張れ！」

「抜かれるなよ！……よつしゃあ！……」

最終種目、男子九百メートルリレー。我がクラスは三位と、高順位で幕を閉じた。

「ええいぬるい！俺が走れば一位だって狙えたものを……！」

清水はこの結果には不満なようだ。そんなこと思うくらいなら、一人三脚なんかに登録しないでリレーに登録しどけ。ついでに言うなら怪我しないよう気をつけて運動しろ。

「いやいや、ラグビーで安全に運動なんてできないだろ！」

「まあ、あんな危険なスポーツだしな。俺には絶対できん……で、どうなつた？うちのクラスの総合順位は？」

全種目が終了したので順位も出たはず。

「それがですね……残念な結果に終わってます」

「どうかしたんですか？」

健三さんが意氣消沈している。

「藤田先生のクラスと同順位です」

「具体的には何位なんです？」

「ああ残念です。あと一歩だつたといつのこと……。せめて深谷があと一人抜いていたら……」

「聞いちゃいねえ。

「最後、あのリレーであと一位でも順位が下がつたら負けだつたわけでしょう？上々な結果じやないですか」

「……負けてないだけ良かつたとしますか。しかし、残念ですね」

「はあ、そうですね」

「たいしてそう感じてないけど。

「藤田先生のクラスに勝つていたら、クラス全員におひつあげよ

うと思つていたのに」

「本当にですか？ そうだとしたら残念ですね」

他のクラスの先生には、ジュークボックスをおいとしてくれる人もいるらしい、実現していたかもしだんな。

「クラス全員にチロルチョコを進呈しようと思つていたのですが」

安上がりだ！

「総額八百円の大プロジェクトだったのですが……おしゃべりをしましたね」

それなら買収に使おうとしたポケモン青の方が費用掛かってるんじゃないかな？ この人の金銭感覚がわからん……。

「閉会式を行います。選手、教員は所定の位置に並んでください」執行委員から集合の合図がかかった。ようやくこの体育祭もフィナーレを迎えるようだ。暑いばかり、疲れるばかり（タイム計測するのに駆り出されたり、雑用させられたり。小倉さんの命令）で面白いものではなかつたが、授業の一環だし仕方がなかつ。

「やうだな、旦那は石川さんを押し倒して密着してたしな。暑い暑い」

「思い出させるんじゃねえ！」

せつかく忘れようとしている過去の過ちを、わざわざ復元させるな！

「さて、皆、グラスは行きわたつたかー？」

- 10 -

「やつやつ始ぬひー！」

「いいみた

祝して！

打ち上げ会場は焼き肉屋。量は少ないし金も高いが、近いことを理由にここに決まった。もつたいなことの上ない。いくら文化祭の儲けがあるにしても。

二〇〇〇年

旦那と会った？辛臭い顔して

「さう、一等駅の出張で、あさり野の子、お芝居ある、」

日常生活も、この学校では非日常なことが多

普通になつてゐるんだから、人間の適応能力は底が知れない。

「三井」、ちょっと女子が呼んでるよ!!

「断つ」と「くれ

「よしわかった……つておい。用件も聞かずに断るなよ」  
だつて面倒な匂いがプンプンするんだもん。

結局、呼ばれたといふ連れられてきました。……用件を聞くのが怖い。

「か怖い」

「……用件は？三秒以内に言え」「辰美ちゃんと付き合え」

ちつ、三秒で答えよった。……って……え？

「はあ！？付き合えって……ちょっと……はあ！？」

「旦那動搖します」

「いやー、辰美ちゃんが酔っぱらっちゃってねー？相手するの代わつてほしくてー」

……そういうことか。……お酒は二十歳になつてから。

「断る」

「じゃあこっちにいるから。よろしくねー」

無視ですか。俺に拒否権はないんですか。ないんですねわかります。

「……やっぱ面倒事じゃねえか……」

「それが旦那の生きる道」

面倒事を一手に引き受ける人生なんて嫌じや！

「ああ、そつそつ

「なに？」

「……酔っぱらつてるからって、襲っちゃ駄目だよ？本人の同意…

……意識がはつきりしてる時にしつかり確認しないと、そういうことしたら？」

しねえよ！俺をなんだと思つてんだ！？

「男は皆、狼なんでしょ？本で読んだよ？」

「何の本じゃ！？そういうのは……そう！一部！清水みたいな一部の男子だから！」

「そこで俺をたとえに出すのは、悪意があるからと理解していいか

！？」

「だつて事実じゃん」

狼には違ひない。

「これは心外！おかしいよな！皆一三井の返答は明らかにおかしいよな！」

「いや、全然」

「苛めだ

……

……そう思うなら日頃の行動を改めろ。人の印象は日頃の行動で  
決まるもんだ。

## 第八十九話 拉致

「きやはははー、なおくん飲んでるー？」

……数少ないこのクラスの常識人が壊れた時、俺はどうすればいいんですか。

「三井君、あとは任せたよ」

ちょっと待て。

「……なぜこうタツミの人格が崩壊しているのか、話を聞かせてもらおうか」

「……お酒つて怖いよねー」

「とりあえず酒は二十歳になつてからしか飲んではいけない、そういう常識を知らなかつたのか？」

「そんな形式的なもの……」

「形式的なものでも守らなかつた報いを、なぜ俺が償うこと?」

「それは……そう、辰美ちゃんが呼んでたんだよ」

「今のは?」

今言い訳を考えたとしか思えんのだが。

「それになんだ……この壊れたタツミの相手を、俺一人がするのは無理あるだろ?」

「大丈夫。辰美ちゃんは三井君一人いればお腹いつぱいになるから」「わー、無責任な発言を堂々と言いやがりましたよ、この女子。その無責任さが今の状況を生み出したことを、まだ理解できやがりませんか。

「んもー、なおくんー、アキちゃんとばっかりお話ししてないでー、こっちに来てよー。きやはははー」

……うん、最後の笑い方、あれはもうアウトだ。<sup>トニフルブレ</sup>三重殺なみにアウトだ。まあ期待してなかつたけどね!

「ほりほりー、いいからこっちに座つてー」

そう言ってタツミは自分の横の席をバンバンと叩いた。……そこ

に座れと？酔っぱらいの酌を俺にしろと？

「嫌だ」

「はいどうぞー」

「石井てめえ！？」

「人身御供は旦那一人で十分だな」

「義人まで！？この裏切り者！」

「何言つてるのー？」

「だから仲間である俺を売つて……お前たちには良心の呵責がないのか！？」

「旦那が女の子と一緒にいられる機会を『』える……友達思いのいいやつだなあ、俺たち」

「現実リアルから目を背けて、妄想で生きよつとしてるお前らが何を言つか！？」

「む、旦那。それは違うぞ」

「……すまん、親しき仲にも礼儀ありだな。少し言いすぎた」  
「一次元で生きようとはしてないよな……趣味なだけで。感情が高ぶつて悪いこと言つたな……」

「そうだよー。僕たちにとつての現実は一次元なんだからー」

「訂正箇所そこかよ！？」

「駄目だこいつら。もはや矯正不可能なほどに毒されてやがる……！」

「まあそんなわけでー」

「逝つて来い、旦那」

「待ちやがれダメ人間一人ー！」

両脇を二人に抱えられ、タツミの席の横に縛り付けられた俺は、誰から見ても惨めだろうな……。もうヤダ、こんな扱い。

## 第九十話 拷問

「ねえねえなおくん、面白いダジャレ思いついたよー。くつ  
ふふふ……^マッカーサー元帥がキスされて、真つ赤ーさー^  
うふふ^」  
。

「ふふ……また思いついた…… ポカリで殴られた。ポカリ。う  
ふふふふ」  
。

「聞いて聞いて、なおくんと、腕をなお、組んでる <sup>く</sup>ふふ  
ふふふふふ……」

誰か……助けてください……。

前に幼なじみ四人で飲みに行つた時にも思ったのだが、タツミは酒に弱すぎだろ……。前の時は一気に飲んで、すぐに酔い潰れて寝たからよかつたものの、今日は違うらしい。誰がここまで飲ませたのかは知らないが、壊すなら最後まで責任は取つてください。心からのお願いです。

「ふーんふんふんふーんふーん」

この酔っぱらいは氣分上々（鼻歌で学園天国を歌つてる）だし、俺を開放する気はさらさらないらしい。打ち上げとは楽しむためのものだと思つていたが、どうやら違うらしい。こんな状況で楽しめる人がいたら、ぜひ見てみたいものだ。てか代わってくれ。

「んー？ なおくん楽しんでるー？」

「……こんなで楽しめてるなら、俺の人生はもっとバラ色だった  
だろうな」

残念ながら、俺は義人たち（頭の中がお花畠でいっぱいの方々）  
とは違う。いい意味でも悪い意味でも。

「私と一緒に楽しくないんだ……」

さつきまでケタケタと笑つてたかと思えば、今度は急にローテンションになつてしまつた。……周りからの視線も痛いのだが、俺が一体何をしたといつんだ。悪いことなんてしてないし、事実を言つただけなのに。……俺、悪くないよな？ 非難されるべきじやないよな？

「……そんなことないぞ？」

少なくとも普段は。

「……そんなこと言つて……嘘なんでしょう？ なおくんなんて嫌い……」

あー…じつじつと酔つぱらいは感情の起伏が激しいかな…鬱になつたらとことんまで鬱になつて人の言葉を素直に受取らつともしないし…面倒くさになあ、もう…

「ひそひそ……」

「ひそひそ……」

「周り！ 聞き耳を立ててるんじやねえ！ なに「じつ最低だな」みたいに軽蔑してんだよ！ ？」

「じつ最低だな……」

「三井君、最低……人の風上にもおけない……」

「死ねばいいのに……」

「だからと書いて壇にだして言わないでくれよ！ へこむからー…あと

最後！ 明らかに言つすぎじや！ 終いにや俺も泣くぞー！？」

俺が悪い、そういう雰囲気が充満していく部屋は、俺にとつてさらには居心地の悪いものへと変貌を遂げていくのだった……。

## 第九十話 拷問（後書き）

メッセージにて、北高の場所を問われました。せっかくなので答え  
ると、愛知県東三河の高校です。モデルの高校（てか作者の母校）  
がそこなので。田舎も田舎ですよー。

## 第九十一話 酔狂

「だいたいねー、なおくんはー、もつと身だしなみに気を使つべきだと思つんだー」

今度は説教上戸か。決めた。俺、将来酒はほじほどにしか飲まいようにしよう。こんな迷惑な人種になる辛さを思えば、酒を飲むことで得られる楽しさなんて微々たるものだ。

「旦那ー。あそこまで壊れる人なんてそうはないから。そこまで神経質にならなくてもいいから」

「うるさい。お前ら変人が酒飲んでああなるなら納得はいくが、常識人だと思っていたタツミがあそこまで壊れるんだ。酒は麻薬の一種だ。俺は今日からそう認識する。

「聞いてるのー！？ そんなんだからねー」

「はいはい聞いとるつて。つまりは普段から身だしなみに気を使えばいいわけだな？」

酔っ払いの言うことに賛同しておけば、この場は丸く收まるだろう。もちろん口だけで、俺はそんなことをする気は毛頭ない。時間がもつたないし、そもそもくせ毛だからいくら押さえつけても違う気配が微塵も見られないからだ。別にいいじゃん、人は見た目だけじゃないんだし。

「三井ー、一時期 人は見た目が九割 つて本がはやつたよねー」

そんなもの、見た目が勝ち組な人たちの自慢だろ。大体、俺の服装はきちんとしてるから問題ない。普段着はユニークロで十分だ。

「なおくん！そこー！」

「どこだ。

「普段着も含めて、身だしなみに気をつけるべきだと、私は言ったいの！」

そんな熱弁をふるわなくても。冷静になれよ。……酔っ払いに言つても無駄か。

「普段着から格好よくしておけば、なおくんは間違いなくもてるからー。」

俺の人生で、そんなことを言われる日が来るとは思わなかつたな。酔っ払いの言葉だし、信憑性は薄いが。

「はいはい、じゃあこれからは注意して、できる限りモモるよう努めいたしますよ」

「それは駄目ー。」

……一体俺に何を求めるんだ。

「格好いいのは私の前だけでいいからー他の女の子に媚を売る必要はないからー！」

媚？身だしなみを整えるのと媚を売るのと、ビリュ関係が？

「わかつたら返事ー！」

「……はい

「声が小さいー。」

「はい」

……これからタシ//と余つときこせ、身だしなみを整えんといかんのか。……学校行くのにわざわざ髪とか整えるのは……面倒だなあ。

「よくできましたー！」

「うわー？」

返事をした後、タシ//に抱きしめられてしまつた。羞恥プレイもれる」とながら、タシ//の体が当たる感触が何とも恥ずかしい。

「おおー、熱いねえー！」

「もうくつついちゃえよ

「え？あの二人付き合つてるんじゃないの？」

付き合つてないよー捏造すんなー

「にへー

それでもタシ//は、何だかわからんが幸せそつだつた。

## 第九十一話 酔狂（後書き）

名古屋に行つてくるんで毎日更新がたぶん止まります。夏休みだし  
……いいですよね？アクセス数も増えませんし。

……多少愚痴が混じつてしまい、申し訳ないです。

## 第九十一話 交渉手段

「ほり、タツミ、いい加減起きる。もつお開きだぞ」「……す……す……」

駄目だこの人。完全に酔いつぶれよつた。

「三井、見せつけるのはもういいだろ？ てか止めてください」

「そりだそりだ。それ以上にちゃつかれると自制心が利かなくな  
る」

そう、よつによつてタツミは俺にしがみついたまま熟睡してしまつたのである。離れようとしても、意外と強い力で離れず。無理やりに払いのけようとしても相手が女子である以上、そこまで手荒にはできない。大体女子が相手だから変なところを触るわけにもいかない。他の女子に頼んで離そうとしても、面白がつて取り合つてくれない……と八方塞がりな状態なのである。男子は殺氣立つてゐし、俺に一体どうしろと言つんだ。俺が何か悪いことしたか？

「全くけしからぬー（パシャパシャ）」

「ほんとだぞ、旦那。もつと周囲の視線といつもの理解すべきだ（ジー）」

「お前ら一ヤーヤしながら写真とかビデオとか撮つてんじゃねえ！ 行動と言葉があつてないんだよ！ そもそもその写真とビデオ、何に使つつもりだ！？」

「脅は……友好的交渉のためだよー」

「温厚でない本音が口を突いて出ちやつたよー聞いたかみんな？」

「……さあ？ 聞こえなかつたなあ」

「聞こえなかつたから、一枚俺も取つておこう」

「携帯で写真撮るな！ お、タツミ！ ？ やばいことになつてるぞ！ 起きろーこのままじゃ大変な事態に発展しかねん！」

「……ふえ？」

「起きたかー？」

「……なおくん、気持ちいい……」

起きてねえ  
！」

「辰美ー。大胆発言だねー。「気持ちいい」なんて。あらあらまあまあ」

事態悪化ー男子のボルテージも上がってるしー。  
「もうお開きだろー?早く帰ろうぜー!」

「旦那があからさまに沈静化を図ってるけど、どうする?」「これ以上からかってるとー、本気で泣きそうだしねー。もちろん三井がー」

泣きそう、じゃない。もう若干泣いてる。

「よつこい庄ー」

そのネタをわかるのはもう少し年齢層が上だ。

「……何をしてる」

「え? 旦那の肩に石川さんを乗せてるんだけど?」「それで俺にどうしようと」

「送つてつてあげなよー」

「俺自転車なんだけど」

「飲酒運転を石川さんにさせるとつもりか?」

「歩いたら結構家まで距離あるぞ」

「大丈夫。旦那の体力なら」

そういう問題じゃねえよ。

「ああそつそづー」

「送ることは決定なのか? そうなのか?」「

「送り狼にならないようになー」

「そう思つなら別の女子に送らせるよー」

## 第九十一話 交渉手段（後書き）

名古屋行つてきます。草津在住ですが、友達へのお土産はひこちゃんグッズ（バイトで彦根に行つたとき買つた）。これでいいのでしょうか？

## 第九十三話 結局

「……本気で送らせる気か、お前ら……」

「冗談であつてほしかつたが、クラスメイト達は本気だつた。相変わらず世界は俺に冷たいのである。

「僕たちは用事があるからー」

「用事?」

そんな大切なものがあるならぜひ聞かせてほしいもんだ。

「二次会」

「……不公平じゃね」

「と三次会と四次会と五次会と六次会と……」

「なげえよーお前らどれだけ遊び呆けるつもりだ!」

アホすぎる。

「……これから一時間以上時間をかけて、酔いつぶれて動けないタツミを連れて行かんのか……」

そうかと思うと、歩く前から随分と疲労感が出てしまう。現在時刻は十一時。……うん、下手打つて警察にでも見つかれば、補導されること間違いないし。洒落にならん事態にもなりかねないね。その可能性を皆に指摘すると、驚いたような反応が返ってきた。

「……ひょつとして、かなりヤバイ?」

「ひょつとしなくてもヤバいわ!全く考慮せんかったんか!?」

馬鹿野郎ばっかりか!俺とタツミの人生変わるぞ!

「……まあ大丈夫。手は打つておくから、とりあえず旦那は帰れ

「……話聞いてたか?」

帰るのがやばいという話だ。

「俺は嫌だからな!」

「……くやしい……俺は無力だ……」

タツミを肩にかけた状態では、二次会に行くクラスメイトを追うこともままならず、結局一人取り残されることに。仲間意識つてもんがないのか！……それとも俺は仲間じやないと？

「とりあえず帰ろつ……俺にはそれしかできない……」

どじまつても捕まる可能性が否定できない以上、少しずつでも歩く方が建設的だ。……そうでも思わないことにはやつてられない。後ろ向きな考えは悲劇しか生まない。

「……ん……」

「タツミっへー」

「……なおくん……もう……離れないで……」

「どつした？」

「……ずっと……一緒に……」

悪夢にでも苛まされているのか。タツミの眼からは涙がこぼれていた。

「……あ……」

「気が付いたか？」

「……ここ、どこ？」

「宴会からの帰り道。お前今までずっと酔いつぶれてたんだぞ？」

「……ごめん、意識がなかつたみたい」

「まあ、構わんよ」

「今のは何！？気になるよー」

「知らないほうがいいことだ」

タツミがあの時のことを見つたら、発狂しかねん事態に陥るだろうし。

「……つづー、気になる……」

だつたらもう一度と酒は飲まん事だな。その方がお互いのためだ。

## 第九十三話 結局（後書き）

名古屋から帰つてきて早々に書きました。友達んちでハイになつてたんで、今、調子がおかしいです。誤字脱字があつたらご連絡を。

……いつもまして毎日更新を続けた作者を、誰か褒めてやってください。

「……とつあえず、涙ふけよ」

「……え？……あつ……ほんとだ……」

タツミ自身は涙が出ていたことに気づいていなかつたよつだ。慌てて涙をぬぐつたが、その慌てた様子が余計に気になつた。

「どんな夢見てたんだ？少しうなされてたぞ？」

楽しくなるための酒で、嫌な気分になつたんじや本末転倒だ。これだから酒は……。未成年の飲酒はダメ。ゼッタイ。

「……言わないとダメ？」

「俺の横で泣かれてたんじや、俺が原因かと思つだらうが。ちゃんと説明しろ。出ないと俺の目覚めが悪い」

「……原因はなおくんだよ」

「俺のせいかよ！」

「……俺、何した？揺らし過ぎたとか？もしくは……ま、まさか変なところに触つちましたとかか！？だとしたらすまん…」

氣付かないうちにセクハラしてたとかなら洒落にならん…この状況（夜道で男女二人きり。しかも女性は酔いつぶれてて意識なし）では、俺に何の悪意がなかつたとしても信用度ゼロだ！訴えられた負けるし、何よりタツミに申し訳ない！一生消えない傷になつたらどうしようもない！」こには謝る一手に尽きる…

「申し訳ない！悪気なんてなかつたし、触つてしまつたなんて氣づきもしなかつたんだ！信じてくれ、俺はそんな人間じやない……」「落ち着きなよ、なおくん。そんなんじやないって」

「……なんだよ、それなら早く言つてくれ」

勘違いで寿命が数年は縮んだぞ、まったく。

「……あのね、なおくんがまたいなくなる夢を見たんだ」「いなくなる？」

「昔、一度私の前からいなくなつたじやない？」

そうだな。親父の転勤でこの町に来たから。

「その時も物凄く悲しかったんだけど……今、また急にいなくなる夢見ちゃって……すゞしく悲しくなっちゃった」

「……そうか。

「たぶん、私の中では昔よりも、なおくんの存在が大きくなつてゐるんだと思ひ。……だからね、……突然いなくなるのはもう嫌だよ」  
何もなくても一年後にはバラバラになるだろとか、クラス替えで疎遠になるかもしれんだろとか、笑い話で済ますこともできた。  
……ただ、タシミの目が真剣で、かつ潤んでまたすぐにでも泣きだしねうからだろ。俺らしくもなく、眞面目に、後から考えると悶絶するほど恥ずかしいセリフで答えた。

「……わかった。俺はもう一度とお前の許可なしこそ、いなくなつたりしない。お前の傍について、少しくらいなら心の隙間を埋めてやる。これから……北高を卒業するまでに、俺自身でなく、思い出だけでの隙間が埋まるよ、濃厚な日々を送らせてやるから覚悟してけ」

## 第九十四話 訳（後書き）

夏コミの資金ってどれくらい持つてくものなんでしょうか？最終日だけの参加ですが。

## 第九十五話 拒否権

「……おい、直樹？ 今日も学校じゃないのか？」

「そりなんだけれども……行きたくない」

大学は今、夏休み。そのため、実家であるついに滞在したままである。まだ数日は堅苦しい思いをしなければならんと思うと……ぞつとする。それは義人も同じだろうが。しかしその家にいるよりも、今は学校に行って、あいつに会つ方が気が重い。

「ついにうちの愚弟も引きこもりか……将来の一ート候補生だな」

「……」

突っ込みたいのは山々だが、それもしたくないほどに意氣消沈していた。

「今日は……学校を休むかな……」

「そんなこと、私の目が黒いうちは許さんぞ」

「……後生ですから……」

「そんなに嫌なら理由を言つてみる、理由を。正当な理由なら許してやらんこともない」

なぜ学校に行くか行かんかの許可を実姉に求めんといかんのだ。

「それはことわ」

「言え」

……拒否権すらないんですね、わかります。

「それは……かくかくしかじかで……」

「成程な」

「……わかつていただけましたか、お姉さま」

「昨日、辰美ちゃんに慰めの言葉をかけたと。そのセリフが今になつて恥ずかしくてたまらんくなった。顔を合わせるのなんて到底無理だ」と。そう言いたいわけだな」

「その通りで」「やります」

「この羞恥心を言葉で表しきるのは不可能だが、だいたいの概要是これでわかつただろ？」「それで姉ちゃんも許してくれ……」

「ふははははは……」

「大声で笑うだと！？」

「おもしれえ！青春真っ盛りじゃねえか！わたしや嬉しいよ、二人がそういうこそばゆいシチュエーションを作ってくれたことが！」

「一人で盛り上がってんじゃねえ！」

「そうだな！望にも連絡とつて一人でこの感動を共有せんとな！」

「事態を悪化させようと/orするんじゃねえ！」

「（ガチャ）もしもし望？実はねー」

「早速かけてやがる！行動早すぎだろ！」

「ふむふむ……そつちもか」

「そつちも？」

「わかつた。必ずこっちも学校に向かわせる……手抜かりはないよ、心配すんな」

「そう言って携帯を閉じると、おもむろにこっちを再び向いて、こう言つた。

「辰美ちゃん今日学校休むつて。だから安心して学校行け……ふつ「にやにやしながら言つても説得力ねえよ！明らかにめめつとこてんじやねえか！最後吹き出してたし！」

「田の前で会話しておいて、成功するとでも思つたのか！？今日は絶対タシミと顔を合わせないからな！」

## 第九十六話 誤魔化し

「……俺は無力だ……」

つい最近も呟いた気がしないでもないセリフを、ため息とともに再び吐き出す。姉ちゃんに反抗したところで、肉体的にも精神的にも勝つことは不可能。そんなことは生まれてきてからの十五年で、十二分に染みついてしまっていた。悲しきかな、力で押さえつけられる姉弟関係。俺の意志など少しの意味も持たないのである。

「グッモーーーン！ 旦那！」

「……朝もはよから元気だな…… いつもは朝弱いくせに……」

「そういう旦那はロー・テンションだなー。どうした？ 何か石川さんとあつたのか？」

「なつ……！ 何もねえよ！ ところで今日はいい天気だな！」

「わーお、あからさまに怪しい。そんなことで話題をそらせるとでも思ったのか？」

「絶好の水泳日和だ。県新人も近いし、調整にはいいな！」

「旦那も結局県新人には参戦が決定したしな。石川さんも喜んでたし」

「うつ……」

なんだかんだで、今回の県新人大会には俺も登録されている。標準記録が楽に切れる種目にエントリーしたのが、その結果を生んだのだが……その詳細については別の話である。

「そこで石川さんの名前に反応するとか…… 旦那、体は正直だな？ わざわざいやらしい言い方をするんじゃねえよ。

「……何のことやらわつぱりわからんな

「あ、石川さん」

「！？」

高速回避で姿を隠す俺。気分はスネークだ。

「スネークにしてはちつとも冷静じゃないな。あと冗談だから」

「冗談がよ！ からかうな！」

「そんなに面白い反応してくれるとは思わんかったからな……まあ、その反応も当然か」

「なんだと？」

「青春だなあ……」

「貴様！？ あのこいつぱずかしいシーンを見てやがったのか…？」

「俺が旦那のフラグ立てを見逃すとでも思つたか！」

「威張ることじやねえだろ！ 」次余どうしたんだよ！」

「二次会とストーカーを天秤に乗せた結果、ストーカーの方に大きく振れたんだよ」

「だから仕方がないとでもいいつつもりか！？ お前のさじ加減じやねえか！」

「反省はしていない」

「しろよ…」

「安心しろ。俺とイッキーだけだ。追つかけてたのは」

「むしろその二人が一番信用ならねえよ！」

「情報の悪用にかけてはトップクラスの二人である。信用などできようはずもない。」

「ビデオとか写真には撮つてないし」

「……フラッシュたかれた覚えはないしな」

「暗かつたのは確かだから、その点については心配していない。」

「奴らなら赤外線カメラとか持つててもおかしくないが……。」

「テープレコーダーだけだから。よかつたな、旦那。俺たちは紳士的で」

「紳士は盗聴なんてしねえよ！」

「全国の紳士（俺含む）に謝りやがれ！」

## 第九十七話 相談

「おはよー、イッシー」

「おはよー、杉田ー、三井ー」

「……おはよー、石井……盗聴したテープはどうにある……」

「三井ー？ 旦が危ない人になつてゐるよー？ とりあえす落ち着くつかー？」

「貴様が盗聴したテープを渡したら、今すぐにも落ち着いてテープを叩き割つてやる」

「ちつとも落ち着いてないじゃないか、旦那」

「やかましい。基はといえば貴様らが昨日つけてきたのが悪いんだろうがー！」

「あー、石川さんー」

「！？」

「きやー、逃げろー」

「よしきたイッシー」

しまつた！ こんな古典的體に一度も引っかかるとはー？ 平常心を失つにもほどがあるだろ俺ー！ そして石井ー！ 男子がキャーとか言つた！ 気持ちが悪い！

そんなこんなで教室に辿り着いてしまつた。……辿り着いてしまつた。

「三井？ テンションが低いな。予習でも忘れたのか」

「……原君か。今日ほど学校に来たくない日はなかつた……」

いや、予習（英語と古典）は終わつてゐるんだが。

「……？ 事情があるならあれだな。よくわからんけど、相談くらいなら乗るぞ？」

「ある人と会いたくないなら、どうすればいい？」

「その人がいる場所に行かなければいい」

「その場所が同じ学校の場合は？」

「しかも同じクラスとか？」

「そろそろ（笑）」

「諦めな」

「そんな…？ 相談に乗ってくれるって言つたじゃん…」

「泣きそうな表情で言われても…」

「助けてくれよ、ハラえもん！」

「誰がハラえもんだ」

「何か道具で助けてくれよ…！」

「……単語帳ー」

「効果は！？」

「勉強していることで現実逃避できる」

「現実逃避している間に来たらどうすんだ！」

「勝手に期待してそんなこと言われても…」

「……すまん。動搖してた」

「で？ 誰と何があつたんだ？」

「……数少ない常識人（能力値は異常だから正確には違うかもしれない）である原君なら、まともなアドバイスをもらえるかもしれませんい。」

「実は……つてことがあつてだな」

説明する間、彼は何も言わずじつくりと聞いてくれた。……そして聞き終わつてから一言。

「……今までと何が違うんだ？」

それだけ言つと、呆れた顔をして自分の席へと戻つていった。……なんですと？

「……え……それだけ？」

アドバイスは？ 助言は？ 同情は？ なんのあの呆れた表情は？

「俺には味方がいないのか……」

そんなことをつぶやく間にも、ホームルームの時間は近づいてく

るのだった。

## 第九十八話 ほろ酔い

本鈴が今にも鳴らうとする時間。扉付近から、話声が聞こえてきた。

「あれー、辰美どうしたの？ そんなところで突っ立つていないで中に入つたら？」

「あ……でも……」

「いいから入る？ おはよー！ みんな！」

副会長がテンション高く友達にあいさつをする。その後ろから必ずおずとついて来ているのは……タツミである。一人が教室に入ってきたのと同時に、本鈴が鳴り響いた。ぎりぎりまで入ることをためらつていたらしい。

「今、旦那ご指名のお客様が御来店なさいました」

「……どこから突っ込んでよいものか」

今俺に、その突っ込みどころ全てを突っ込めるほどの精神力はないのだが。

「本鈴鳴ったのに、何で健三さんは来てないんだ！」

「突っ込むべきところは、そこではない！」

健三さんが遅いのはいつものことだから！

……それが当然と思ってしまうよう、俺たちを洗脳した健三さんはある意味凄い。最低限の、担任教師としての仕事くらいはしっかりしてください。

「旦那、石川さんと話とかせんの？」

「……別に話をする必要はないだろ。用件もないし」

「それが本音か？ 素直になれよ」

「……単純に気まずいだろ。……あんなこと言つんじゃなかつた……」

「旦那も少しは酒に酔つてたんだな」

進められても舐める程度にしか飲んでなかつたはずだが、その可

能性は大きいにあり得る。そうでもないと自分の行動が信じられない。

「……くそ、こんなことなら前後を失うくらい豪快に飲んでおくべきだったか……！」

そうすれば、少なくとも今こいつして悩むことはなかつたわけである。……意識がないうちに何かを口走つたり、奇妙な行動をとつていたかもしれないが、それはそれとして。

「旦那が犯罪をしておけばよかつたと悔やむ口が来るとは思わなかつたよ」

犯罪と言わればその通りだけれども、それでも今は自責の念ばかりで心が埋まつてゐる。それならこいつそのこと と思つのも人情つてもんだらう。

「……はーい、席についてください」……「おつづく

「どうしたんですか先生？ 気分が悪そうですが

「宴会で飲みすぎまして……「おつづく」……朝から一晩酔いが激しいんですよ……」げふ

。……。

「旦那はああなたの方がよかつたと」

「……すまん。それ以上は言わんでくれ」

人間、あそこまでは落ちたくないものである。

……お願いですから、仕事場（しかも学校）に「一晩酔い」（今にも吐きそう）で来ないでください……。

今日一日は、ずっとモヤモヤした気分で過ごしてしまった。いつも授業に差しさわりがあるほどでもなく、勉学に励む高校生という観点からすれば問題はなかった。授業に集中している限り羞恥に苛まされることもない。休み時間の間もこれから授業の予習に当たるので、タツミと話すということもなかった。今は放課後、部活がもうすぐ始まるのでプールに向かわなくてはならない。

「旦那、このまままでいいのか？」

「……このままって何が」

わかつてはいるが、とぼけてみる。なんとなく自分が女子のことで乱されていると、認めたくなかった。

「わかつてるくせにー。石川さんのことだよー。部活でも顔合わすのにー、仲たがいしたままじゃいやでしょー？」

「そろそろ、イッキーの言つとおり。早いとこ仲直りしとけってそもそも仲たがいなんぞしとらんのだが。

「そういう問題じやなしにー。まあいいからいいからー」

「舞台は俺たちでセツティングしておくから。礼はいらないぞ？」

「……頼んでないのに……」

「じゃあー、水泳部の部室に行こうねー」

「は？ 練習に行くのか？」

「そうじゃなくて、石川さんはもう向かつたぞ？」

「そうなのか

意識して視界に入れないので、タツミが教室からいなくなっていることにも気づいてなかつた。

「何かと理由を付けて他の部員を追い出しつかうからー。安心してー人きりで話し合いなよー」

「これほど信用ならない安心はないな

「ど、どうして！？」

「お前らの今までの行動パターンを思い返してみろや！」

「録画されたり録音されたりするのは当たり前。そんな頼れる親友たちに、俺は信用などという大層なものをしていない。……とか、これで信用しろといつ方が無理だ。」

「……まあ、今回は録画も録音もしないぞ？」

「本當か？」

「信用1%、疑い99%で聞き直す。」

「本當だよー。たぶん」

「たぶんってなんだ。確實にするなよ。」

「でも旦那？その様子だと、話し合ひの氣にはなったみたいだな」

「…………」

「義人のぐせに鋭い。」

「バーカ、俺が何年旦那の親友やつてると思つてんだ。やるときはしつかり決めるよ」

「うんうんー、応援してるよー」

「…………こいつらは。」

「…………ありがとな」

「なんだかんだで俺のことを考えていてくれるんだな

つきましては

「ん？」

「この前のテープの販売について考えてるんだけビー、ビービー思つ

？」

「アホなことを考へてるんじやねえよー」

義人と石井、一人の工作活動の成果だらう。現在、部室にいるのは俺一人。あの二人が言つには「あと少し待つててー。石川さん連れてくるからー」「気合いだ、旦那。気合。スピリチュアルパワー」とのことなので、もうそろそろタシミも来るだらう。ただ義人、気合いでなんとかなるなら苦労しない。

「……なおくん、いる?」

「コンコン」とノックの音が響いた後、タシミの声が聞こえた。どうやら向ひの心の準備も整つたようだ。

「あ、あー、入つていいぞ」

「……失礼します」

うつむきながら入つてくるタシミ。やはりまだ、俺の顔を見るのには抵抗があるようだ。

「あー」

「……うん」

「そのー」

「……」

……駄目だ、言葉にならない。しかし、俺がなんとか言わないと話は始まらないし……。

「……なおくん」

「はい?」

悩んでいると、タシミから口を開いた。……震えながら。

「あのね、昨日は……その……送つてくれてありがとう」

「あ、ああ……」

「それとね、あの……昨日のあの言葉だけ……」

「待て。その先は俺が言つ」

「…」

これだけタシミが勇気を振り絞つてるんだ。俺がここで黙つてい

てどうするー男だろ、三井直樹ー……と、俺もなけなしの勇気を振り絞る。

「昨日は……俺も酔つてたみたいだ。あれは場の空氣に流されて言った

「…………」

「ただし、だ

「…………？」

「場の空氣に流されたとはいへ、思ひでなこことを言へるほど俺は器用じやない。……お前と一緒にタツミと一緒に趣い出を作つていきたいと思ってこる、その氣持ちは本当だ

「…………！」

「できれば、これからも今まで通りでいてくれると助かる。……と、まあ……これだけだ

今まで通り、一緒に笑い合つ関係でいたい……それを言うだけにこれだけの労力が必要とは。自覚はしていたが、俺は想像以上のチキン野郎だな。

「…………」

「どうした? タツミ!」

「…………やだ……」

「なんだつて?」

「今まで通りなんて……やだ……」

「…………つてことは、もつお前に付き合つたれると、結構ショックだぞ、それは。

「そうじゃなくてー私は…………」

「私は?」

「なおくんの彼女になりたいー」

「…………！」

空いた口がふさがらない、とはいのうとを言つのだなつ。

「……す、すまん。もう一度言つてくれ?」

「……私は、なおくんが好きです。付き合つてください」

……まさか。タツミが、俺のことを好きだと? 幼なじみで、俺が

普通に話せる数少ない女子、石川辰美が俺のことを好きだと?

「……マジでか?」

「……」

顔を真っ赤に染めて俺を見つめるその様子に、嘘偽りはなそつ  
だつた。

「ちょっと待つたあ

！」

「うお！？」

「バン！」と大きな音を立ててドアが開いた。何！？何が起きた！？

「つてお前保護者じやねえか！なぜ今、ここにいるーー？」

「ある情報筋から、先輩の今の状況を聞いて飛んできたんです！」  
ドアの向こうを見渡しても、あの二人（ほぼ100%、その情報筋）の姿は見えない。……ああ、確かにあいつらは盗撮も盗聴もしてないな。……余計な爆弾を投下しただけで。

「……いしかわせんぱい？」

「な、何かな古木さん？」

保護者から妙に大きなオーラが発せられているよう見えるのは  
気のせいか。……気のせいじゃないな……。

「なーに先に告白してるんですかあ？」

「あ、あのね、落ち着こう？古木さん？」

「こーんなに落ち着いてるのに、どうしてそんなこと聞くんですか  
あ？それに……」

「そ、それに？」

「私が落ち着かなくなるようなことをした覚えもあるんですけどあ  
ー？」

「ひー！？」

明らかに切れてるじゃないか。タツミが怯えてるぞ、保護者。

「どうして保護者が怒ってるんだ？タツミが……その……俺に……  
こ、告白したくらいで」

「動搖しまくってるじゃないですか！告白されてー！」

「だからそれがなぜお前に関係があるーー？」

「先輩のことが好きだからですー！」

……。

「…………」

「…………」

「…………つ…………？」

「保護者の悲鳴が部室中に響き渡った。…………ドア閉めておいてよかつたなあ…………。」

「い、今のはじです！——カソ——カウントです！」

「…………マジで？」

「マジですけど——マジですけど忘れてください——計画があ……？」

「計画つてなんだ」

「先輩メロメロ大作戦…………少しづつ私の虜にしていく作戦…………って何言わせるんですか！」

「…………わかった。これは夢だな。この俺がこの一人から告白されるなんて…………あり得ないよな…………。ハハ、今までそんなそぶり全く見せなかつたし」

「…………ドス。」

「…………ぐお…………何しやがる…………」

「…………みぞおちは反則だろ…………。」

「…………痛いですか？」

「…………痛いわ！…………といつことば…………？」

「…………うん…………」

「…………夢じやないのかよ！？」

「…………そうですよ！」

「…………今ので余計忘れられなくなつたわけだが」

「…………しまつたあ！？」

「…………本気なのか？」

「…………俺にいいところなんぞほとんどないんだが。」

「…………はい」

数秒悩んだ結果、覚悟を決めたのか保護者も頷いた。

「私は先輩が……す、好きです。か……彼女にしてください！」

「ままま待て、冷静になれ保護者！」

「……なおくんが一番冷静になるべきだと思つな……」

「」の場にいる三人の中で、まだ一番落ち着いているのはタツミだろ？ それでも余韻が残つてゐるのか、ほほを染めたままだが。「冷静でなんていられるもんですか！ 好きな人に告白したんですから！」

確かに、顔真っ赤、手をぎゅっと握りしめた様子からは冷静さを感じ取れない。ほつといたらこのまま蒸発してしまうんじゃ？ というような興奮の仕方だ。

「落ち着くには……そうだ、深呼吸！ 深呼吸をするんだ！ 保護者、息を吸え！」

「落ち着く必要なんてないです！ いいから先輩は、私の想いを受け止めてください！」

「わ、わかっとする……」

こんなこと人生で初めてだから、少しばかり氣をとり乱しただけだ！ 俺はすぐにでも冷静になれるぞ！

「……なおくんこそ深呼吸しなよ……」

数度、深呼吸をしてどうにか冷静さを取り戻した俺。いつものクールな俺に少しほは戻れた……はず。

「……タツミも保護者も、正気なんだな？」

「……うん……」

「……はい……」

「」の二人とはいえ、さすがにこんな大がかりなドッキリは仕掛けないだろう。たとえ義人と石井が裏で暗躍してゐるとしても、だ。あいつらは人の心を弄んで、後に禍根が残ることをやらない。あく

まで皆が笑つて終わりを迎えるよう図るだらう。」

「……つまり、俺はこの告白に答えなければならんのか……」

「べ、別に今すぐにじゃなくともいいんだよ？私のこの気持ちを知つておいてくれたら……」

また恥ずかしさが込み上げてきたのか、タツミは答えを急かさなかつた。もしかすると、怖気づいたのかもしれない。

「私は早く答えが欲しいです！先輩！女性を待たすものじゃないですよ！いいからイエスかノーかで教えてください！」

まだ顔が赤い保護者は、タツミとは逆に、答えを急かしてきた。時間がたてば、それこそどうかなつてしまいそうだからだらう。

「……正直な気持ちを言うべきだらうな……」

この二人の真摯な思いに応えるよう、口を開いた。

「……悪いが、現時点では俺は誰とも付き合いつ氣はない  
その言葉を発した途端、二人が目を伏せたのがわかった。しかし  
それには構わず、言葉を続ける。

「理由があつてな……女子と付き合いつとか、そういう関係を持つこ  
とが怖いんだ」

それは小学校の時に生まれたトラウマ。いつかこれが癒されるの  
かも、ずっと女子に怯えを持ったままであるのかもわからない。

「……なおくん、その理由は……？」

「すまんが、言えん。これは誰にも言つてないことだから、聞いて  
も無駄だ」

「杉田先輩にも、ですか？」

「……義人にも、だ」

義人になんて絶対に言つわけにはいかない。これは墓場まで持つ  
て行く秘密だ。

「……まあ、そういうわけで俺は誰とも付き合いつことができないん  
だ。お前らの気持ちは嬉しいんだが……応えられない。本当にすま  
ん」

俺の数少ない（というか実質一人のみ）女子の友達をこんなこと  
で失うんだな……と寂しい思いに囚われていると、保護者がおもむ  
ろに口を開いた。

「……先輩、先輩には確か彼女がいた経験はないんですね……？」

「ああ。告白されたのだつてこれが初めてだ」

「……それでもつて、私たちを嫌いだとか、他に好きな人がいると  
かでふつたわけじゃないんですね？」

「ああ。むしろ好きな女子を三人選べと言われたら、確実にお前ら  
は入るな。それだけお前らは……タツミと保護者は俺にとつて大事  
なんだ」

……む？保護者の目がいきこきとし始めたよつて見えるのは俺の

目の錯覚か？

「それなら……」

「ん？」

「私が諦める必要なんてないじゃないですか！」

「はい？」

「いや……だつてだな……？俺がこれから女子を苦手としなくなる保証なんてないんだぞ？他に好きな人を見つけた方が……幸せになる」

「そうですね。石川先輩はそうしたほうがいいですよ。その方が賢い選択です」

「……え？」

「保護者はー？」

「私が先輩以外を好きになるなんてありえません。今の私のポジションにいれば、先輩の事情が解消された時、彼女になれる可能性が一番高いですから、このまま……もしくはこれ以上の存在になつてみせます！」

「お前馬鹿だろ！？保証なんてないぞーー？」

「俺のトラウマが消えるかなんて……本人でさえわからないんだから。」

「馬鹿でいいんです！先輩を好きになつた時点で十分馬鹿だと承知してますから！」

それを本人の前で言つのは、どうかと思つけどなー！

一方、タツミは保護者とは違い、すぐには動かなかつた。利害を計算でもしているのか? だとしたら諦めるのも時間の問題だろ? 「タツミ、お前はこの保護者バカと違つて聰明だろ? だから、新しい恋愛を始めた方がいいことがわかるな?」

「……なおくんは、私のこと好き?」

「な、何つて?」

「だから……好きか嫌いかのどっち?」

……一者択一かよ。

「……まあ、それなら好きに入るな。ただ、恋愛感情を持つての好き、ではないぞ? 義人を好きとか、そういう友人としての好き嫌いだ」

誤解を生んでしまつてはいけないと想い、付け加える。しかしそれでも、タツミは意思を変えようとしなかつた。

「……それなら、これからなおくんが私に恋愛感情を持つ可能性も十分にあるよね?」

「……お前ら、俺の説明聞いてたか?」

「説明を理解したからといって、はいそうですかと違う人を好きになる……そんなことなんてできなによ」

……そういうものか?

「それに……」

ちらりと保護者の方を見てから、さらにタツミは続ける。

「古木さんよりも、私の方がこれからなおくんと一緒にいる時間は多いしね」

「ああーっ! そういうこと言つたですか! 宣戦布告と受け取つて構いませんねー?」

「別にいいよ? 私の方が有利な状況なのには変わらないし……正々堂々と争おうね?」

「なあくんは、私のこと好き?」

「自分の方が有利だといっておきながら、正々堂々とはビックリ！」  
見ですか！だからといって退きませんけどねー受けた立ちはます！」

……俺の意志を無視して話が進んでいる……。

「なおくん、今度から一緒に学校に通おう？ なにせ一緒に学校に、  
しかも同じクラスにいるんだから！」

「なおくん、今度から一緒に学校に通おう？ なにせ一緒に学校に、  
の日は一緒にいましょうね！」

「なおくん、同じ水泳部だもんね！ 一緒に練習して……一緒に帰る  
ことだってできるね！」

「先輩、私が今度からお弁当を作つてきましょーかー？ 料理ができる  
女性つてよくないですかー？」

「むむむ……」

「うう つ」

アピール合戦に続き、睨みあいまで始まってしまった。誰か！ 誰  
かこの事態を収束できる人物はおらんのか！ ？

「なおくん！」

「先輩！」

「はいなんでしょう！ ？」

おおう、あまりの迫力に、どもつてしまつたじゃないか。

「絶対に振り向かせてみせるからねー！」

「先輩を私の虜にしてみせますー！」

……闇のゲームとはこうこうこうとを言つんじやなかろうか。

じつして高校一年の秋、俺は一人の女子に奪い合われることにな  
つたのだった

## 第一百四話 始まり（後書き）

俺たちの戦いはこれからだ！……みたく終わるつかと考えたのはここだけの秘密です。でもとりあえず一部は完……かな？あとは番外編を書いて……そのうちまたアンケート取ります。

これは三井が告白された日よりも以前の話である。この日保護者」と古木瑠璃は、親友である山本岬（健三さんの娘。吹奏楽部）と談笑しつつ、北高へと向かっていた。

「それでね、岬？先輩つたらおかしいんだよ？私がいくらアピールしても全然気づいてくれなくってね？鈍感もここに極まれり！って感じで」

親友にほんと不満のない私ですが、この恋愛話の長さには閉口します。恋は人を盲田にするといいますが、ここまで極端なもの困りものです。

「はいはい、その愛しの三井先輩とやうの話はいいですから。私は接点ないですし、その上興味もありませんから。もつとも

「もつとも？」

「そのひどい先輩のことを語る、ルリの顔のにやけっぷりは見る価値が十分にあるのですが」

いつもはクールビューティーに分類されるであろうルリも、この表情では同一人物には見えません。

「！？そんなにやけてる！？」

「ええ。それはもう……口の端は上がりっぱなし。頬は赤く染まる。幸せそうな様子で結構です」

これはこれで、可愛いことには可愛いのですが。ルリに告白した男子（全員辛辣な言葉で撃沈させられた）はこの様子を見たらどう思つことでしょうか？

「……ちょっと自重しないと……」

「その言葉も何度聞いたことか。そもそも私の記憶では、卒業して同じ高校に入るまでは会わない、そう熱弁をふるつていたはずです

が？」

「うう……仕方ないじゃない！私が暴漢に襲われているところを、颯爽と現れた先輩がボツコボコにして、「大丈夫か瑠璃？怪我不是ないか？」と優しく解放するなんていう劇的な再開を果たしたんだから！惚れ直しもするしー会いたい気持ちが抑えきれなくなるのも当然だし！」

「前回とまた話が違つてますよ。脚色しそうるのはどうかと  
“いいの！そんなに違わないから！”

「これだけルリをおかしくする三井先輩には、少しばかりの嫉妬心を抱きます。噂によればうちの馬鹿親が担任をしているそうですし、ルリと一緒に見に行つてやるのもいいかもしません。

「ルリ？今日は一緒に文化祭を回るのですか？」

「うーんと、先輩の出し物に行くまでは一緒に回りつつ？ただその後は……」

「ああ、愛しの三井先輩とデートですね？」

「で、デートだなんて！？まだ約束も取れてないし！？」

「手はずは整つてるのでしょう？杉田先輩とやらが暗躍しているそりじやないですか」

「……杉田先輩は事態をややこしくする天才だから、まだ何が起ころかわからぬんだよね……」

「中学にもいくつかの伝説が残つてますしね」

「ある意味人物だったようです。惜しむらくなは誤つた方向にしかその力を發揮しなかつたことでしょうが。」

「まあいいでしょ。その時間からは別行動とこいつ」と

「ありがとね」

お礼を言われる筋合いはありませんよ。自分の意志で執事喫茶に行くつもりではありますし。ついでにルリのでれでれな様子でも眼に焼き付けておきましょ。うか。

「よーし、Jのクラスの出し物に行こうか！」

「そうしましようか。楽しければよいのですが」

見れば、北高劇場（本音と建前）と書いてあります。高校でもこのような出し物なのですね。中学と大して変わらない気がします。

「はーい、開場まであと五分でーす！押さないでくださいー！」

……なぜあの人はチンパンジーのお面をつけているのでしょうか？若干不安が生まれてきました……。

「総理！なぜあの国の側から情報が来た時点で国民に発表しなかつたんですか！」

「えー、毒餃子事件の発表を遅らせたのは、捜査上支障をきたす可能性があつたからですね」

（あつち側からの要請があつたからに決まってるだろうが。オリンピックが失敗したら困るあつちの事情と複雑な政治事情が絡んでんだよ。少し考えればわかるだろうが。馬鹿か）

「被害者に対して不誠実だとは思わないんですか！」

「えー、被害者には真実をはっきりさせることが一番重要だと考えておりましてですねー」

（たかが数人のためにあんなでつかい国心証を悪くしろって？冗談じゃない。そんなことしたらお前らも困つたことになるとなぜ理解できんかな？これだから低能の人間は……）

「弱腰外交といわれていることに関して、何か一言をー！」

「われわれとしては最善の対応をしておりましてですね、これは国民の皆さんに理解していただくより他はないかと」

（特に資産のない、食料自給率も低いこの国が生き残るために、他国と敵対関係になるわけにはいかんだろうが。この記者もわかつて聞いてるんじゃないだろうな？支持率下げて総理を変えたといひで、誰も改善なんかできやせんよ）

「年金問題について、総理のお考えは！？」

「厚労省の役員が全力で対応しております。『理解いただきたい』（あーもういい加減に会見終われよ。本音と建前が違うことくらい、少し知能があればわかるだろ？酒飲みでー）

……チンパンジーの仮面を付けた人の本音と建前を話しかける、黒い劇でした。劇と呼べるかどうかもわからない、登場人物の少なものでしたが。……いいんでしょうか、こんなことして？教師も何か文句をつけましょうよ。あくまでファイクショント言い張ればいいんでしょうか？

「岬、面白かったねー」

そのブラックユーモアあふれる劇を面白いという、我が親友の感性も素晴らしいですね。ネジがどこかゆるんでいるのでしょうか？

「……確かに興味深いものではありましたが」

さすがはうちの能天氣親が勤める環境です。この学校に来年通うかもしれないと思うと……楽しみで夜も眠れなくなりそうです。

「……ニヤリ」

「岬、不気味だからその笑い方はやめといひ」  
失敬。無意識に顔に出てしましましたか。

「じゃあ岬、私はあの執事喫茶に行くから……」

「愛しの三井先輩に会いに行くのでしょう? どうぞ」自由にすっかりしょらしくなつてしまつて。これがあの先輩の前に行くと、また変わるのでですから不思議です。まあ、期を見計らつて私も行くつもりですが、それを言う必要もないでしよう。

「い、行つてくるね」

「いつてらつしゃい」

それだけ言つと、ルリは「いらっしゃいませ、お嬢様」と声がする部屋へと入つていきました。ところで、メイド喫茶や執事喫茶はどこのだなたが考えたんでしょうね。こんなことを考え付く人はよっぽど天才か、もしくは年中脳がピンク色に染まつている人なのでしょう。後者の可能性が高いと私は考えますが。

「……三分……これくらいいたてばいいでしようかね」

ルリは緊張で周りを見渡す余裕もないでしようし、問題はつちのKY親ですが……曲がりなりにも教師です。クラスの出し物に常に顔を出すはずはないでしよう。……ましてや常にクラスにいるなどと……職員室にいるに決まっています。ここにいるはずがありません。見回りをしているか、職員室にいるに決まっています。ここにいるはずが……

「いらっしゃいませ、お嬢様!」

「やあやあよく来ましたね、わが親愛なる娘よ」

「仕事をしてください」

……そんな気はしてましたけどね。なにせ私の親ですから。

「御注文をお聞きしてもよろしいですか?」

「別の人には聞きますから帰つてください。お呼びでないです」

「これで本当に教師なのでしょうか。仕事をはたしてこむとは欠片も思えないのですが。

「い」注文は?「

「……アイスティーをお願いします。ストレートで」「かしこまりました」

譲る気がないらしいので、仕方なく妥協します。意地の張り合いでしても時間の無駄ですし、いつなつた父が譲らない」とはよく理解しているので。

「ふむ……」

ルリの方を見ると、赤面しながら三井先輩をデータに誘っています。どうやらこちらには気づいていない様子。微笑ましい雰囲気を壊すほど野暮ではないつもりなので、追跡はやめておきましょう。心中で親友の健闘を祈ります。

「お待たせしました。」ゆづくりどうだ

持つてきたのもやはり父。しかし提供が終わると他のテーブル席に移動し、店内の様子を観察しているようでした。

「さて、いじつまでしているからには何か理由があるのでしょうか……」

スプーンの置いてあるナプキンの裏を見ると、案の定父の字でメッセージが書いてあるのでした。やれやれ、目的は何なのでしょう。

「クラスの見張りを手伝ってほしい、ですか……」

「どうやら父は、ただ単に仕事をさぼっていただけではなかつたようです。このような女性が多く集まる出し物。事件が起ころる確率も高いとらんでの自主的な行動のようです。自分ひとりで学校全体を守ることは不可能でしょうが、クラス一つ、自分の受け持つクラス一つならば状況すべてを把握できると考えたのでしょうか。傲慢といえば傲慢な考え方なのでしょうが、父はそれを私以外には明かしていない様子。そこで私に念のための補償として、執事喫茶に入ってきた人數をカウントしておいてほしとのことです。

「このクラスに関わりのない実の娘に手伝わせると、困った父親ですね」

手伝ってくれたらお礼として何か一つ願いをかなえてくれるそうです。しかしながら、あれのできることなどたかが知れています。「でもまあ、手伝うことにしましょうか」

やることもなく、暇であることが理由の一つ。そしてもう一つの理由は、これが私の親友の助けになる可能性があるからです。ルリはあの先輩が幸せなら、幸せになるでしょうからね。

「瑠璃さん、あの男が入ってきたのは何時でしたか?」

「十一時半ですね」

「それからその時点で何人女子客がいたかわかりますか?」

「えー、三十一人です」

「その後、あの事件が起ころるまで何人が入ってきたかわかりますか?」

「……」

「……」

私は父ほど記憶力がよくないので、メモを取つて数えておきました。……まあ、父の能力が異常なだけで、私も上の中くらいの能力はあると思うんですけどね。

「ふむ……私の記憶と一致してますね。これで確証が持てました。ありがとうございます」

まさかこんな事件が起つことは思つていませんでしたが、父の保険が功を奏したのですね。最悪の事態は免れたようで、よかつたです。

「それでは私はこれから始末してくるのですが……何かしてほしいことは決まつていますか？」こうなつた以上、大抵のことはしてあげますよ」

そうですね。

「家以外で私の周囲十メートル以内に近寄らないようにしてください」

父の寂しそうな、とても切ない表情が見られただけでも十分な報酬といえるでしょう。少なくとも私にとつては。

「あつ、岬一いらつしゃ いませ！」

「…………」

店内でもう一服しようと戻つてきたら、ルリが執事服で働いていました。……成程。執事喫茶とはいいいものですね。実感しました。

「この小説を読んでくださっている読者さん、いつもありがとうございます。駄文生産者でええじゃないか作者の、とりえなしです。話が一段落したところで、読者さんに質問をしたいと思います。質問の内容ですが、下記の通りになります。

「これからこの小説を続けるにおいて、コメディと恋愛の比率はどうのぐりいがいいか

今の文章量（一話あたり千字以上二千字以下）で毎日更新を続けるか、更新のペースを落として一話あたりの文章量を増やすか

タイトルを新しくする（ええじゃないか そのさん など）か、そこに のまま更新を進めるか

どのキャラの出番を増やしたほうがいいか（好きなキャラは誰か）

他にも何か要望があるようだったら、それも書いてくださるとありがたいです。もちろんすべての要望にこたえられるわけではありませんが、できる限りのことはしたいと思います。「」意見がそれなりに集まるまで、ええじゃないかの更新はお休みしますので、「」了承ください。でも、前回のように一日で十分な量の「」意見が集まるようでしたら、すぐに連載再開します。

それでは最後に……この小説を読んでくださりありがとうございました。駄文ではありますが、これからもがんばりますのでぜひ読んでやってください。

文字数が足りないので、ショートコント。

「旦那旦那」

「なんだ義人。鬱陶しい」

「魔王」<sup>（）</sup>にしよう。よーし……アクションー！」

「拒否権なし！？魔王」<sup>（）</sup>にて主役が魔王かよ！普通勇者だろ！？しかもスター<sup>（）</sup>はええ！」

「ふはははは、世界は我がアモーレ軍団が乗っ取ったー」「ずいぶん陽気な軍団だな！魔王」<sup>（）</sup>しぐねえ！」

「…………」

「どうした？」

「……旦那、出番出番」

「……やつはせせとぞー、お前はこの勇者が倒してくれるー」（超棒読み）

「旦那、やつじやないだろ！」

「すまんな。あまりにもくだらな過ぎて、演技に身が入らんかった。小学校の学芸会並みのむなしさすら感じたもんでな」

「旦那のセリフは「へへへ、やつですな魔王様。あなた様にかなう者などこの世界に誰一人いやしませんぜ」だろ」「ツツ」<sup>（）</sup>はそこかよー？俺下つ端役ー？しかも性格悪いごますり野郎かよー」

「不満か？」  
「不満じゃー！大体これじゃ勇者役がいないだろ？がー！魔王野放しかよー！」

「別にそれでいいんだよ

「なぜにー!?」

「これは 魔王じつじ だからだよ」

「やつこいつとかよー。」

ぜひアンケートにご協力ください。

## 新人戦1（前書き）

意見が集まらないので場繋ぎです。早く続きを書け！  
という方は意見をください。意見が集まるまでは不定期になります。

それは夏休みも終わりにさしかかった、ある晴れた日の午前中のことだった。いつも通り、小倉さんの鬼畜メニューに耐え忍び、ようやく僅かな休息を手に入れた。ふう……頑張ったな、俺。もっと評価されるべきだと思うな、実際。

「三井」

「む？ 小倉さんが手招きしている？」

「なんですか？ もう上がつていいとか？」

「旦那、まさかそんなわけないだろ？」

まあ、俺もそう思うけどね。少しくらい希望をもつたつていいじゃないか。たとえ踏み躡られることがわかつても。

「三井、お前新人戦は『200メートルバタフライ』にバタ』で出る」

……希望を躊躇するどころか、深く重い絶望までサービスしてくれるとは、小倉さんとはなんと予想を裏切らない人なんだ。

「……なぜですか？」

「いや、200mバタフライの標準記録が妙に甘いからな。三分三秒ならお前でも切れるだろ」

「スタミナが持ちませんよ！」

「旦那、中学時代はバッタの選手だろ。しかも200mの

「義人は黙つてろ！ これは俺の問題だ！」

「中学時代の記録でも楽勝に県新人大会に出れそうだねー」

「何で中学の頃よりもハードルが低いんだ！？」

恐るべし、愛知県水泳連盟（高校の部）。中学の頃は全身全霊を込めても出場が叶わなかつた県の舞台に、こんな形でまた挑まされ

ることになるとは思わなかつたぜ。なのに今はちつとも嬉しくないから不思議！答えはこれから練習が億劫だからとはつきりしてるんだけどね！

「と、言つわけで三井はこれからバッタの練習に入れ  
「腰痛めますよ！」

「なあ、俺はどうなるんだ……？」

「義人は常人以上のスタミナと体の頑丈さがあるから大丈夫なんだ！俺は一般人！200mもバタフライ泳いだら疲れて溺れる！そして壊れる！」

「……だから中学時代は200mバタフライの選手……」

「義人は黙つとれ！」

「理不尽だ！」

「三井、これは決定事項だ。三井はバッタの練習に励め  
「やーいーやーいー、三井さまーみろー」

「……石井うぜえ」

「ああそれと石井」

「はいー？」

「お前は100mバタフライな」

「……」

あ、石井が固まつた。

「……じょ、冗談ですよねー？そんなー、バッタなんて泳いだら纖細な僕の体はずたずたにー」

「決定事項だ」

やーい石井、ざまーみろー。

そうして俺と義人と石井の三人は、揃つてバッタの練習（とにかくきつい。疲れる。下手打たなくとも体壊す）に励むこととなつたのだった。

ああ……俺はもう駄目なのだろうか……。体に力が入らない。浮遊感すら感じるこの状況は、現実の世界のものとは思えない。むしろ……もうここは違う世界なのだろうか……？もし、ここが死の世界なら悪くはないな……。

「よし、休憩は終了だ。次は200メートルを自分の種目で五本、ベスト+十秒以内で泳いで来い！」

「おい、田那？水に浮かんでるのはいい加減終わりにして、練習に入るぞ？」

「ぶくぶくぶく。

「ああ！イッキーが泣いてる！水の中でもわかるほど！」

「…………」

「ほれ、バッタ勢も早く始める」

もう嫌だ……。

バッタの練習も取り入れることになつてから三日目。今までクロールばかり泳いでいた俺と石井は、田に田にやつれていつた。特に石井の疲労感は相当なようで、いつもの陽気さは影を潜めていた。今日に至つては授業が終わるとともに、ダッシュで校門に向かつた（石井は徒步通学）のだが、張り込んでいた小倉さんに捕獲され、半泣きになりながら連れてこられたほどだ。気持ちは痛いほどよくわかるのだが、一人で逃げるのはよくない。嫌なことは皆で一緒に苦しもうではないか。

「なあ、義人？」

「俺はいつも通りのメニューだし、嫌といつまじのことでもないんだが。……もちろん疲れるけど」

くつ、義人に同意を求めたのが間違いだつたか。かといって石井はもうしゃべることすら致命傷になりかねんし……。どうすればいいんだ！？

「だから早く泳げ」

「旦那も壊れてきてるな、確實に。テンショングが異常だし、尚且つ体に力を入れようとしないし」

……これをいつもこなしている義人は凄いと思った。改めて。

そんでもつて本番（市内新人水泳大会）。

「……わーお」

200m泳ぎ終え、電子掲示板を見ると、俺の名前とタイムの横には標準記録突破を示す記号がついていた。記録を見ても、自己ベストを塗り替える好タイムだとわかる。

「よくやつた、三井」

「小倉さん、ありがとうござります。これが練習の成果ですね？」

なんだかんだで、県大会のプールで泳げるのはかなり嬉しい。このために厳しい練習をしたのだと思えば、少しほは報われた……と思っていたのだが。

「いや。違うな」

「え？」

「単にお前の体が成長して、出来上がってきたからだ。たつた数日の練習でそこまでタイムは伸びん」

「……」

言われてみればその通りだが、何か訛りとしない。そこは「練習の成果だな。これからも努力を続ける」くらい言ってください、教師なんですから。

「…………」

「よかつたな、石井。県に出れて」

「…………またここから数日一、あのメニューやらなことこなこの一

…………？」

「…………」

「…………」

「おーこ、一人とも、よかつたな…………つておこー!? 向むかわぬひと泣いてんだよー? 不気味だ!」

…………本当の恐怖は、ここからなんだな…………。じくじく。

人生初めての県大会（ただし新人戦）のプール。中学校時代には  
望んでもかなわなかつたこの舞台に、俺は立つことができている。  
……感動だなあ。この一ヶ月弱、小倉さんに苛められていたのが報  
われる瞬間だ……と、召集場所で感慨にふけつっていたのだが、それ  
だけでも結構な時間が経つていたらしい。係の人が俺たちの組（2  
00mバタフライ一組目）を呼びに来ていた。

「旦那、出番だぞ」

「おお、悪い。サンキュー」

義人（200mバタフライ一組目のため一緒に召集場所にきた）  
に教えられ、ようやくそのことに気付いたので、高揚する気分を何  
とか静めながら飛び込み台の後ろまで歩いていったのだが……。

「きやー！先輩ー！ふあいとおーーつーー！」

「なおくーん！がんばってーー！」

大声で応援する二人の女子のおかげで赤面することになった。な  
にこれ？公開処刑？

「うわ……恥ずかしい……」

くそ、義人が送り出すとき妙ににやにやしてやがったのはこれが。  
応援するにしても、もつと他にやり方だつてあるだろうに……どう  
して他の北高メンバーが見当たらないんだよ。二人が浮いてるじゃ  
ねえか。そしてその二人の声援を受ける俺はもつと浮いた存在じゃ  
ないか。……ああ、隣の人気が何とも言えない表情なのが気になる。  
てかいつも無視してくれよ。頼むから。君も「県大会は参加するこ  
とに意義がある」入賞は絶望的な仲間だろう。……そんな仲間に勝  
手にされても困るか。

「続いて、200mバタフライ一組目の競技を開始します……」

ああ、やつと始まる。出たいと思ってたはずなのに、今では早く  
終わつてほしいと思うまでになつたじゃねえか。情緒不安定な人か、

俺は。

「フレー！フレー！せ・ん・ぱ・い！！」

「なおくんー！がんばってー！」

……むしろ帰りたい。

県で十五位。これが今回の俺の記録となつた。とはいって、標準記録突破の人数が少なかつたがゆえのこの順位であり、悪い言い方をすれば下から三番目。自己新記録を出すこともなく、無難な記録で終わった。

「……やはり北高祭で練習量が激減したからか……」

「そうだねー。みんな軒並み成績が落ちてたからねー」

「まあ、今年最後の大会が終わって、これからは多少楽になるだろ」部員で集まって、がやがやと雑談をしていると。

「当然明日からは陸トレだ。ノルマは腕立て腹筋背筋スクワットなど、少なくとも百回ずつだ」

「……」「……」「……」「……」

「ああ、心配せんでも、メニコーはこれだけじゃないからな。期待してまつとれ。解散」

……相も変わらず絶望のどん底に陥れてくれやがりますね、この教師は。こうして翌日からの恐怖に苛まれつつ、県新人大会、今年最後の水泳大会が幕を閉じたのであつた。まる。

「いやああああーーー！」

あ、石井が発狂してる。ドンマイ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2590e/>

---

ええじゃないか それに

2010年10月8日13時29分発行